神様が宿る男

嶋　雄一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様が宿る男

【Ｎコード】
Ｎ７１１２Ｗ

【作者名】
嶋　雄一

【あらすじ】
天乃神人２４歳。コンピュータソフト製作会社に入社して2年になる。身長１７０センチ、体重９０Ｋｇのメタボ体型だ。生まれつきスポーツはまったくダメの運動音痴だが、正義感だけは人一倍強い。ただしその正義感は、いつもいい訳ばかりで実行されたことがない。そんな矢先、父親の神彦が交通事故で亡くなった。それを境に神人の人生が大きく変わり始める。
運動音痴でメタボの体型は2週間で２５Ｋｇも体重が減り、凄まじ

い身体能力を持った身体へと変化した。それぱかりか神と等しい力、神等力まで身に付いたのだ。それは身に付いたというのではなく、神彦が亡くなったことにより、神彦から神人に受け継がれたものだった。

天乃家は先祖代々、一子相伝の神を受け継ぐ家系なのだ。天乃家の男子の中にある神宇宙に、神が居るのだ。神宇宙の神から全てを教えてもらった神人は、その衝撃の事実に驚愕する。

神を受け継ぎ神等力を身に付けた神人は、悪の道に走った人たちの潜在意識が発するＳＯＳに導かれ、神等力でなければ解決できない問題に直面するようになる。それは神を引き継ぐ天乃家の宿命であった。超能力をも凌駕する神等力とは・・

第1章　神を受け継ぐ家系

ピ～ポ～、ピ～ポ～、ピ～ポ～、救急車のサイレンの音が、いつもとは違うように神人には聞こえる。そう聞こえる理由は分かっていた。救急車で運ばれているのは父親の神彦だからだ。サイレンの音は、「助けて！」「助けて！」と叫んでいるように聞こえる。

神人は眠っているように見える父親の顔をじっと見つづけている。救急車は神人が何を思っているのかなど無視するように、助けて！助けて！とサイレンを鳴らしながら病院へ向かって走っていた。

病院へ到着すると、神彦を乗せたタンカは外科手術室へと運ばれた。緊急手術だ。一刻の猶予もない。神人は手術室の前で手術が無事終わるのを祈りながら待った。神人に出来ることは父の無事をひたすら神に祈るだけだ。

1―2

天乃神人（あまのじんと）二十四歳。大学卒業後、コンピュータのソフト制作会社に就職し今年で丸二年になる。仕事はソフトの開発と営業を兼務している。

神人はどこにでもいるごく普通の若者だ。小さい頃から手先が器用で、図工の時間が一番好きだった。逆に苦手なのは体育。自分でもイヤになるぐらい運動神経が鈍く、徒競走では女子にも及ばず万年ビリ。勉強は出来たがクラスで目立つのは体育会系の生徒だ。

初恋は小学五年生のときだった。相手の名前は島崎仁美。美人ではないが、男子を惹きつける独特のオーラがあった。神人もそのオーラの餌食になった一人だ。彼女は男子生徒の憧れの的だった。中学の入学も段々と近づき、思春期に近づいた男子生徒の間では、彼女をめぐって静かな火花が散っていた。神人もその輪の中にいるのだが、勉強で一歩リードしたと思っても、体育でそれが帳消しになるどころかマイナスになっていると思っている。

体育の時間になると、俄然、体育会系の男子が目立つしカッコいい。反対に、頭は良くても運動音痴の非体育会系の男子はカッコ悪い。五十メートルを十秒近くかかって走る神人は、カッコ悪いどころかミジメだった。

鉄棒では逆上がりも出来ない。跳び箱はたったの三段すら飛べない。夏のプールのときは五メートルも泳げない。ソフトボールではバッティングも守りも走りもダメ。体育の時間はいつも皆の笑いものだ。

天は二物を与えずと言うが、体育会系の男子にしても神人にしても、それは当てはまった。

体育会系の中でも村島健太は特に運動神経が良かった。短距離走も長距離走も早い。ソフトボールは、打っても投げても守っても他の生徒より抜きん出ている。とにかく村島は体育の時間だけは目立った。カッコいいのだ。

神人は運動音痴を勉強でカバーしようと思った。もともと頭のいい神人は、島崎仁美を振り向かせるために一生懸命勉強した。その結果成績は学年トップを守っている。村島は勉強に関してはビリかブービーだ。

外見はポッチャリの神人、対照的に村島はスポーツマンそのものだ。小中学校のとき女子にもてるのはスポーツが出来るか頭のいい男子だ。そういう意味で神人と村島は女子に人気があったが、神人は島崎仁美しか眼中になかった。それは村島も同じだ。神人と村島。対照的な二人だが不思議と馬が合い、親友と呼べるほど仲がいい。ただ、島崎仁美を巡っては二人はライバルだ。

村島は中学二年になって身長は百七十五センチになり、より精悍に変わった。野球部のエースとして活躍している。

神人は相変わらずの運動音痴でポッチャリ体型は変わらないが、身長は百六十センチになった。そんな共通点のない二人に唯一共通点がある。それは自分の思いを島崎仁美に打ち明けられないという引っ込み思案な性格だ。

1―3

時は流れ中学を卒業した神人は、現在に至るまで村島とも島崎仁美とも会ってない。会う機会が一度もなかった。高校卒業後、小学校の同窓会があったのだが、その日はあいにく都合が悪く神人は出席できなかった。

運動音痴の神人は小さい頃から一度も殴り合いの喧嘩をしたことがない。口喧嘩はしても殴り合いの喧嘩にはならない。それは殴りあいになる前に神人が逃げるか謝るからだ。運動神経の鈍い神人は、喧嘩をしても負けることは目に見えていた。

正義感だけは人一倍強いのだが、正義感を発揮すると身の危険に及ぶこともある。神人は危険を避けるだけの体力も何もない。避けるとしたら自分以外の誰かの力を借りるしかない。例えば警察官だ。

通勤電車の中で、神人はしばしば正義感が疼くような光景に出会うことがあるのだが、それを見て見ぬ振りをするのが常だ。自分の身に危害が及ぶのを考えると正義感は疼くどころか跡形もなく急激に萎んでしまう。萎んでしまった後、必ず後悔の念にさいなまれる。

昨日の夜もそんな場面に出くわした。夜八時ごろ神人が帰りの電車に乗り込んだ時、八十歳過ぎと思える老婆が乗ってきて神人の隣に立った。車内は混んでいて、二人が乗ったとき席は空いていなかった。背の低い老婆は吊り革に手が届かない。神人の前のベンチ席に座っているのは、人相の良くない大きな男だ。三十歳前後に見える。バッグを横に置いて二人分の席を占領している。

神人の正義感が雨後の竹の子のように急速に姿を現した。目の前の男にバッグをどけるように言えば済むのだが、そのひと言が出な

い。竹の子は途中でポッキリ折れると最初から何事もなかったかのように、神人は目を閉じて吊り革を掴んだ。

1―4

電車が動き始め、老婆は吊り革も掴めずにふらついている。そんなところに運良く乗務員が現れ、神人の前の男に注意した。

「お客様、バッグはヒザの上か棚の上に置いていただけないでしょうか」

男は怒ったような目で乗務員を見たが、言われたことに従った。

「お婆ちゃん、席が空きましたから座ってください」

乗務員は優しい笑顔で、神人の隣の老婆を促し座らせた。

「ありがとうございました」

老婆は深々と乗務員に頭を下げ、隣の男にも礼を言った。男は恐縮したような表情で軽く頭を下げ、読んでいた週刊誌に視線を戻した。後悔の念にさいなまれ老婆に視線を合わせることが出来ず、その場に居づらくなった神人は、伏し目がちに視線を落とすと隣の車両に移動した。

後味の悪い思いを引きずりながら帰宅した神人に、もう一人の神人が現れ、触れられたくない今日の出来事に対して質問をしてきた。

「神人。お前は何て卑怯な人間なんだ。自分さえ良ければ人はどうなってもいいのか？　お前のせいでお婆さんは辛い思いをしてたんだぞ」

もう一人の自分は厳しく叱責した。別の自分から叱責されると、神人が言うのは決まっている。弁解だ。

「違う。俺は注意しようとしたんだ。でも何故俺が注意しないといけないんだ?他にも見てる人はいたんだ。どうして俺だけ責めるんだ！」

「俺はお前に聞いてるんだ！　お前はどうなんだ?　自分を悪くな

いと思ってるのか？」
「そうじゃない。注意して自分に暴力を振るわれたらと思うと出来ないんだ。俺は体力もないし喧嘩もしたことがない。人を助けて自分が痛い目に合うのはイヤだと言ってるだけだ」
「それなら今の逆で、もしお前に体力があって喧嘩が強かったら、見て見ぬ振りはしないのだな！」
「当たり前じゃないか」

いつもこのパターンで自問自答は終わる。それが神人にとって後悔の念から開放される唯一のストーリーとなっている。結果的には言い訳の結末だ。言い訳の結末がもたらすのは、後味の悪い何ともいえない嫌な思いだ。
運命というのは不思議なもので、時々正反対のものを見せてくれる。正確には見せつけられるのだ。

1―5

それはいくつかの偶然が重なった出来事だった。ある晩、仕事を終えた神人は、いつものように帰りの電車に乗り込んだ。車内は帰宅の人で満員とまではいかないが、神人が乗り込んだ時に空席はなく混んでいた。

ドア寄りの場所は混んでいたが、車両中央にポッカリと三人ほど立てる空間が見えたので、神人はそこへ進んだ。その空間は正義感のない人は入ることを許されない、異次元の場所だった。

異次元の空間を作り出しているのは、暴力の匂いを発散させて座っている、二十代後半ぐらいの大柄な男だ。車内は混んでいるにも関わらず足を組み、横柄な態度で座っている。荷物を座席に置き三人分の席を占領している。

神人は男の前に立ち、「しまった！」と思ったが、徐々に人が増えていて他に行く場所がない。神人の左右には一人分の異次元空間があるが、誰もその空間に立とうとはしない。

発車五分前に、その異次元空間に二人の乗客が入ってきた。一人は荷物を持った老婆、一人は身長が百八十センチを超えている若者だ。神人は二人に場所を譲るために、男の前から少し横に移動した。

老婆が立った場所は男の正面で、神人、老婆、若者という並びだ。神人は老婆を座らせたいと思ったが、目の前の男に声を掛ける勇気は出てこない。心の中で自分の情けなさを老婆に詫びるしかなかったが、神人の思いが通じたのか、

老婆の隣の若者が男に声を掛けた。

「すみません。お婆さんを座らせてもらえませんか」

男は目をつぶって寝たふりをして、若者の声にまったく答えようとしない。

「すみません・・」
若者は男の肩を軽く叩きながら言った。男は目を開けると、申し訳ないといった表情の若者に、怒りのこもった視線を浴びせ脅すような口調で言った。
「なんやお前！　人が寝てるのを起こしやがって。文句あんのか！」
男の声に車内は水を打ったように静まり返った。誰もが若者の次の出方を待っている。神人は自分が言われたかのように身体が硬直して動けない。金縛りにあったような感じだ。

男の声に若者は視線で答えた。穏やかだった表情が険しくなっている。その視線には男を威圧する迫力があった。男は自分の敵う相手ではないことを知ると慌てたように立ち上がり、ドアが閉まる直前に降りていった。
神人の目の前には三人が座れる空間が現れた。若者は老婆を座らせると自分も座った。神人も座れるのだが、自分は座る資格がないと思った神人は、席の前から逃げるように若者の前に移動してつり革を掴んだ。
「俺はなんて情けない男なんだ」自分自身の態度に打ちひしがれ、ガックリと肩を落とした神人の視線が若者の視線と合った。
「神人じゃないか！」
視線を外そうとした神人は、若者が放ったひと言に再び視線を戻した。

「俺だよ。村島だよ。思い出したか？」
「おぉ～お、健太かぁ！　誰だか分からなかった。久しぶり！」

二人はついさっきの男のことなど忘れ、約十年ぶりの再会に時の流れも忘れ小声で語り合った。運動神経抜群の村島は、ひとつのスポーツに特化していれば必ず頭角を現していたはずだ。ところが中学の時は野球、高校時代は柔道、大学の時は合気道とバラバラだっ

た。それ故、どれを取っても中途半端で大成していない。そんなことを知る由もない神人は、親友だからこそ言える言葉を村島に遠慮することなく浴びせた。

「お前が羨ましいよ。何の苦労もストレスもないように見えるんだけど・・」

「アホかお前は。そんな人間がいるわけないじゃないか。俺をそんな風に見てるんだったら、お前はアホだぞ」

「健太ちょっといいか・・」

そう言うと神人は村島の耳の近くまで顔を近づけ、他の乗客に聞こえないように周りに気を配りながら言った。

「さっき男に注意した時、恐くなかったのか?」

「まぁ、恐くないと言ったらウソになるけど、喧嘩して負ける気はしないからな・・」

村島の勇気は、自らの体力と喧嘩の強さに裏打ちされたものだった。やっぱり喧嘩の弱い俺みたいな人間は関わり合いにならないほうがいいんだと、神人は納得した。それは納得というより、自分の後ろめたさの気持ちをかばう為の勝手な解釈にすぎなかった。

1―6

神人はひたすら無事を祈りながら待つしかなかった。隣では母親の京子も同じ想いで待っている。手術は六時間にも及んだ。手術室のドアが開き、移動ベッドに乗せられた神彦が出てきた。口には酸素マスクが付けられ、眠っているように見える。手術は成功だったのか？　神人と京子の思いに答えるように、主治医が説明を始めた。

「出来る限りのことはしましたが、内臓と脳の損傷がひどくて、助かったとしても後遺症が残るでしょう。今夜が山場です。後は祈るだけです」

神彦は病室に運ばれ、ドアには面会謝絶の札が掛けられた。

ことの始まりは、神彦と神人が久しぶりに一緒に飲みにいった夜だった。まだ五月半ばだというのに、今夜は何故か蒸し暑い。まるで熱帯夜のような感じだ。こんな夜は冷えた生ビールを飲むに限る。

「お前と一緒に飲むのは久しぶりだな」

神彦は嬉しそうに言った。

「久しぶりも何も、僕が社会人になってから初めてだよ」

生ビールで喉の渇きを潤した神人が、生き返ったという表情で言った。今夜の生ビールは格別な味がする。

「そうかぁ。じゃあ、前に一緒に来たのは大学生の時になるなぁ」

神彦は神人との時間が余程嬉しいらしく饒舌になっている。神人の酔いが回るほどに親子の会話は弾み、楽しい時間が過ぎていった。普段なかなか話す時間のない神人だったが、何故か今夜は神彦の様子が妙に気になった。

「今夜は楽しかったよ。これで思い残すことはないな」

「父さん、どうかしたの？　様子がおかしいよ。まるで死ぬ前みた

いな口ぶりだよ」
「人生いつ何が起きるか分からんからな。母さんのこと頼んだぞ」
「なんだよ。どうしたの。飲みすぎじゃないの？　大丈夫？」
神人は神彦の目に光るものがあるのを見つけた。さっきの言葉といい、涙といい、今夜の父さんはなんだか変だ。神人はその理由を知りたかったが、神彦は、「何でもない」を繰り返すだけだ。

二人が店を出たのは午後十時半。七時半から飲み始めたので三時間飲んでいたことになる。酔っているようには見えないが、店を出て歩いている時も神彦の視線は遠くを見ており、何だか今夜限りで遠くへ旅立つ旅人みたいに見える。
店を出た二人が五分ほど歩いた時だ。後ろから蛇行運転しながら、一台の黒い乗用車が迫ってきた。明らかに飲酒運転と思えるその乗用車が、突然急加速した。運転している男はハンドルに頭を付けている。泥酔状態だ。
急加速した乗用車は、神彦と神人目がけて突っ込んできた。その瞬間、不思議なことが起きた。
二人ともクルマに跳ねられて当然の状況だったが、神人の身体がまるで瞬間移動したかのように、その場所から五メートルほど移動したのだ。神彦はそのまま跳ねられ頭蓋骨骨折の重傷を負った。内臓もやられている。神人は、神彦が咄嗟に自分を押して助けてくれたのだと思った。運動音痴の神人だけだったら確実に跳ねられていただろう。

1―7

面会謝絶の病室の中で、神人はひたすら祈り続けた。自分を身をもって守ってくれた父親を、こんなことで死なせるわけにはいかない。まだ何も親孝行らしきこともしていない。それにもまして、死ぬには余りにも早すぎる。

祈り続けている神人を、深夜零時を過ぎた頃から猛烈な睡魔が襲ってきた。とても瞼を開けていられる状態ではない。睡魔に負けてしまった神人は、椅子に座ったまま眠ってしまった。

「神人、神人」

深い深い眠りの中にいる神人を誰かが呼んでいる。神人はもっと眠りを貪っていたかったが、声の主は眠ることを許してくれそうもない。ぶつぶつ文句を言いながら目を開けた神人は、目の前に立っている声の主を見て驚いた。

「父さん、助かったんだね！　このまま死ぬんじゃないかと思って、とっても心配してたんだよ。先生を呼んでくるから待ってて。一緒に帰ろう！」

「神人、私はもう行かなくてはならないんだ。お前に別れを言いに来たんだ。母さんのことを頼んだぞ。それからもうひとつ、私が行ったらお前にいろいろな変化が起きるけど、自信を持って正義のために生きなさい。悩んだ時は私を呼びなさい。いつでもお前のそばに居るから・・」

「父さん、なに訳の分からないこと言ってるんだ。母さんが待ってるから早く帰ろうよ」

神人の言うことに答えず、神彦はゆっくりと頷いた。その目は、これでお別れだ。母さんを頼んだぞ。と言っている。神彦の全身が金色に輝き始め、少しずつ離れ始めた。神人は駆け寄り腕を掴もうと

するが、すり抜けて掴めない。
「ウソだろ、父さん。行くな。行かないでよ！　お願いだから戻ってきてよ。　父さん、父さん、父さあぁぁぁん」

肩を揺すられ神人は目を覚ました。顔を上げてみると、心配そうに覗き込んでる看護婦さんの顔があった。
「随分うなされてましたけど、大丈夫ですか？　付き添い用のベッドがありますから、横になられたほうがいいんじゃないですか？」
「看護婦さん、父さんが何処かへ行ってしまったんですけど・・」
今では看護士と呼ぶが、神人は看護婦さんのほうが言いやすいので看護婦さんと呼んでいる。神人は寝惚けていた。夢で見た光景を現実と勘違いしていた。
「お父さんはベッドで寝てますよ。ほら」
看護婦の視線の先、神人の目の前のベッドに神彦は寝ている。神人は神彦の姿を見ても信じられなかった。夢が余りにリアルだったからだ。生死の境を彷徨っている父親を見て気が動転してるのだろうと思った看護婦が、安心させるように優しく言った。
「私たちがついてるから大丈夫ですよ。少し休んでください。心配はいりませんから」
「すみません。じゃあ僕少し寝ますから、父のことよろしくお願いします」

付き添い用の簡易ベッドに横になった神人は、すぐに寝息を立て始めた。神人が深い眠りについたと同時に、またしても神彦が現れた。今度は神彦は何も言わずに黙っている。いくら呼びかけても優しい笑みを返すだけだ。まるで、今の時間を満喫しようとしているように見える。
その時だ。神彦の姿が急に薄れ始めた。旅立つ時が来たように、神彦は手を振っている。声は聞こえないが唇の動きから、「母さんを頼む。自分を信じて進みなさい」と言っている。

神彦の姿が段々と透け始め、まるで透明人間になっていくかのように神人の視界から消え始めた。「父さん、行かないで！」神人は必至で叫んだが声にならない。やがて神彦の姿は完全に消え、その瞬間、神人は目が覚めた。

1―8

目が覚めた神人の耳に飛び込んできたのは、誰かが走っている足音だ。足音からして慌てている様子が分かる。その足音は神人の部屋に飛び込んできた。

何事が起きたのかと半分寝ぼけている神人は、ＡＥＤを持っている医者と看護婦を見て状況が把握できた。ＡＥＤとは自動体外式除細動器のことで、心臓が停止した時に電気ショックを与えて心臓を蘇生させる医療機器だ。

看護婦が神彦の胸にＡＥＤをセットし、スイッチを入れた。充電した後、電気ショックを与えた。神人は祈りながらその様子を見守るしかない。今は神彦が生き返るように祈ることしか出来ない。

神人は必死に祈ったが、それは神様に届かなかった。医者の額にはうっすらと汗が滲んでいる。看護婦三人も同じだ。ベッドに寝ている神彦を見ていると、眠っているように見える。朝になったら目を覚ましそうな気がする。

神彦が死んだということが信じられない神人は、医者と看護婦が出て行ったあともじっと神彦を見つめ続けていた。神彦が死んでから五分ほどが経った時だ。突然、神人の脳裏に強烈な光が現れた。その光は神人の脳全てを覆いつくすほどの大きさで、金色がかった白色というか、神々しいとしか言えない色に輝いている。

余りにも強烈な光に立っていられない。目まいがしてるような感覚だ。神人はゆっくりと簡易ベッドに横になった。目を開けると、光で目をやられそうな気がして開けることが出来ない。

その光は感覚的に一分ぐらいで消えてしまった。今の光はなんだ？　疲れてるのか？　神人は答えが出ないことは分かっていた。簡易ベッドから起き上がって神彦を見てみると、何かを成し遂げたよ

うな、自分の使命は終わったような安らかな表情をしている。気のせいか、さっきとは表情が変わったような気がする。

神人は神彦の表情が変わったのもそうだが、自分自身も何かが変わったような気がしていた。その何かは言えないが、何か感覚的というか、精神的というか、とにかく何かが変わったのは間違いない。

しばらくして主治医から神人に説明があった。神彦が亡くなったのは午前二時三十五分。脳にも損傷を負っていたが、直接の死因は内臓破裂による出血多量が原因だった。神人は神彦が亡くなったにも関わらず、なぜか神彦が近くにいるような気がしていた。

1―9

父親の神彦が亡くなった翌日から、神人は同じような不思議な夢を毎日見るようになった。その夢は、大きな金色の光が現れ神人を包み込んでしまうのだ。神人は光の中にいるのだが眩しくない。そこは地球上の世界ではなく、想像もつかない別世界、まるで宇宙空間のように思える。

そこに自分が居るのが見える。その自分はサラリーマンの自分とは明らかに違う。現実の自分はポッチャリ体型で運動音痴なのだが、光の中の自分は精悍な顔つきで、ずば抜けた運動神経の持ち主なのだ。

それに加えてＳＦ映画で見たような超能力が使える。念力、瞬間移動、テレポート、冷凍現象まで起こしてしまうのだ。神人は夢を見ながら夢の中で、ヒーロー崇拝的な自分の性格が、こんな夢を見せているのだと思っていた。

その夢は一週間も続いた。八日目の朝、いつものように顔を洗って鏡を見た神人は、ポッチャリ顔の頬の贅肉が減り、シャープなルックスになっていることに驚いた。体重を計ってみると、九十キロだったのが八十キロに減っている。

「ダイエットしたわけでもないのに、一体どうしたんだろう?」

その後も体重は減りつづけ、贅肉でメタボそのものだった体型は、プロボクサーのような引き締まった筋肉質の身体へと変貌を遂げていった。一週間後に再び体重計に乗った神人は驚いた。なんと六十五キロまで減っていたのだ。何もしてないのに二週間で二十五キロも減量したのだ。

顔つきは野生的で精悍になったが、ポッチャリ顔のときの面影は残っている。会社では神人のあまりの変わりように、整形手術したという噂も立っていた。ダイエットで苦しんでいる女性や中年太り

のオヤジ連中からは、ダイエットのやり方を教えてくれと連日言われていたが、本人にもなぜ体重が減ったのかが分からない。顔つきまで変わったのには、他人どころか自分が一番驚いていた。

今思えば父親の神彦は、今の神人と同じ体型、同じ顔つきをしていた。母親の京子は神彦が亡くなってから、

「神人、最近あなた、段々とお父さんに似てきたわね」

と、口癖のように言っている。そう言われれば、自分でも父親に似てきたと思う。父親は神人と違って運動神経が良く、スポーツは何でも出来た。神人が運動が出来なくて落ち込んでいると、

「心配しなくても、そのうちお前は誰よりもスポーツが出来るようになる。今はまだその時期じゃないんだ」と、慰めには程遠いことを言っていた。

徒競走でビリだったとき、跳び箱が飛べなかったとき、逆上がりが出来なかったときなど決まって口にする言葉だった。神人は、「人の気も知らないで適当なことを言わないで！」と、食って掛かったこともあった。

「もしかしたら父さんの言っていた時期というのは、今かも知れないぞ」

ふと神彦の言ってたことを思い出した神人は、早速ジャージーに着替えると外へと飛び出した。運動音痴の神人は、未だかつて自らジョギングをしたこともなければ、外でスポーツをしたことはなかった。

運動といえば学校の授業以外ではやる気もなければ、やりたいと思ったこともない。スキー、スケート、ゴルフ、ボーリングもダメ、バッティングセンターでさえ行く気がしない。強いて言うならスポーツとは言えないが、やるのはビリヤードぐらいだ。

その神人が生まれて初めて、自分から走ってみようという気になったのだ。今日の神人は身体を動かさずにはいられなかった。何か

が違う。明らかに違う。それを確かめたかった。一秒でも早く確かめたかった。

ゆっくりとジョギングしながら、近くにある緑地公園まで走った。公園に着いた神人は周りを見回した。夜九時の公園に人影はない。大きく深呼吸をした神人は全力でダッシュした。

「風になった！」

そんな感じだった。とにかく身体が軽いのだ。万年ビリの徒競走のときと比べると、異次元の感覚に思える。神人はストップウォッチを持ってきていた。だいたいの感覚で百メートルのところに目印を付けると、再び全力でダッシュした。今度はスタートと同時に、ストップウォッチのスタートボタンを押した。

目印を付けた百メートルのところでストップボタンを押した。かかった時間を見たとき、神人はストップウォッチが故障していると思った。なぜなら四秒と表示されていたからだ。百メートルを四秒と言えば、動物のなかで俊足を誇るチーターに匹敵する早さだ。

次に神人は、静止した状態で力いっぱいジャンプしてみた。いわゆる垂直飛びだ。一メートルほどは跳べるのではないかという気がしていたが、その結果に自分自身が仰天した。目測ながら五メートルは飛んだのだ。

「もしかしたら、さっきの四秒も本当の数字か！」

神人はそれを確かめるべく全力で走った。凄まじい早さだ。時速百キロを超えているのは間違いない。頭の中で数えた数字は四秒に到達する手前だった。

「一体俺の身体はどうなったんだ？」

神人は誰も質問に答えてくれないのは分かっていたが、今の状況においては自問するしかなかった。まさかその質問に答えてくれる人がいたとは。否、正確に言えばそれは人ではない。人を超越した人。桁違いの能力を持った人。神だ。神が神人の質問に答えてくれ

た。

1－10

「神人よ。我が愛する息子よ。私はそなたの神宇宙に住んでいるものだ。人間世界では、私のことを神と呼んでいる。神人よ。今から私が言うことを心して聞くが良い。そして私の教えを守り、正義のためにその力を使うのだ」

突然頭の中に聞こえてきた声に、神人はキョロキョロと回りを見回した。、これほど鮮明な声であれば、周囲五メートル以内に声の主がいるはずだが、神人の考えは期待はずれだった。

声の主の神は、そんな神人の考えなど無視するかのように話し始めた。話すというより、神の言いたいことがそのまま神人の脳裏に現れるのだ。例えるなら、膨大な量のデーターが、数秒の間に脳に刻み込まれるようなものだ。

通常であれば、人間の脳では処理しきれないほどの膨大な量の情報だが、不思議と神人は理解することが出来た。その内容を噛み砕いて言えば、神は次のようなことを伝えた。

神の住む所、神の住む空間を神空間（じんくうかん）、または神宇宙（じんうちゅう）という。神宇宙は満天の星が輝く広大な宇宙にもある。地球上にもある。そして人の中にもある。

神の住む神宇宙とは目に見える宇宙だけではなく、意識の中にある宇宙でもあるのだ。分かりやすく言うなら、意識の中の宇宙は小宇宙だ。小宇宙の中に、神の住む神宇宙がある。神は人の中にも住んでいるのだ。

神彦の中の小宇宙、即ち、神宇宙に神は住んでいた。だが全ての人間に神宇宙があるかというとそうではない。神宇宙という特殊な世界を持っている人間は全世界六十八億人の中で、おそらく神彦以外に二人、ないしは三人だろう。その中の一人が神人だ。

天乃家は代々、男一人しか生まれない。そしてその男の子には必ず神宇宙が受け継がれる。生まれながらにして神を受け継ぐ家系なのだ。神が宿る人間なのだ。それは天乃家に受け継がれる血筋ではなく、神の意思でそうなっているのだ。

その神が宿る人が死ぬと、神は息子の神宇宙に移り住むことになる。神の引越しだ。それまでは息子は神のことも神宇宙のことも知らないし、そのことについて親から聞かされることもない。このことを話すのは禁止されており、神が移ったときに神自身が知らせてくれる。言わば門外不出、他言無用の一子相伝の神秘の世界、掟なのだ。

そして神が宿った人間は、神が持つ力を使えるようになる。神と同じと考えれば分かりやすいだろう。いわゆる超人になるのだ。それと同時に様々な問題を引き付けるようになる。問題は、それを解決出来る者のところへやってくるのだ。それは持って生まれた宿命であり、逃げることも変えることも出来ない。

超人となるのが幸か不幸かは分からない。ただ言えるのは、天乃家は神に選ばれた神の住む特別な家系なのだ。

神の言葉を直接聞いた神人は、頭が混乱していた。神がウソをつく訳はないが、今まで父親から何も聞いていなかったことを突然明かされたのだ。その内容は衝撃的なものだ。信じろと言われても、はい分かりましたとは言い難い。

だが相手は神だ。それに加え、神は先祖代々から天乃家の神宇宙に住んでいるのだ。今話し掛けてきているのは本当に神なのか？　神の名を借りた良からぬ者ではないのか？　神人の考えていることは、神宇宙の神はすべてお見通しだった。

「神人よ。疑問を持つ必要はない。私の力はすでにそなたに与えてある。身体能力が劇的に変わってるが、人間世界でいうところの超能力も与えた。そなたは私の分身となったのだ。自分で確かめるが

良い。ただし、その能力を私利私欲に使ったら、神罰が下ると心しておくが良い」

神宇宙の神からの大量の情報は、一瞬にして神人に与えられた。常識的に考えると、天乃家代々の情報を全て伝えようと思えば何日もかかるのだが、神はそれを数秒で神人の意識に伝えてしまった。神人もまたそれをすべて理解することが出来た。不思議としか言いようがない。

「神様、超能力も与えたと言われましたけど、どうやったら使えるのですか？」

「神人よ。考える必要はない。イメージすれば良い。イメージするだけで超能力は発揮される」

「どんな超能力が使えるのですか？」

「人間が持っていない能力を超能力と呼べば、あらゆる能力と言える。超能力という言い方のほかに、魔法と言ったほうが分かりやすいだろう。イメージすれば実際にそれが起きる」

神人は神の言葉を信じ、帰宅すると早速超能力を試してみることにした。神の言われたようにイメージしてみることにした。テーブルの上に置いてあるコーヒーカップが、空中に浮くことをイメージしたが何も起きない。

ボールペンやリモコンなど、置いてあるものを動かそうとイメージしたが、やはり何も起きない。三十分ほどやってみたが、ティッシュペーパー一枚すら動かすことが出来ない。

「俺には無理か。神様が言ったことはウソなのか？　そもそも俺が神様を引き継ぐこと自体が変だよな。他にも優秀な人がいるのに。あぁあ、やぁめた」

神人は独り言を呟きソファーに寝転んだ。寝転んでいるうちにウトウトし始め眠りに入ろうとしたとき、意識の中に神が現れた。

「神人よ。考えるのとイメージするのとは違う。そなたは考えてい

るだけでイメージすることが出来ていない。コツを掴めば簡単だ。
そなたを頼っていろいろなトラブルがやってくるだろうが、超能力が使えなくては、自分自身の命が危なくなることもある。使えるようになるまで練習することだ」

1―11

神が消えたのと同時に神人は目を覚ました。

「冗談じゃない！　超能力が使えないと命が危なくなるなんて。神様も勝手だなあ。父さんは文句も言わないで引き受けたのかなあ」

独り言を呟きながら無意識にテーブルに視線を移した神人は、ティッシュペーパーが宙に浮いているところを思い浮かべた。思い浮かべたと言うよりイメージしたという感覚だ。その瞬間信じられないことに、イメージしたのと同じことが起きたのだ。

「そうか！　神様が言ってたのはこういうことだったのか」

なかなかイメージするという感じがつかめない神人に、神がイメージすることを教えてくれたのだ。一度その感じを覚えてしまうと、あとは簡単だった。神人は部屋中のものを浮かべたり動かしたり、瞬間移動させたりしてみた。自分でやっていながら、それは信じられない光景だった。

イメージするという感覚を覚えた神人は、しばらく練習しているうちに、それを意識することなく超能力を使えるようになっていた。超能力は神の言ったとおりだった。ケーキをイメージすればケーキが目の前に現れた。超能力というより魔法だ。

神人には超能力でも魔法でも呼び方はどうでも良かった。神の使う能力を授かったのだ。神等力（じんとうりき）だ！　神人はふとその言葉が浮かんだ。神通力とは仏教で使う言葉だが、神人が授かったのは神通力ではない。神と等しい力、言うなれば神等力。今の自分の能力にピッタリの呼び名だと思った

神等力の使い方をマスターした神人は興奮していた。ＳＦ映画の世界だと思っていたことが、現実に存在することが信じられない。

しかも自分がその当事者なのだが、神人にひとつの疑問が湧いた。

「神様、どうして神様が自分でトラブルを解決されないんですか？わざわざ僕に神等力を与えなくても、神様がその力を使えば済むことではないのですか？」

「神人よ。私の力を人間界で使うことはできない。それが決まりなのだ。だからそなたに私の力を与えたのだ。言うなれば私は、そなたのパワーの源なのだ。それが神宇宙に住む私の使命なのだ」

神の力を使えるようになった神人に、その力を頼ってトラブルが寄ってくる。それが神を受け継ぐ家系の宿命なのだ。その宿命から逃げることも避けることもできない。遭遇したトラブルを解決することが、神人に与えられた使命なのだ。

1―12

力を与えられた翌日の土曜日、神人は母親の京子と一緒に伊豆を目指してクルマを走らせていた。親孝行する前に父親が逝ってしまい、後悔の念にさいなまれていた神人は、浅はかな考えとは思いつつも京子を旅行に誘ったのだ。

当然のことながら京子は驚いた。父親が死んだばかりだというのに旅行に行こうと誘われたからだ。だが神人は真剣だった。今旅行に行くことが良いのか悪いのかは別にして、旅行を思いついたこと事体が、父親からの頼み事のような気がしたからだ。

神人のクルマはトヨタのプリウスだ。土曜日だが、東名高速を走っている長距離便のトラックは多い。走行車線を法定速度で走っているクルマもあれば、時速百二十キロ以上出てるのではないかと思えるスピードのクルマもいる。神人は時間に追われているわけでもないし、事故でも起こしたら大変ことになるので、安全運転で走行車線を走っていた。

ふとバックミラーに目をやった神人は、それに映った一台のトラックが、あっと言う間にプリウスの真後ろに迫ったのに驚いた。トラックはプリウスにぶつかる寸前に、急に追い越し車線に進路を変えた。追い越し車線を走っていたセダンが慌ててブレーキをかけ、あわや接触事故を免れた。

そのトラックは追い越し車線と走行車線を我が物顔で、方向指示器も出さずに進路変更しながら走っている。危険極まりない運転だ。一歩間違えば接触事故を起こし、大惨事になりかねない。

神人はそのまま安全運転で走行車線を走っていたが、トラックが走っている追い越し車線が詰まっていた。その原因は、一台の軽自動車が低速で走っていたからだ。

トラックのドライバーはイライラし始め、前のクルマを煽るよう

に左右に車体を揺らせ始めた。ジグザグ運転みたいな感じだ。その横を神人のプリウスが通り過ぎようとした時、トラックは方向指示器をつけずに急に割り込んできた。

「あぶない！」

助手席の京子が大声を上げた。。急ブレーキを掛けたら事故になるのは間違いない。咄嗟にそう判断した神人は、クラクションを押し続けた。トラックはクラクションの音に驚き追い越し車線に戻ったが、それから神人に災難が降りかかって来る事になる。それは超能力を授かったことによる、トラブルを引き寄せる宿命の始まりだった。

追い越し車線の軽自動車は相変わらず低速で走っている。運転しているのは中年のおばさんだ。まったく後ろを見ていなくて、自分が迷惑かけているということを分かっていない。

プリウスの横を走っていたトラックが消えた。神人はそう思ったが、トラックはプリウスの真後ろにいた。車間距離は二メートルほどしかない。煽るように右に左に車体を揺らしている。神人は、前を走っているワンボックスの前に出るために加速した。

追い越し車線に出るとワンボックスとの距離を見て、その前に出た。これでトラックとプリウスの間にワンボックスが入った形になった。ところがトラックは強引な車線変更を繰り返し、無理やりプリウスの前に割って入ると、ブレーキをかけたりジグザグ運転をしたりと神人に嫌がらせを始めた。神人が鳴らしたクラクションに腹を立てたのだ。

「神人。トラックを先に行かせましょう。事故でも起こしたら大変よ」

「そうだね。ああいうバカには関わらないほうがいいね」

神人は速度を落としてトラックとの距離を空けることにしたが、トラックも速度を落としてプリウスから離れようとしない。神人は追い越し車線に出ると、百四十キロまで一気に加速した。トラックとの距離も一気に離れた。

そのままの距離を保って走っていると、パーキングエリアまで二キロメートルの標識が見えた。トイレと自動販売機だけの単なるパーキングだ。神人はそのパーキングに入ることにした。走行車線に入ると、しばらく走ってパーキングに進路を変えた。

あろうことか、さっきのトラックもパーキングに入ってきたのだ。バックミラーでトラックを確認した神人は、戦いは避けられないと感じた。神人はプリウスをトイレに近い位置に駐車した。京子はクルマから降りるとトイレへと歩いていった。

トラックはプリウスから十メートルほど離れたところに停車した。降りてきたのは二人の男だ。ニッカポッカのズボンにランニングシャツという格好だ。二人とも百八十センチを超えていて、ボディビルで鍛えているのか、がっしりとした筋肉粒々の体格だ。

短髪で強面のサングラスを掛けた姿は相手に恐怖を与えると同時に、戦闘意欲もなくさせる迫力だ。おそらく今までにも幾度となく、多くの市民に迷惑をかけてきたと思える。今まさに神人は彼らの標的になっていた。

彼らはゆっくりと神人に近づいてきた。その距離が二メートルほどになったとき、一人の男が脅すように言った。

「おんどれ、よくもワシらの邪魔をしてくれたな！　今更謝って済むと思うな。腕の一本も折られる覚悟はあるんやろうな！」

男たちは小柄な神人が震えながら許しを請う姿を想像していたが、期待は見事に裏切られた。許しを請うどころか、神人は男たちの視線を真っ向から受け、平然と立っている。脅しがまったく効かないのだ。それどころか神人の目に宿る光を見た途端、男たちは触れて

はならないものに触れてしまったことを後悔した。

1－13

たかだか、身長百七十センチほどの神人が全身から発する圧倒的な迫力は、男たちの目に神人の姿を、巨大熊ほどの大きさに感じさせていた。トイレと自動販売機しかない駐車場には、男たちには不運なことにクルマは十台ぐらいしか停まっておらず、トイレに行っているのか人影は全くない。

否、人影がないと言うのは正しくない。人影がいなくなるように神人が神等力を放っていたのだ。神人は不敵な笑みを浮かべた。男たちはその笑みを見て全身にとてつもない恐怖が走ったが、あとに引けないことも悟った。

二人とも手には鉄パイプを持っている。恐怖を打ち消すために、二人同時に鉄パイプを振りかざして神人に襲い掛かった。男たちは動こうとしない神人が、血まみれになって倒れるところを脳裏に描いた。

二人が振り下ろした鉄パイプは、神人に命中しているはずだった。この至近距離からでは、格闘技の達人でもボクシングの世界チャンピオンでも、避けることは絶対に不可能だ。だが鉄パイプが叩いたのは神人ではなかった。硬いアスファルトの地面だ。神人はどうやったのか、さっきの位置から一メートルほど横に立っているのだ。

男たちは再び襲いかかったが、またしてもアスファルトを叩いた。何度やっても結果は同じだ。神人は薄笑いを浮かべたまま、何事もなかったかのように立っている。肩で息をしながら、鉄パイプを振り上げる力もなくなってきた男たちに神人が言った。

「今からお前たちを、この世から消し去る。俺に喧嘩を吹っかけたことを後悔するんだな！」

神人はゆっくりと右手を開いて、男たちの正面に突き出した。何

が起きるのか分からないが、本能的に身の危険を感じた男たちは逃げようとしたが、足が動かない。金縛りにあったようでビクともしないのだ。

さっきの威勢はどうなったのか。その身体の大きさに似合わないほど小さく見える二人の顔は、母親に叱られている幼稚園児のような表情に見える。二人は更に凄まじい恐怖を体験する。神人の開いた右手に、長さ一メートルほどの日本刀が現れたのだ。それは魔法としか言いようがなかった。

「お前たちを、この魔殺剣（まっさつけん）で切る！」

「まっさつけん・・」

暗示にかかったかのように男たちが洩らした声は、弱弱しくて震えている。不気味な光を放つ魔殺剣を持った神人は、動けないでいる男たちに詰め寄ると、気合もろとも男たちの頭を目がけて、凄まじい速さで魔殺剣を水平に振った。魔殺剣は男たちの頭を一刀両断にした。

余りの速さに、切断された頭部は転げ落ちない。速すぎたために一滴の血も出ずに、頭もそのまま残っている。もし傍で今の光景を見ているものがいたら、そう思ったに違いない。間違いなく魔殺剣は、男たちの頭部を一刀両断にしたのだ。二人の男の頭部は転げ落ちるどころか、二人は全身の力が抜けたかのようにヘナヘナとその場に崩れ落ちてしまった。二人とも失禁している。

「消魔（しょうま）！」

神人は何かを確認するかのように意味不明の言葉を吐いた。男たちの頭部は切れていない。神人が切ったのは、男たちの頭の中に巣食う、魔虫（まむし）だったのだ。魔虫が切られた瞬間、男たちは普通のまともな若者に戻った。もちろん今までのことは全て記憶にあるのだが、なぜ自分たちが危険な運転をしたのか、なぜ神人に襲い掛かったの

かは、いくら考えても分からない。魔虫に巣食われると、人は犯罪を犯すようになる。

「お前たち、これからはその体力を人様のために使え。分かったな」

神人の諭すような優しい言葉に二人は大きく頷きながら、ハイ！と返事を返した。神人と男たちとの戦いは終わった。どういうわけか人一人いなかった駐車場に、それぞれのクルマに乗っていた人たちが何処からともなく現れた。それは神人が、自分たちの周りに誰をも寄せ付けないバリヤーを張っていたのを解いたから、人々が寄ってきたのだった。

駐車場から高速道路の本線に戻った神人は、さっきの戦いを思い出し身震いするほどの興奮を覚えた。それは戦いそのものではなく、自分の神等力に興奮したのだった。実践で初めて使った神等力は予想以上の力だ。神の力は想像を絶する効果を発揮した。

男たちの頭の中に巣食う魔虫が見えた。医療機器のＣＴやＭＲＩを使っても、それを見ることは出来ない。なぜなら、頭の中と言っても意識の中にいるからだ。魔虫というのも、神宇宙に住む神から教えてもらったものだ。

魔虫と言っても虫ではない。人々の怨み辛みや嫉妬、怨恨、憎悪、邪悪な心などの感情が固まった、言わば人の心を悪に導く負のエネルギーの塊だ。人々が発する負の感情は常にいろいろな所を漂っている。それが意識に取り込まれると人は凶暴になり、いろいろな犯罪を犯すことになる。今回のトラック運転手も魔虫が意識に入り込んだ結果だった。

1―14

順調に東名高速を走ったプリウスは、予約している伊豆の旅館に午後四時に到着した。高台の竹林にある純和風の旅館だ。二人は夕食までに温泉を楽しむつもりだ。夕食は七時に頼んであるので、温泉を楽しむ時間はたっぷりある。

考えてみれば、父親も含めて親子で旅行に行ったのは小学校の頃だ。それ以降はない。両親だけで出かけたこともない。言ってみれば、今回の旅行が親子で行く初めての旅行みたいなものだ。

普段の雑踏の世界から離れ、ゆったりとした時間に身を任せながら露天風呂をを楽しむ京子には、ここはまるで別世界のように思える。完璧な癒し空間だ。早めに入ったせいで京子以外の客はいない。

神人が大浴場に入っていくと先客が二人いた。一人は四十歳ぐらい、もう一人は七十歳前後に見える。顔が似ているから親子だろう。二人は神人の身体を見て驚きの表情に変わった。

どういう鍛え方をすればそこまでの肉体になるのか？　そんな視線を浴びせている。身長百七十センチ、体重六十五キロ。まったく無駄な脂肪や筋肉はないが、逆三角形の見事な肉体は凄まじい戦闘能力を秘めているように見える。

ゆったりと至極のひとときを過ごして部屋に戻った二人は、風呂上りに冷たいビールを胃袋に流し込んだ。大げさな言い方をするなら、生きてて良かった！　と思えるほどの美味しさだ。

「母さん、肩でも揉んであげるよ」

「お願いするわね。でも急にどうしたの？　旅行に連れて行くといったり、肩でも揉むと言ったり・・」

「父さんに何も親孝行してなかったから、その分、母さんに孝行しようと思ってね」

神人は父親が逝くとき、「母さんのことを頼む」と、何度も意識に語りかけてきたのを覚えていた。それが親孝行をしろと言ってるのかどうかは別として、両親に何もしていないことを思い出し、今回、旅行に誘ったのだった。

神人は肩を揉みながら神等力の気を注いだ。神等力が身に付いた今、イメージするだけで何でもできる。神人は母親の肩の凝りや腰の痛みなど、悪いところが全て治るように気を注いだ。

「神人、マッサージが上手だね。身体が新品になったような感じだよ。肩こりも取れたし、腰の痛みもヒザの痛みもなくなったよ。どうやったの？」

京子は、神彦と神人が神の力を受け継いでいるとは知らない。神等力をもってすれば病気を治すことぐらい簡単だ。そうかといって病気治療だけに専念して心霊治療的なことを始めると、神人を頼ってくるトラブルに対応できない。だから治療は余程のことがない限りやるつもりはない。

神人を頼ってくるトラブルとは、そのトラブルを持ってくる当人の潜在意識が、「助けてくれ！」と、ＳＯＳを出している状態だ。顕在意識は魔虫の影響で暴力的になっているとしても、本来その人の真の姿である潜在意識が良心的であれば、その人は神人にトラブルを持って頼ってくる。トラブルで神人を苦しめようとするのではなく、このトラブルから救って欲しいという願いを込めて。

魔虫を退治したトラック運転手もそうだった。魔虫がいなくなった彼らは、心優しい青年に戻った。その姿こそが、潜在意識に刻まれている彼ら本来の姿なのだ。

人の潜在意識は神の意識に通じている。言うなれば、潜在意識からの救いを求める叫び声を神が聞き、神が彼らを神人に引き寄せるのだ。神が直接彼らを救えるのであれば救うのだが、それが出来ないからこそ、神等力を天乃家の男子に与え、神の代わりをさせている

のだ。

顕在意識でいくら神頼みをしても神には届かない。潜在意識の声のみが届くのだ。顕在意識にはいろいろな欲望が混じっている。お金持ちになりたい、出世したい、憎きアイツを殺したい、可愛いＡ子ちゃんを抱きたいなどと。初詣の神頼みは顕在意識からの頼みだ。だからそれが叶えられることはない。いくらお賽銭に大金を払っても。

人間の欲望には限りがない。だからこそ神は、顕在意識との繋がりを絶たれたのだ。逆に潜在意識には欲望がない。あるのは慈悲、思いやり、感謝、前向きな心など、限りなく神に近い姿があるのだ。もちろん邪悪な潜在意識を持っている人間もいる。

神人は自らの神宇宙に住む神に、それらのことを教えてもらった。だからトラック運転手を殺すことなく、彼らの潜在意識からの救いの声に対応して彼らを救ったのだ。

旅館の夕食は伊豆だけあって海の幸満載の豪華な料理だ。神人も京子も魚料理には目がない。特に刺身は大好物で、毎日刺身でもＯＫだ。そういうこともあって、天乃家では食卓に刺身が並ぶことが多い。この日の夕食は二人にとって、贅沢極まりない至高の料理に思える。

「神人、こんな美味しい料理を食べたらいつ死んでもいいよ。今日は本当にありがとう。孝行息子を持って、きっと父さんも喜んでいるよ」

京子は目頭を押さえながら言った。

「死んだら食べられなくなるじゃないか。今度は海外旅行に連れてってやるからね。父さんの分まで長生きしてもらわないと困るよ」

他愛のない親子の会話を楽しみながら、豪華な料理を堪能している二人は、こんな時間が永久に続くと思っていた。それはごくごく普通の想いだ。特殊な世界に居ない限り誰もが思うことだが、神人

にそれは許されない。
母親と二人だけの家族旅行を終えて帰宅した神人は、近場とは言え初めての親孝行に満足だった。考えてみれば何が親孝行なのか分からないが、母が喜んでくれたので良しとした。

1―15

神等力を得た神人は、対応をテストされているのではないかと思える場面に、またしても遭遇することになった。その場面とは電車の中だ。

いつもの時間に仕事を終えた神人は、同僚と雑談をしていて会社を出るのが遅くなった。会社を出たのは夜の十時過ぎだ。帰りの電車はこの時間だと空いている。出発まで二十分ある。神人は横長のベンチシートの端の席に座った。

こんな時間に帰宅する人は残業？　あるいはデート？　あるいは飲み会？　などと、どうでもいいことに考えを巡らせながら、バッグから週刊誌を取り出すと読み始めた。

出発五分前になると空席はなくなった。立っている客も増えてきたが、混雑というほどではない。時間が時間だけに子供の姿は見えない。酔って饒舌になっている客もいる。メールをしているのかインターネットを見ているのか、携帯電話を見ている乗客が多い。

そんないつもの光景に、特に何を思うこともなく週刊誌を読んでいた神人の耳に、不愉快な声が飛び込んできた。声の主は二人の男だ。周りの乗客の迷惑も考えずに、大声で卑猥なことや不愉快なことを喋っている。その口調から酒に酔っているのが分かる。

神人は週刊誌から二人の男に視線を移した。彼らは車両の中央の吊り革に?まって話している。神人からは彼らの右斜め後ろの姿が見える。二人とも身長は百八十センチを越えていて、ガッシリした体つきだ。二人とも両手に空手ダコがあり、Ｔシャツからのぞくタトゥーの入った太い腕が暴力的に感じられる。電車が出発してすぐに、年上の男が目の前の席を見回しながら言った。

「今日は疲れたよなぁ。座りたいけど、誰か席を譲ってくれる親切な人はいないかなぁ」

五十歳代と思える男性と大学生と思える若者が席を立つと、隣の車両へと移っていった。彼ら二人の隣に座っているのは、老人と二十代と思われるＯＬだ。

「すみませんねぇ」

男は感情のこもっていない口先だけの礼を言うと、二人が去った席に座った。隣のＯＬも席を立とうとすると、右手で肩を押して座らせた。

「あんたは行かなくてもいいよ。さっきの親切な人が席を譲ってくれたからな。お前も座れ」

男は相棒に声をかけた。二人の男はＯＬの両サイドに座った。年上の男はＯＬの肩に腕を回すと、女性が嫌がるのも無視して抱き寄せた。女性は恐怖のあまり声が出ない。乗客の誰もが見て見ぬふりを決め込んでいる。中には寝たふりをしている客もいる。

神人はゆっくり立ち上がると男たちの前に行った。

「さっきから見ていると、あんたたちのやってることは犯罪ですよ。この女性が嫌がってるのが分からないんですか」

二人の男は同時に立ち上がった。神人よりも十センチ以上は背が高く、横幅もある。乗客の誰もが、今から神人の身に降りかかるであろう場面を思い浮かべ、顔色を失っている。中には足早に別の車両へと移る客もいた。

年上の男は木村、もう一人の男は須藤だ。神人は彼らの頭の中を読むことが出来る。俗に言うテレパシーだ。男たちは完全に神人をなめ切っている。次の駅で引きずりおろして痛めつけるつもりだ。二人とも実践空手の経験者で、暴力団ではないがワル、いわゆるチンピラだ。

「兄さん、いい度胸をしてるな。気に入った。次の駅で降りてもら

うぞ。逃げるなよ」
女性は男たちが立ち上がった隙に神人に頭を下げ、別の車両へと移って行った。他の乗客たちは男と神人に関わりあいにならないように、我知らぬといった表情で素知らぬ態度を取っている。
「分かりました。次の駅で話し合いましょう」
神人はそう言うと男たちの視線を真っ向から受け止めた。男たちには神人の瞳の奥に宿る不気味な光が見えた。今まで素人相手に負けたことのない二人だが、目の前の神人に喧嘩を売ったことを後悔していた。実力が違いすぎるのを感じ取ったのだ。

1－16

男たちの意識の中に魔虫が見えた。神人は彼らの潜在意識が自分に救いを求めてきたのを知った。次の駅で電車を降りた神人と木村、須藤の三人は改札口を出た。夜十一時に近い時間だと人影はほとんどない。

「お前たち、俺に喧嘩を売ったということは、それなりの覚悟は出来てるんだな。ただでは済まないと思えよ」

神人は相手に瞳の奥に潜む恐怖を見せることが出来る。と言っても、相手が自分と視線を合わせたときに、相手の意識に精神的な恐怖を書き込むだけで、実際に瞳の奥に恐怖があるわけではない。

木村と須藤は神人にとてつもない恐怖を覚え、足がすくんだ。そんな二人の思いを知ってか知らずか神人がジャンプした。神人の信じられないジャンプ力に、二人は金縛りにあったかのように身動きが出来ない。神人は二人の頭上を軽々と越え彼らの背後に下りると、すかさずローキックを太腿に叩き込んだ。手加減はしているが、二人はあまりの衝撃に足から崩れ落ちた。神人は一番衝撃に耐えられると思った太腿を攻撃したのだ。

木村と須藤は実力の違いに後悔したが、神人の右手に握られている日本刀を目にして、その後悔は恐怖に変わった。殺されると思う意外に、彼らは何も思いつかない。日本刀は魔殺剣。いつどこからどうやって魔殺剣を出したのかを考える思考力も停止していた。

神人は情け容赦なく、気合もろとも魔殺剣を水平に振った。魔殺剣は二人の頭の真ん中を切った。普通に考えれば、二人の頭は真っ二つに切れて転がるはずだが、そうではなかった。

腰を抜かした二人は気を失う寸前だった。神人が切ったのは彼ら

の意識に巣食っていた魔虫だ。彼らの今までの悪事の数々は、魔虫が影響していたのだ。魔虫が消滅した途端、彼らは凶悪な表情から穏やかな表情に変わった。

神等力が身に付いた神人に恐れるものは何もない。ひ弱な運動音痴のとき、正義感はすぐにポッキリと折れていたが、今はそれが折れることも揺らぐこともない。

「これで二件目か・・」

ポツリと呟いた神人は、神が宿る前とはまるで別人だ。例えるなら、軟弱な若者が、いきなり格闘技の世界チャンピオンになったような変わりようだ。それは肉体的にも精神的にも劇的な変化だった。

神人は周りに誰もいないのを確認すると、自宅へと瞬間移動してみた。いわゆるテレポートだ。あまりにあっけなく移動できた神人は、神等力の凄さに改めて驚いた。

翌日いつものように出社した神人に、同僚や先輩や上司など神人を見た社員がいつものように質問してきた。質問の内容は毎回全員同じだ。

「急に別人みたいに変わったけど、一体どうしたんだ?」

それに対して神人も全員に同じ答えを返した。

「僕が知りたいぐらいですよ。どこか悪いんですかね」

まさか口が裂けても神のことは言えないし、仮に言ったとしても誰も信じないだろう。普通に考えれば神宇宙という聞いたこともない場所に神が住んでいて、それが自分の子供に受け継がれるなんて、SF的に考えても有り得ない。　雑談が終わって席に着いた神人を課長が呼んだ。

「神人、急で申し訳ないけど、今週一週間、大阪に出張に行ってく

れ」
「分かりました。それで今回の出張は前回と同じ内容ですか？」
「同じだ。大阪営業所の営業マンのフォローをしてやってくれ。新製品の内容が良く分からんと言ってるから、営業というよりも製品説明だな」
「了解しました。新製品の開発には私も絡んでたので、分かりやすく説明してきます。ついでに営業マンに同行してお客様を廻ってきます」
「頼んだぞ」

1－17

翌日の午後十二時半に大阪営業所に着いた神人は、所内で弁当を食べている経理の大沢久美と森山可奈子のところに行った。他の社員は外へ昼食を食べに行ってて、所内は彼女たち二人だけだ。

「こんにちは。これお土産です。皆さんで食べてください」

大沢と森山は、挨拶をし手土産を渡した神人を、誰？　という目で見ている。数秒してから神人と分かった大沢が、ビックリしたような口調で言った。

「もしかしたら神人君・・、よね？」

「そうですよ。天乃神人ですよ」

「一瞬、誰かと思ったわ。半年前に来た時と別人ね。そんなに変わっちゃってどないしたの？　整形でもしたの？」

大沢は神人が恥ずかしくなるぐらいジロジロと見ている。その目は、神人が変わった理由を必至で探ろうとしている。

「僕にも分からないんですよ。体重は九十キロあったんですけど、二週間で六十五キロになったんです。まったく何もしてないんですけど・・」

「二週間で二十五キロも減量したの？　ねぇねぇ、体重が減った原因を探して、その方法を本に書いたらベストセラーになるわよ」

大沢は本気とも冗談ともつかない口ぶりで言った。森山は未だに神人本人に思えないらしく、頭から靴の先まで食い入るように見ている。二人にジロジロ見られている神人は、さすがに恥ずかしくなってきた。

「勘弁してくださいよ。正真正銘の天乃神人ですから・・」

大沢久美は二十八歳、森山可奈子は二十二歳。二人とも独身だ。前回来たときは、ただのデブには興味ないといった視線だったが、

以前の面影を残しつつ精悍な男らしいルックス、スタイルに変わった今、二人は恋愛対象といった視線を浴びせている。

二人の視線から逃げたいと思ってたところに、昼食を終えた所長と二人の部下が一緒に帰ってきた。打ち合わせ用の机に座っている神人の顔を見た三人は、お客様だと思い挨拶をした。

「こんにちは。いらっしゃいませ」

「所長、僕ですよ。神人です。こんにちは」

所長と二人の部下は神人に声を掛けられ唖然とした表情になった。三人ともあんぐりと口を開け大きく目を見開き、これ以上の驚きの顔は出来ないといった表情になった。

「ほんまに神人か！」

所長の口から出た言葉は、二人の部下が思っているのと同じ言葉だ。

「驚いたでしょう。なんといっても僕自身が驚いてるんですから・・・」

「他人ごとのように何言うてるんや。一体どないしたんや？　整形手術でもしたんか？」

所長の阿部信二は大沢と同じ質問をした。以前の神人を知っていると、この言葉しか思いつかない。神人も大沢たちに返したのと同じことを言った。

「僕にも分からないんです。体重は九十キロあったんですけど、二週間で六十五キロになったんです。まったく何もしてないんですけど・・・」

「どこか悪いわけやないんやろう？」

「はい。健康そのものです。以前デブのときは、コレステロール値や血圧なんかが高かったんですけど、今は全て正常です」

「そうか。痩せた原因が分かったら教えてくれ。俺も医者から体重を落とすように言われてるんで。ところで今日は製品説明をしてくれるんやな？」

「はい。一時から始めたいと思います。場所は会議室でいいんですね？」

神人は予定通り、一時から新しいソフトの製品説明と操作のやり方を教えた。営業マンは五人だ。途中、質疑応答などもあり、終わったのが定時の午後五時。それから親睦会という名目で、全員で夜の街へ繰り出すことになった。大沢、森山も含め九人だ。名目は何でも構わない。要するに皆、ただ飲みたいだけなのだ。

九人は梅田へと繰り出した。場所は所長お勧めの京風居酒屋だ。和風の料理に舌鼓を打ちながら親睦会は盛り上がった。話題はやはり神人の変身ぶりについてだ。神人の両サイドの席は大沢と森山が陣取った。神人にいろいろと聞くためだ。

「神人君、正直に言いなさいよ。どうやったらそんなに劇的に変われるの？」

「大沢さん、だから何度も言ってるじゃないですか。僕にも全く訳が分からないんですよ。あるときから段々と体重が減り始めたんですよ。気がついたら、二週間で三十キロほど減ってたんです。最初は病気かと思って病院に行ったんですけど健康そのもので、今の状態だと二百歳まで生きると言われたぐらいです。一体どうしたんでしょうね」

「俺が思うには神人はサナギから蝶になったんやな。うんうん、そうやそうや。そういうことにしとこか」

「所長、上手いこといいますね。多分それですよ。僕はサナギから蝶になったんです」

話は盛り上がり、気がつくと午後十時半になっている。

「明日も仕事だし、このへんでお開きにします。割り勘ですからよろしくお願いします」

一番若い坂本という営業マンが言った。会計を済ませ店を出た神人たち九人は、それぞれの自宅へと足を運んでいた。神人は予約し

てあるビジネスホテルへと向かっていた。

「神人君、これからカラオケに行かへん？　ホテルに帰るだけで用事はないんでしょう？」

大沢久美と森山可奈子が神人を追いかけてきて言った。久美の言うように特に用事のない神人は、彼女らの誘いに乗ることにした。デブのときは社内の女性を誘っても断られていた。それが誘うどころか誘われたのだ。正直なところ、飛び上がるほど嬉しかった。

彼女らの案内でカラオケ店に入った神人は、神等力を得て歌も上手くなっていると思っていた。運動音痴の神人は歌も音痴だ。だから同僚にカラオケに誘われても、理由をつけて断っている。

カラオケ店に入ると手馴れた様子で、久美と可奈子が飲み物と簡単なツマミを注文した。その間、神人は何を歌おうかと考えていた。思えば運動音痴の神人はスポーツを避けていた。歌も音痴なのでカラオケに行くのも避けていた。だからと言って音楽が嫌いなわけではなく、ＣＤも買うしＦＭラジオで音楽番組も聞いている。

神人が選曲に迷っていると、早速久美が歌い始めた。既に可奈子も次の曲を予約している。二人とも歌いこんでいるのか、さすがに上手い。神等力を得た神人は自信をもって歌い始めたが、その期待は見事に裏切られた。音痴は直ってなかった。考えてみればトラブル解決に音痴は関係ない。

アルコールのせいもあり、久美たち二人は神人の歌に盛り上がった。神人はヤケクソだとばかりに開き直って、カラオケを楽しんだ。音痴ながらも五曲を熱唱した神人は、二人からお世辞いっぱいの拍手をもらった。

1－18

三人がカラオケ店を出た時、時間は深夜零時を過ぎていた。この時間になると人通りは少なくなっている。人通りが少なく真夜中ともなれば、犯罪に巻き込まれる確率は高くなる。

神人たち三人が少し歩いたところで、アルコールのせいでハイテンションになっているのか、若者五人が騒いでいる場面に遭遇した。五人の男たちまでの距離は約五十メートル。神人は久美と可奈子の安全を考え二人に言った。

「まずいな。あいつ等に絡まれるとイヤだから別の道にしよう」

「大丈夫よ。神人君がいるから全然恐いことあらへん。いざとなったら守ってくれるわよね？」

久美はアルコールのせいで気持ちが昂ぶっている。それに加え、精悍に変身した神人が居れば大丈夫だという女の直感がそう言わせた。久美と可奈子は神人の両脇に並んで腕を絡め、若者たちに向かって歩いた。両手に花状態だ。

神人たち三人に気づいた男たちが、ニヤニヤしながら、好色そうな暴力的な視線を送ってきた。五人とも二十歳代に見える。髪を染め、奇抜なヘアースタイルの男が二人と、若者にしては珍しいパンチパーマの男が一人、残りの二人は茶髪のロングヘアーだ。

全員、神人よりも背が高い。近づいてみると彼らが発散する暴力的な匂いに、久美は恐くなってきた。それは可奈子も同じで、その気持ちは自然と神人の腕に強くしがみつく行動となって表れた。久美は内心後悔していた。神人の言うとおり別の道にすればよかったと。

「いいねぇいいねぇ。ワシら男五人で色気がないのに、両手に花か。

ええなぁ、兄ちゃん。ワシらも仲間に入れてくれや。お前らもそう思うやろ！」

リーダー格のパンチパーマの男の言葉に、他の連中も「そうや、そうや」と大声をあげた。

「姉ちゃん。そんなチンケな男はほっといて、ワシらとええことしようやないか。ええやろ？　みんなで楽しもうやないか。その兄ちゃんもワシらの意見に賛成やと思うで。怪我したないしな」

奇抜な髪の男の一人が、ニヤニヤしながら脅すような口調で言った。久美と可奈子はすっかり酔いが醒めている。二人は神人が倒され、自分たちが男たちに弄ばれるところを想像し、恐ろしさのあまり泣き顔になっている。

「二人とも大丈夫ですよ。僕が必ず守りますから安心してください」

恐怖に怯えている二人の心情を察し、神人は男たちに聞こえないように小さな声で言った。自信たっぷりのその言葉に二人は心が軽くなる気がしたが、相手は五人だし、神人よりもはるかに強そうに見える。いくら神人の言葉を信じようとしても、神人に勝ち目があるとは到底思えない。

そうは言っても久美と可奈子の二人は神人にすがる以外に方法が無い。二人は本能的に神人の後ろに下がった。男たち五人は、いずれも神人より体格的に勝っている。その状況から、男たちは完全に神人を舐めていた。

「ということで兄ちゃん、おんどれは帰ってくれへんか。今すぐやぞ。心配すなや。可愛い子ちゃんはワシらが責任持って面倒みたるからな」

リーダー格の男が脅しを掛けながら神人に近寄ってきた。男たちは神人が逃げるものと思って、それぞれ威嚇のポーズをしながら近づいてきた。

神人は少しずつ下がりながら男たちの意識を覗いてみた。魔虫が

いるかどうかを確認するためだ。魔虫がいたのはリーダー格のパンチパーマの男だけだ。魔虫は退治しなければならない。そのままにしておくと、善良な市民が犯罪に巻き込まれることになる。

神人に近づいていた五人の男たちの足が止まり、全員が恐怖の表情に変わった。決してそれに触れてはならない、決してそれに関わってはならない、それとは想像を絶する恐怖。男たちは神人の瞳の奥に、それを見たのだ。否、神人が見せたのだ。

「ちょっと待ってて。すぐに戻るから」

怯えた表情の二人に言い残すと、悲鳴を挙げて我先にと逃げ始めた男たちを神人は追いかけた。久美と可奈子が見ているので、男たちより若干速い速度で走った。リーダー格の男だけは四人とは逆に路地へ逃げた。神人は彼を追った。

久美と可奈子が見えなくなったところで一気に加速すると、すぐに男に追いついた。行く手を遮られた男は、神人の右手に握られている不気味な光を放っている日本刀を見て、その恐怖から全身が強ばって動けない。今までは一般の人たちを脅していたのが、今は逆だ。

男の思いなど無視して、神人は愛刀の魔殺剣を水平に振った。凄まじいスピードだ。どんな武術の達人でもプロの格闘家と言えども、避けきれない速さだ。男は死を覚悟した。魔殺剣が頭を切った音が聞こえた。

男は自分が死んだと思ったが、目を開けてみると生きている。何も変わってないが、心が晴れやかになったような、頭の中のモヤが取れたような、スッキリした気分だ。目の前には神人が優しい笑みを浮かべて立っている。

男から暴力的な匂いは消え、普通の若者の匂いに変わっている。表情も野獣の表情から柔和な表情に変わっている。信じられないよ

うな変わり方だ。神人は男の意識に巣食っていた魔虫を切ったのだ。男の様子を確認した神人は、久美と可奈子の元へと戻った。

「神人君、大丈夫？　あの人たちはどうしたん？　なんで急に悲鳴をあげて逃げ出したん？」

二人が思っている事を、久美が矢継ぎ早に問いかけてきた。

「たぶん酔っ払ってて、僕の顔が鬼にでも見えたんじゃないの。それでビックリして逃げたんだよ。さぁ、それより早く帰ろう。またあんな奴らに絡まれたらイヤだからね」

神人はいい言葉が思いつかなくて適当にお茶を濁したが、二人は腑に落ちないという表情をしながらも、早く帰りたくてタクシー乗り場に向かった。

二人がタクシーに乗るのを見届けた神人はビルの陰に隠れると、予約しているビジネスホテルの近くにテレポートした。ホテルには遅くなることを連絡してあるので問題は無い。

1－19

部屋に入るとシャワーを浴びるためにシャツを脱いだ。全く贅肉のない引き締まった肉体は、惚れ惚れするほど綺麗だ。六つに割れた腹筋、逆三角形を形作る発達した広背筋、盛り上がった大胸筋と太い上腕二頭筋、それは神人が思春期を迎えた頃からあこがれていた理想の肉体そのものだ。その肉体を手に入れた神人は、ナルシストかと思いつつも自分の肉体に見入った。

シャワーを浴びた神人は、ベッドに入るとすぐに寝息を立て始めた。深い眠りについたところで、神宇宙に住んでいる神が現われた。

「神人よ、神等力を私利私欲に使ってはならない」

神は子供に教えるように優しい声で話しかけてきた。実際に声が聞こえているわけではないが、そう思える。

「わかっています。神等力を身に付けてまだ日は浅いですけど、私利私欲には使っていません」

「神等力は、困っている人や悩んでいる人などを助けるために与えたものだ。今夜お前がテレポートしたのは私利私欲にあたる。神等力を使わなくても帰れたはずだ」

神の言葉に、「しまった！」と思った。確かにそのとおりだ。迂闊だった。神人は私欲でテレポートしたのではなかったが、深夜ということもあり、タクシーを待って無駄な時間を使うよりと思いテレポートしたのだ。

「言われるとおりです。私が間違っていました。言い訳するつもりはありません。罰は受けます」

神等力を授かって、それをいきなり私利私欲のために使ってしまった以上、どんな罰も受けるつもりだ。神の罰だからどんなものなのか、考えてみてもまったく想像がつかない。

「神人よ。悪意があってのテレポートではないから、罰を与えたりはしない。神等力は困っている人たちのため、自分の身を守るため以外に使ってはならない。よいな」
「はい、分かりました神様」
神が消えると、神人は深い深い眠りへと落ちていった。

翌日、神人が始業時間の三十分前に大阪営業所に出社すると、所長の阿部と部下の大石が出社していた。
「おはようございます。所長も大石さんも早いですね」
「おはようさん。昨夜は彼女らに捕まって、遅かったんやないんか？」
阿部が関西弁丸出しで言った。その表情はお疲れさん、と言っているように見える。
「カラオケに連れて行かれたんですけど、ちょっと疲れました。もうカラオケは懲り懲りです」
「やっぱなぁ。そうやと思った。アッハッハッハッハ」
そこへ大沢久美が入ってきて神人を見るなり質問してきた。

「神人君おはよう。昨日は、なんやったん？　あれから何ともなかったん？」
「神人、なんかあったんか？」
久美の言葉に阿部が新聞を読む手を休めて、心配そうな表情で尋ねた。その目は言葉とは別に、トラブルでもあったのか？　と言っている。
「まぁ大したことじゃないです。カラオケの帰りに変な奴らに絡まれたんですけど、何事もなく済みましたから・・」
神人はこれ以上突っ込まれたくなかったので、どうってことはなかったと言うように大きな欠伸をしながら、阿部の好きな野球の話に持っていった。阿部は虎キチと言われるほどの阪神ファンだ。

「阪神調子いいですね。この分だと優勝かもしれませんよ」
「お前には悪いんやけど、今年はいただきや。まぁ、中日も頑張ってるけど、もうちょい頑張りが足らへんな」
五分ほど野球の話で盛り上がり、神人の思ったとおり昨日の件は話題から消えてしまった。久美はもう少し昨夜の話を聞きたそうな表情だったが、野球の話に熱中している阿部を見て、そのまま自分の席へと着いた。

1－20

今日の神人の予定は松永と同行訪問だが、松永はなんだか元気がない。松永の話によると、客先へ納入したアプリケーションソフトに不具合があり、復旧に一時間ほどかかったそうだ。

そのために客先の業務に支障をきたし、発注担当者からペナルティを要求されていた。不具合の原因はお客の仕様が間違っており、松永としてはその仕様に合わせてＳＥに作ってもらっただけで、落ち度はお客にあるということだ。

そうは言っても売り手と買い手の関係から強く言えないこともあり、今回の件も松永の責任になりつつあった。発注担当の萩原は、自社の仕様間違いを見逃した松永のほうに責任があるという、言わば責任転嫁、屁理屈をバイイングパワーで認めさせようとしているのだ。

萩原は仕入先に対しては常に高飛車の態度だ。ネゴ交渉にしても一方的に自分の金額を押し付け、それに反論しようとすると、「今後の取引は無し！」と言う脅し文句を言い、無理やり自分の条件を飲ませるのだ。

今回の不具合もそのやり方だ。萩原の言うことを飲んだ場合、ペナルティを支払わなければならない。そうかと言って仕様の不備に持ち込むと、今後の取引に影響が出ることになる。にっちもさっちもいかない状況に、松永を含め所長以下全員が困り果てていた。

「神人。なんか名案あらへんかなぁ。ほんまにあの萩原いう担当者はなんともならんのや。そやけど大口の取引先やさかい、取引中止になったら痛手やし・・」

松永は本当に困った様子で、まったく元気がない。萩原からは、ペナルティを払うと言う返事を持って来いと言われている。

「松永さん、今日その萩原さんと話されるときに、僕も同席させてください。何とか上手くいくように話をしたいと思うんで」
「よろしく頼むわ」
口では言いながら、松永には神人の言葉は単なる気休めにしか聞こえない。それが表情にも表れているが神人は気にしない。
松永は名案もなく重い気分のまま萩原の勤める会社の玄関を入ると、受付で萩原に連絡を取ってもらった。応接室で五分ほど待たされて萩原が現れた。態度と表情に性格の悪さが表れている。神人は萩原の考えを読んでみた。
「なんとしてもペナルティを払わせてやる。断ったら取引中止で脅してやる。お前らみたいな中小企業は、俺には絶対逆らえないということを見せてやる。悪いのは俺のほうだが、お前らは俺の尻拭いをする運命なんだ」
萩原の考えを読んだ神人の怒りに火がついた。萩原の中に魔虫が見えた。神人は萩原に恐怖を見せるべく視線を合わせた。その瞬間、萩原は悲鳴を上げんばかりの表情になったが、両手で口を押さえると、かろうじて悲鳴を止めることができた。
「萩原さん、大丈夫ですか。どうかされましたか?」
松永は何が起きたのか分からないまま言った。萩原の視線は神人に釘付けになったまま動かない。松永はその視線の先には神人しかいないと知っていたが、今の状況を確認するために、ゆっくりと神人のほうを見た。
松永と目が合った神人は、「いったいどうしたんでしょう?」という表情で答えると、松永に念を送り気絶させた。
恐怖におののく萩原を更なる恐怖が襲った。いつどこからどうやって出したのか、神人の右手に不気味な光を放つ魔殺剣が握られて

いたのだ。

「ギャァアア」

萩原は今度は悲鳴を抑えることができなかった。その悲鳴と同時に、神人は魔殺剣を萩原の顔面めがけて水平に振った。常識的に考えれば萩原の頭は水平に切断され即死の状態だが、頭には傷ひとつない。神人は萩原の意識に巣くっている魔虫を切ったのだ。

1―21

萩原の悲鳴を聞きつけて、受付の女性と近くにいた男性社員が応接室に駆け込んできた。彼らは最悪の状況を想像していたが、目にしたのは穏やかな表情で座っている萩原の姿だった。

「萩原さん、大丈夫ですか！　今悲鳴が聞こえたんですけど・・」

「あぁ・・、なんでもない。大丈夫だから気にしないでくれ・・」

萩原の言葉に腑に落ちないという表情で首を傾げながら、受付の女性と男性社員は出て行った。神人の手に魔殺剣が現れてから魔虫を切るまでの時間は、わずかに十秒ほどしかかかっていない。松永が気を失っていたのも三十秒以内だ。その短さに松永自身、気を失っていたことに気づいていない。

「松永さん、今回の件は私どもの仕様の間違いが原因です。御社に落ち度はありません。ソフトの不具合を修正してもらった費用は払いますので、見積を持ってきてください」

松永は夢を見ているとしか思えない。これが夢でなければ、いったいどうしたというのだ。松永は萩原に見えないように右手で太ももをつねってみると、夢でないことが確認できた。

「松永さん、今までいろいろと理不尽なことを押し付けて、申し訳ありませんでした。今私は本来の自分に生まれ変わりました」

萩原の言ってる意味を理解できない松永が、恐る恐る口を開いた。

「萩原さん、私は頭が悪いので言われてる意味が理解できないんですけど・・」

「私はたった今、まともな人間に生まれ変わったんです。今の私の姿が本来の私の姿です。上手く言えないんですが、今までは悪魔に

操られていたようなものです」
「はぁ、正直なところ何と言っていいのか分かりませんが・・。今後ともよろしくお願い致します」
松永は萩原のあまりの変わりように、頭がおかしくなったのではないかと思ったが、結果的に良い方向へ変わったので一気に気が楽になった。
その後五分ほど雑談になったが、萩原からはさっきまでの意地悪そうな怒ったような表情は消え、柔和で優しい顔つきに変わっている。大げさに言えば、劇的に変わったと言っていいほどの変わりようだ。

「萩原さん、本日はお忙しい時間を割いていただきまして、ありがとうございました。これで失礼致します。早急に見積を作りましてお持ちいたします」
「こちらこそありがとうございました。見積を頂いたらすぐに処理します。今後ともよろしくお願いします」
萩原は深々と頭を下げた。今までの萩原を知っている松永にとって、全く信じられない光景だ。松永は帰りの電車の中でも、おかしい、おかしいを繰り返しながら萩原のことを考えていた。

「やっぱり、おかしい。神人。萩原さんは一体どないしたんやろ？なんで、急に変わったんやろ？　奇跡以上の変わりようや」
「理由はどうでもいいんじゃないですか。結果的に良いほうへ変わってくれたんですから・・」
魔虫を切ったとは言えないし、自分の能力のことを明かすわけにもいかない。神人はさりげなく話題を変えるように答えた。
「そやな。いくら考えても分からへんし、もう考えんとこ。まぁ、いずれにしろ良かった、良かった。これで一件落着や！」

会社に戻った松永は、萩原の一件を所長の阿部に報告した。阿部

はしばらく考えながら、松永が思っていることと同じ事を口にした。
「地球環境の変化が影響してるんですよ。うん、それしか考えられない。きっとそうだ」
大阪営業所での一週間は無事に過ぎていった。考えてみれば、萩原とのトラブルを解決するために来たような気がしたが、それが偶然か必然かは考えても答えが出るはずはなかった。

1―22

「どうしたんだ神人？　何か不満でもあるのか？　今の仕事が嫌なのか？　理由を聞かせてくれ」

神人が出した退職届を見た営業所長の西村が、驚きを隠さずに言った。西村にしてみれば青天の霹靂としか思えない。神人が退職届を出す理由が全く思いつかないのだ。

「不満はありません。仕事が嫌になったということもありません。皆良い人ばかりだし感謝してます」

「だったらどうして辞めるんだ？　訳を教えてくれないか・・」

「いろいろと考えたいことがあって、しばらく仕事を離れたいと思いまして・・」

「分かった。お前は毎日よく頑張ってくれてるし疲れてるんだ。しばらく会社を休め。何も辞めることはないだろう」

「気遣っていただきありがとうございます。でも僕の気持ちは変わりません。ワガママだと思って許してください」

神人は深々と頭を下げた。神人の意志の固さを感じた西村は、これ以上引き止めることを止めた。何か人に言えない事情があるのだろうが、神人が真の理由を言ってくれないことが寂しかった。

六月末、残件や引継ぎを終わらせ会社を辞めたが、辞めた理由が神人自身にも分からない。何故だか分からないが辞めないといけないような気がして、ほとんど衝動的に退職届を出したのだ。

西村に引き止められたときは残るべきだと思ったのだが、何か強い力で強引に辞める方向に持っていかれたような感じだった。自分の意志ではなかった。何かしら目に見えない大きな力が働いたような感じだった。

「神人、どうして辞めたの？　イヤになったわけじゃないんでしょう？」

「母さん、俺のワガママだと思って何も聞かないで。いろいろと考えることがあってね」

そう言いつつも、今でも辞めた理由が分からない。

「お父さんも私には理解できない部分があったけど、あなたもお父さんと同じね。でも神人、あなたを信用しているから、自分の信じるとおりにやりなさい。たぶんお父さんも、私と同じ思いだと思うわ」

「母さん、ありがとう。大丈夫だよ」

「ところで一生遊んでるわけではないでしょう？　転職先は決めてるの？」

「今のところ何も決めてないし何も考えてない。でも就職はするよ。食べていかないといけないからね」

会社を辞めた翌日、朝九時に起きてきた神人は、用意してある朝食を食べながら朝刊に目を通していったが、興味を惹くような記事は無い。普段はあまり見ることのない広告のチラシに目をやると、スポーツクラブのチラシが目に付いた。自宅からクルマで二十分ほどの距離にある。

「全国チェーンのスポーツクラブか。身体が鈍らないように入会してみるか」

そう呟くとスポーツバッグにジャージなどを詰め込み、スポーツクラブへとクルマを走らせた。転職活動をしないといけないのだが、一ヶ月ぐらいはゆっくりするつもりだ。

受付で入会手続きを済ませ、一通り施設の案内をしてもらい説明を受けた後、ジャージに着替えた神人はストレッチから始めた。ほとんどの人が短パンにランニングシャツというスタイルだが、神人はジャージー姿だ。その見事な筋肉が人目につかないように、あえ

てジャージースタイルにしたのだ。
神彦から神を引き継いでからは肉体的にも大きく変化していた。そのなかの一つが柔軟性だ。床に座って全開脚で胸を床に付ける、いわゆる股割りを難なくやってのける神人に、隣でストレッチをやっていた老人が声をかけてきた。
「はぁあ。お兄さん凄いな。身体が柔らかいんだね。私はごらんのとおり枯れかかっているので、これだけしか曲がらないよ」
老人の足は直角にも開いておらず、顔をしかめながら必死で前に曲げようとしているのだが、上体はほとんど曲がっていない。神人はテレパシーで老人の意識を覗いてみた。
老人の名前は北村豊作。八十四歳だ。腰に持病があり相当辛い思いをしている。病院で治療はしているものの一向に良くならず、そういう理由から健康のために通っていると分った。

「おじいちゃん、僕はマッサージが得意なんです。もし良かったら少しマッサージしましょう」
神人は、あぐらに座りなおした豊作の後ろに行くと肩を揉み始めた。ゆっくりと優しく神等力の気を注ぎながら。豊作は何とも言えない気持良さそうな表情でうつらうつらし始めた。
肩から背中、腰、腕とマッサージをしながら気を注いでいく。マッサージ自体は軽く擦っているという感じだが、気の効力で何とも言えない心地良さなのだ。約五分ほどマッサージした神人が、最後に軽く豊作の両肩をポンと叩いて、特別マッサージは終わった。
「ああ～ぁ、気持ち良かったぁ。お兄さん、本当に上手だね。身体が軽くなったというか、二十代の頃に戻ったような感じだよ。さてと自転車こぎから始めるとするか・・」
豊作は立ち上がった瞬間、驚いた表情で神人を見た。
「腰が治ってる。ほぉう、何と言ったらいいか、まるで身体が全部、新品と入れ替わったみたいだ。お兄さん、あんたのマッサージは凄いな」

実際のところ、豊作の身体の悪いところは全て完治していた。神等力の気は特定の部位ではなく、悪い患部全てに効果を発揮するのだ。

「私は北村豊作と言います。お兄さんは？」

「天乃神人と申します」

「天乃さん、あそこで自転車こぎをやってる三人だけど私の茶飲み友達なんです。この歳になるとどこかしら体調が悪くてね。今日でなくていいんだけど、彼らにもマッサージをしてもらえないかな？」

神人は正直なところ困ったことになったと思った。自分の力が口コミで伝わると取り返しの付かないことになる。神等力でも口コミは止められないからだ。

豊作を促すように神人は右手を彼の背中に当てた。神等力に出来ないことはない。豊作の記憶の一部が消えたが、豊作はそのことには気づいていない。あとで考えても、なぜ体の悪いところが治ったのか分からないはずだ。

自転車こぎをやってる三人のところに向かった豊作とは別に、神人はランニングマシーンに乗るとスイッチを入れた。一時間ほどランニングしたが、まったく息切れしていない。リラックスしているときと同じ呼吸数、同じ脈拍だ。

次に筋トレマシーンで軽くトレーニングをすると、満足した笑みを浮かべた。マシーンの負荷は最重量になっている。約二時間ほど運動をしたあと、気分爽快といった感じでスポーツクラブを後にした。

第2章　運命を変えた首吊り自殺

蒸し暑い5月半ば、肩を落として帰ってきた真吾はスーツの上着をリビングのソファーの上に脱ぎ捨てると、面倒くさそうに外したネクタイも放り投げ、疲れきったようにソファーに倒れこんだ。

「あぁ～あ、疲れた・・・」

真吾はその言葉を言うのが精一杯というようにしか見えないが、妻の静江には真吾の次の言葉が分かっていた。

「辞めたい・・・」

蚊の鳴くような小さな声で真吾は呟いた。それは独り言なのか静江に聞いて欲しいのかは、真吾にしか分からない。静江に聞こえているはずなのに、静江は何も言わない。真吾はその無言の状態が耐えられなかった。

「もうイヤだ。どうして俺だけこんな目に合わないといけないんだ・・・」

静江に何か言ってもらいたかった。何でもいい。とにかく声を掛けてもらいたかった。自分が今苦しんでいることに、関心を持ってもらいたかった。

「晩御飯冷たくなるわよ。早く食べたら・・。それとも、先にお風呂に入る？」

静江の言葉は真吾の期待するものではなかった。

「風呂に入る・・」

小さな声で答えると、真吾は肩を落として風呂場へ向かった。静江は真吾の悩みも気持ちも痛いほど分かっていたが、それを解決す

るための答えを持っていない。自分がしてやれることは、黙ってグチを聞くことだと思っている。

杉山真吾は今年で入社十五年になる。三十七歳だ。子供は四歳の長女と二歳の長男の四人家族だ。子供が小さいので静江は働きに出ることが出来ない。二年前に念願の一戸建て住宅を手に入れたが、三十年という長期ローンが始まったばかりだ。

悩んでいる真吾の足かせになっているものが二つあった。住宅ローンと家族だ。「ローンが無かったら・・、独身だったら・・・」その二つの「・・たら」がなければ転職するつもりだった。給料は安くなっても構わない。とにかく、今の会社から逃げ出したかった。それが出来ない真吾の辛い心境を、口には出さずとも静江は分っている。

三十分ほどして真吾が風呂から上がってきたが、風呂上りに必ず飲む発泡酒を飲まない。今夜は特に元気がなさそうに見える。思いつめた様子にも見える。何か不安がよぎったが、静江は声を掛けるのをやめて二人の子供と寝室へと入っていった。時間は午後九時を過ぎたところだ。

ピ～ポ～、ピ～ポ～、ピ～ポ～、救急車のサイレンの音が、時々耳にする音とは違って泣いているように、静江には聞こえる。「いやだ！」「いやだ！」と、子供が泣きじゃくっているかのようだ。

運ばれているのは真吾だ。呼吸はしているものの意識はない。風呂から上がった真吾は、静江と子供たちが寝室に行った後、自宅のカーポートの鉄骨に縄跳びの紐を掛け、首吊り自殺をはかったのだ。

玄関の音がしたのを不審に思った静江が外に出てみると、真吾が首を吊って苦しんでいるのが見えた。パニックになった静江は悲鳴をあげ、転びそうになりながら真吾に駆け寄った。

悲鳴を聞いた隣に住んでいる藤岡隆が、大学生と高校生の息子と

一緒に飛び出してきた。隆が手際よく息子に指示し、真吾の首に巻きついていた紐はすぐに外された。発見が早かったので死には至らなかったが意識はない。

隆の指示で大学生の息子が救急車の手配をした。救急車が到着したのは八分後だった。子供のことを隆にお願いした静江は、真吾と一緒に救急車に乗り込んだ。

救急車が来たときには、静江は少し落ち着きを取り戻していたが、意識を無くして運ばれている真吾を見ていると、何も力になってやることが出来ない自分が情けなかった。どうして一言言ってくれなかったのか、死という最悪の選択をせざるを得なかった真吾が哀れでならない。体中の水分が全て流れ出るのではないかと思えるほど、止めどなく涙が溢れてくる。

病院に搬送された真吾は直ちに精密検査を受けた。命に別状はないことが分っていたので、静江は内心ほっとしていた。あとは意識が戻るのを待つだけだ。さっきとは違って気持が少し楽になっていた。

気持は楽になったが検査時間がやけに長く感じられる。検査が始まってから二時間経過していたが、感覚的には倍以上の時間に感じられる。検査が終わったのは、運び込まれてから四時間後だった。

病室に運び込まれた真吾は、まだ意識が戻っていない。病室のドアには面会謝絶の札が掛けられた。果たして、どのくらいの時間が経てば意識が戻るのか全く分らない静江は、一抹の不安を覚えながら担当医の説明に耳を傾けた。

「奥さん、検査結果ですが、ご主人の命に別状はありません。その点に関しては心配いりません。首吊り自殺ということもあって、脳に障害が起きていないかどうかを念入りに検査しましたが、幸い障害はありませんでした。後遺症はないと思います。今は眠っているというか気を失っている状態ですが、意識が戻れば今までと同じ普

通の生活に戻れます。今日一日入院して様子を見てから退院になります」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

静江は目頭を押さえながら深々と頭を下げた。医者の説明に安心すると同時に、隣の藤岡に子供たちを預けてきたことを思い出した静江は、一旦自宅に帰ることにした。

2―2

自宅に帰ると藤岡隆がリビングで待っていた。心配そうな表情で静江のひと言を待っている藤岡に、静江は医者から聞いたことをそのまま告げた。

「良かった、良かった・・」

静江の説明を聞いて安心したのか、藤岡は一辺に疲れが出た様子で、自宅へと帰っていった。

藤岡が帰った後、静江は寝ずにリビングのソファーに座って、今回のことを考えていた。気持ちが落ち着いたとは言えあまりにショックが大きく、眠気はまったくなかった。

真吾が自殺を選んだ理由を知りたかった。口癖のように仕事が辛いというのは聞いていたが、自殺するほど辛いとはどういうことか。その理由を知りたかった。理由を知って自分が解決できるとは思わないが、自殺以外の選択肢を考えることは出来る。今のままでは再び自殺する可能性がある。

結局、静江は一睡もすることなく朝を迎えた。手早く支度をすると、二人の子供と一緒に病院へ向かった。一晩経っているので意識は戻っているだろう。そんな思いで病室のドアを開けたが真吾の目は閉じている。部屋に入ると子供たちが声をかけた。

「パパ、おはよう!」

真吾は起きない。再び子供たちが声をかけながら頭に触ったが、それでも眠ったままだ。静江も声をかけ身体をゆすってみたが、起きるどころか反応がない。呼吸をしていなかったら死んでいるよう

に見える。不安になった静江はナースステーションへ行った。
「もうすぐ主治医の先生がみえますので、説明があると思います。それまでしばらくお待ちください」
二十歳過ぎと思える看護士が事務的に言った言葉が、余計に不安を募らせた。真吾の身に何か重大なことが起きてるのか？　考え始めると悪い方、悪い方へと思いが広がり始めた。そんな思いで待っていると主治医が入ってきた。

「おはようございます」
静江の不安を打ち消すかのように、主治医は明るい声で挨拶をした。昨夜処置した医者とは代わっている。四十歳ぐらいで優しい顔つきだ。静江は不安が和らぐのを感じた。
「先生、主人の容態はどうなんでしょうか？　声を掛けても起きないんですけど・・・」
「結論から言いますと、ご主人はどこも悪くありません」
「ではどうして意識が戻らないんですか？」
「首吊り自殺ということで、脳への血流が止まるのを心配してたんです。血流が止まると脳に障害が出ますから・・。検査した結果では、その心配はありませんでした。今の状態は眠っているような、昏睡状態のような感じです。昏睡状態と言っても、生命の危機に関するのと意味は違います。意識が戻るまでこのまま様子を見ることにします。心配はいりません。大丈夫です」

医者の言葉に一抹の不安はあるものの、静江の気持は軽くなった。子供たちは静江の気持を敏感に感じ取り、二人でふざけ始めた。
「静かにしなさい。パパが起きるでしょう」
「ママ、パパが起きたほうがいいんでしょう？」
「そうよね。ハハハハハハ」

2―3

杉山真吾が自殺未遂で入院してから三週間が過ぎていた。医者からはどこも悪くないと言われているにも関わらず、意識は未だに戻っていない。意識はないが、不思議なことに寝返りはしているみたいで、顔の向きが時々変わっていると看護士が言っていた。昏睡状態というより熟睡しているような感じだ。

それから一週間が経とうとしているとき真吾の意識が戻った。ナースコールが鳴ったので、看護士が慌てて駆けつけたところ、意識の戻った真吾がベッドに座っていた。

「すみません。ここは何処ですか？　私はどうなったんですか？」

まったく訳の分からない真吾が、寝ぼけたような感じで看護士に尋ねた。

「気分はどうですか？　何か覚えてますか？」

「自宅に帰って風呂に入ったのは覚えています。それからは・・、気が付いたらここに居たという感じです・・」

「そうですかぁ。実は・・・」

看護士は、真吾が救急車で運び込まれてから今までのことを詳しく説明した。

「そうだったんですか。すみません、色々とご迷惑をおかけして・・」

「それより奥さんに連絡されたほうがいいんじゃないですか？　ひどく心配されてますから」

看護士に言われ、真吾は病院内に設置されている公衆電話に向かった。携帯電話を持っていなかったからだ。五回の呼び出しの後、受話器が取られた。

「もしもし、杉山ですが」
「静江、俺だ。心配かけてすまなかった・・」
真吾の声を聞いた途端、静江は小さな嗚咽を洩らし始めた。何か喋ろうとしているが言葉にならない。真吾は静江が落ち着くまで黙って待つことにした。時間的には一分ほどだったが、真吾には長く感じられた。落ち着いた静江が、不安と期待の入り混じったような声で尋ねた。
「もう大丈夫なの？　何ともないの？」
「ああ大丈夫だ。心配掛けてすまなかった・・。たぶん退院許可が出ると思うから、今日退院するよ」
「分かったわ。迎えに行くから待っててちょうだい」

静江は真吾がまた自殺に走らないかと心配だった。自殺に至った理由が分らない限り、それが解決しない限り、不安を拭い去ることはできない。迎えに行くのもそういう理由からだ。静江が病室に到着したときには、真吾は身支度を終えていた。

「パパ！」
二人の子供が、意識の戻った真吾に飛びついた。二人を抱きかかえた真吾に、自殺当時の思いつめたような表情は、微塵の欠片もない。静江の頭の中に一瞬、これで終わったのかという考えがよぎったが、それを振り払った。入院しただけでまだ何も解決してないからだ。
「痩せたみたいだよ」
真吾が呟くように言った。
「それはそうよ。点滴だけで何も食べてないんだから。それに筋力が衰えていると思うから、しばらくはリハビリが必要よ」
二人の子供と手をつないで真吾は病室を後にした。クルマのハンドルは静江が握った。真吾は入院前より痩せてはいるが、体調は良さそうで疲れた様子もなく、自殺をはかった同一人物とは思えない。

途中、ファミリーレストランで昼食を取った。子供たちは久しぶりの外食で大喜びだが、真吾自身も久しぶりに味わう食べ物の味に舌鼓を打った。今まで特に美味しいとも思っていなかったファミレスの食事が、こんなに美味しく感じられたのは初めての経験だ。

昼食を食べ、自宅に着いたのは午後二時半だった。

「コーヒー入れるわ」

そう言うと静江は台所へ消えた。真吾はソファーに座ると、テレビのリモコンのスイッチを入れた。下の娘が真吾の膝の上に座り、上の娘は隣に座った。二人とも真吾の側から離れようとしない。余程、寂しかったのだろう。そんなことを思いながら、真吾はテレビに目をやった。チャンネルを色々と切り替えたが、興味を惹くような番組はやっていない。

「コーヒー入れたわよ」

静江がコーヒーとジュース、帰宅途中の洋菓子屋で買ったショートケーキをテーブルの上に置きながら言った。子供たちは真吾から離れると、我先にとショートケーキを食べ始めた。そんな子供たちの姿を見て、真吾は自殺しようとしたことを後悔していた。テーブルの横に置いてあった朝刊を取ると、テレビの番組覧に目を通した。

「おっ、今夜七時から面白い番組があるぞ」

「そう言うと思ったわ。マジックのスペシャル番組でしょう?」

「そうかぁ。やっぱりお見通しだったか。アッハッハッハッハ」

明るく笑う真吾を見ていると、何故自殺しようとしたのか、その理由を聞きづらくなった。そうこうしているうちにリビングの時計が七時になり、点けっ放しのテレビはスペシャル番組を映し出した。六時半に夕食を終えていた真吾は、目を輝かせてその番組を見始めた。

「静江、見てみろよ。まるで魔法だ。マスクマンは間違いなく超能

力者だ」

独り言のように呟いた真吾は興奮していた。子供の頃から超能力や霊の存在を信じている真吾にとって、マスクマンは神に思える。マスクマンが演じる数々のマジックやイリュージョンは、神か超能力者でなければ出来ないと思えるほどで、真吾から見ればマジックではなく超能力だ。

「俺もマスクマンみたいな超能力があったら、今の悩みはすぐに解決するのに・・」

真吾が何気なく洩らした呟きが、静江の耳にはっきりと届いた。

「やっぱりまだ悩んでいるんだわ」

静江は真吾の呟きを聞き、不安な思いが広がっていくのを抑えることが出来なかった。

2―4

真吾は退院後も一週間会社を休んで、体力の回復に努めた。出社したのは八月の上旬からだ。その間静江は、真吾が発作的に自殺しようとするのではないかという不安から、真吾の近くに居るようにしていた。

出社の日が近づくにつれて真吾の様子が変わり始めた。元気がなくなり落ち込んでいるように見える。出社の前日になったとき、静江は自殺しようと思った理由を尋ねた。

「会社に悪魔がいるんだ。そいつが毎日俺を苦しめに来るんだ。苦しくて辛くてどうしようもないんだ」

「悪魔？　悪魔って何のこと？」

「そいつから逃げるには自殺するしかないと思ったんだ。悪魔のせいで二人病気になった。あいつらと居ると生き地獄だ」

「悪魔って誰なの？」

「会社に行きたくない、行きたくない・・、もうイヤだ」

真吾は静江の言ったことには答えず、頭を抱えたままうな垂れた。このままではまた自殺に走るかもしれない。何としても今、原因を見つけなければならない。もしかしたら鬱病かもしれない。そんな考えが頭の片隅をよぎった。

時間は午後九時になっていた。子供たちは寝ている。静江はウイスキーを持ってくると真吾に勧め、自分も水割りを作った。静江は真吾が落ち着くまで何も喋らず、一緒にウイスキーを口に運んだ。しばらくして酔いが回ってきたのか、真吾が喋り始めた。

「そうだ。悪魔をやっつければいいんだ」
「そうよ。やっつければいいのよ。やっちゃいなさい」
悪魔が誰なのか分からないが、真吾の悩みを和らげるには同調するしかないと考えた静江は、オウム返しに答えた。

「悪魔は二人居るんだ。二人ともやっつけてやる！」
「やっちゃえ、やっちゃえ。二人ともやっちゃえ！」

ウイスキーの酔いと静江の言葉で気分が高揚してきた真吾は、何杯めかの水割りを一気に飲みほした。気のせいか静江には、真吾の眼光が鋭くなったように見えた。その瞬間だった。真吾が持っていたグラスが音を立てて割れたのだ。

「あなた大丈夫？　怪我しなかった？」
「あっ・・、あぁ・・・、大丈夫だ。何ともないよ・・」
静江の問いかけに真吾は、ふと我に帰ったような感じで答えながら、不思議そうな目で割れたグラスと自分の手を見ている。何か考えているようなその仕草に静江が尋ねた。
「どうかしたの？」
「いっ・・、いや、な、なんでもない。なんでもない・・」
曖昧な返事をしつつ、何か納得のいかない表情をしている。
「グラスにヒビでも入ってたのかしら」
静江の言ったことを無視して、真吾は静江のグラスを手にした。念入りにグラスを確認したが異常はない。右手にグラスを持った真吾はグラスに意識を集中し、さっきと同じように気持ちを高揚させ始めた。

テーブルの上のグラスの破片を片付けながら、静江は真吾の様子を見ていた。じっとグラスを見ている真吾の眼光が鋭くなったときだ。パキッ！　という音と共に、またしてもグラスが割れたのだ。

「あなた大丈夫！　何ともない？」
「大丈夫だ。なんともない」
さっきと違って真吾は力強く答えた。

「ふたつも割れるなんて変ね・・。縁起でもないわ」
「このグラスは欠陥品だな。力いっぱい握っただけで割れるなんて」
「そうなの。安かったから買ったんだけど、やっぱり安物はダメね」
真吾の言ったことに納得したのか、静江はふたたびテーブルの上のグラスの破片を片付け始めながら言った。
「もう少し飲む？」
「いや、もういいよ。明日は出勤だから、これで寝るよ」
「あなた、この際だから明日も休んで椿大社へでも行ってきたら？気持ちが落ち着くわよ」
三重県鈴鹿に位置する椿大社は、正式には椿大神社（つばきおおかみやしろ）と言い、猿田彦大神を祀る神社の総本社とされている。
「そうだな。厄払いじゃないけど、悪魔払いしたほうがいいかもな」

翌日椿大社へ行った真吾は、以前来たときと違って、何かしら大地の息吹きが身体に入っていくような気がした。力がみなぎってくる感じだ。根拠はないが、自信が湧いてくるような感じだ。
本堂へ行く途中で若者とすれ違った。真吾はその若者に何かを感じた。説明が難しいが、自分と同類の匂いだ。何が同類かは分からないが、自分と同じものを持っているような気がした。

2―5

約一ヶ月ぶりに出社した真吾に、同僚たちは労いの言葉を掛けてくれた。会社には体調不良で、一ヶ月ほどの入院が必要という診断書を出していた。静江は治療に専念させたいという理由を告げ、見舞いを断っていた。このため首吊り自殺をはかったということを、誰にも知られないですんだ。所長に挨拶をすると、

「一ヶ月も休んだんだから体調は万全だろ！　今まで休んだ分、しっかり働いてもらうからな」

一人目の悪魔は真吾の体調を心配するどころか、思いやりのかけらもない言葉を浴びせてきた。いつもなら悪魔の顔を見た途端、悪魔の朝のひと言を聞いた途端に憂鬱になるのだが、今朝の真吾は違っていた。悪魔の言葉が負け犬の遠吠えに聞こえる。

悪魔の言ったことに返事はせず、自分の机に行くとパソコンを立ち上げた。メールを開いてみると五百件ほど溜まっている。一件ずつ確認するだけでも、一日では終わらないほどの件数だ。

「杉山、一ヶ月も休んでたんだから、今日はその分、稼いで来い」

「課長すみませんが、メールが山ほど溜まっているので、それを先に確認します。大事な用件が来てるかも知れませんので」

「メールは帰ってきてからやれ。残業で出来るだろう。まずは客先へ行って来い。何としても売上をあげるんだ。分かったか！」

「坂上君、朝から何を怒鳴ってるんだ？」

「所長、杉山ですけど、今日は一日メールのチェックをすると言ってるんです。営業の仕事は客先へ行かないことには始まらないんで、客先へ行って来いと言ってるんですが・・」

「杉山も子供じゃないんだから、そんなことは言われなくても分か

ってるはずだ。さっき俺も言ったばかりだからな。そうだな杉山」

「もちろんですけどメールが五百件ほど溜まってまして、お客様からの大事な用件があるかもしれないので、先に確認しようと思ってるんです」

「だからメールの確認は残業で出来るだろう。お客様に会うのは残業じゃダメだろう。そんなことも分からないのか。そんなことだから、お前の売上は伸びないんだ」

「杉山、坂上君の言うとおりだ。お前は何かに付けてやり方がまずいんだ。それが結果に表れてるだろ。まして一ヶ月も休んでたんだから、その分を取り戻さないといけないんだぞ。屁理屈ばかり言う暇があったら早く出かけろ」

「悪魔め今に見てろ」

真吾は二人に聞こえないように呟いた。これ以上言っても、聞く耳を持たない悪魔には無意味だ。そう思った真吾は出かけることにした。会社の玄関を出た時、五歳後輩の川島が声を掛けてきた。

「杉山さんが休んでいる間、一昨年入社した浦川君が辞めたんですよ」

「えっ、辞めた？　理由は？」

「言わなくても分かるでしょう」

「悪魔のせいか」

「そうです。僕も転職先を探してるんです。このことは内緒ですよ。こんな会社に居たら、いずれ病気になりますよ。そうだ、二年前に辞められた野口さんと西山さんですけど鬱病でしたよね？」

「それがどうした？」

「噂によると、二人とも転職されてから治ったそうです。鬱病の人は注意して見ていないと発作的に自殺するそうですから、家族の方も心配されてたと思うんですけど、転職されて良かったですよ。杉

山さんも発作的に自殺するなんてことないですよね？　あっ、冗談ですよ。冗談、冗談・・」

川島の言葉に、「俺は鬱病なのか？」ふとそう思った真吾だったが、「そんなことはない！」と、その考えを振り払った。確かに悪魔に毎日怒鳴られていたら、病気にならないほうがおかしい。

今までの真吾なら、夕方も悪魔たちの質問攻めと説教が待っていることに憂鬱になるところだが、今日はそんな気分にはならない。営業車に乗り出発したが、客先へは行かず、人目に付かない喫茶店に入った。時間は九時半だ。

店内は半分ほど席が埋まっている。朝刊を手に取ると奥の席に座った。見回すとほとんどの客がモーニングサービスを食べている。モーニングサービスはコーヒーの他に、トースト、ゆで卵、サラダが付いていてお得だが、朝食は済ませていたのでアイスコーヒーだけを注文した。

朝刊に目を通すと、大手デパートで売上金の内の三百万円が無くなるという小さな三面記事が目に付いた。第一発見者の店長がすぐに警察へ連絡し、調査が行われたが、いくら調べても忽然と消えたとしか言いようのない状況だったと書いてある。普通に考えれば窃盗犯は売上金のほとんどを盗むと思えるが、わずか三百万円しか盗まれていない。

「盗むのなら全部盗めばいいのに・・。これは何かあるな」

そんなことを考えながら読んでいると、アイスコーヒーが運ばれてきた。真吾は何やら思いついたらしく、手に持ったストローを見つめたまま動かない。二分ほど経った頃、誰かの視線を感じ顔を上げてみると、二メートルほど離れた席に座っているサラリーマンと思える若者二人が、不思議そうな顔をして自分を見ている。真吾と目が合った二人は気まずいような表情で視線をずらすと、持っていた週刊誌を見始めた。

「あれ、詰まったのかなぁ」

若者の一人がストローでアイスコーヒーを飲み始めたが、コーヒーが上がってこない。途中でコーヒーが詰まっているのだ。若者は代わりのストローを持ってくるようにウェイトレスに頼んだ。その光景を見ていた真吾は、ニヤリと笑うと一気にアイスコーヒーを飲み干し、喫茶店から出て行った。わずか五分ほど居ただけだったが、真吾には有意義で満足な時間だった。

第3章　感電事故と超能力

岩崎耕平は焼酎の水割りを片手に、安いアパートの部屋でテレビのスペシャル番組を見ていた。二時間の特別番組だ。出演しているのは最近急激に人気があがってきた若手マジシャンだ。年齢不詳で覆面レスラーみたいにマスクを被っている。本人はマジシャンではなく、魔操師と言っている。

最初はトランプを使った、オーソドックスなテーブルマジックだ。ゲストの芸能人五人が見守る中、鮮やかな手さばきで次々とトランプマジックを披露していく。そんなマスクマンを、スタジオの一般観客を含め全員が驚愕の眼差しで見ている。それはまるで魔法としか思えない。

テーブルマジックが終わり、イリュージョンと呼ばれるマジックになった。観客の度肝を抜いたのは、ＳＦ映画のスパイダーマンみたいに壁を這ってよじ登るマジックだ。これもマジックとは思えない。五人のゲストは目を丸くして声も出せないでいる。ゲストの驚きの表情を楽しむかのように、マスクマンは手を触れずに物体を動かすマジックに移った。

ゲストの一人から腕時計を借りると、テーブルの上に置いた。それに腕時計を貸したゲストがスカーフを被せた。当然のことながら、絹のスカーフは腕時計の形に盛り上がっている。

何が起きるのか、ゲストは期待感いっぱいの表情で見ている。マスクマンは五メートルほど離れたところに置いてあるテーブルを指差した。テーブルの上には、腕時計に掛けたのと同じスカーフが置いてある。スカーフの下には何もないので、スカーフはテーブルに張り付いたようになっている。

マスクマンが、パチンッ！　と右手の指を鳴らした瞬間、腕時計

に掛けてあったスカーフがペシャンコになった。腕時計の膨らみがなくなったのだ。それとは反対に、五メートル先のテーブルの上のスカーフが、腕時計の形に盛り上がったのだ。

仰天するスタジオの観客やゲストを尻目にマスクマンはテーブルに近寄り、スカーフを持ち上げた。するとゲストから借りた腕時計が現れたのだ。

「すっげぇ！　あいつは間違いなく超能力者だ。間違いない」

岩崎は酔いの廻った頭で考えながら力強く言った。マスクマンはその後も手を触れずにコップを動かしたり、電球を割ったりのパフォーマンスを見せつけた。岩崎の言うように、もはやマジックの域を超えて、超能力としか思えない。

「俺にあんな超能力があったら、テレビなんかに出ないで一儲けしてやるのに。いや待てよ。もしかしたらマスクマンのやつ、裏では悪いことしてるかもしれないな」

本気とも冗談ともつかないことを言いながら、岩崎は焼酎を注ぎ足した。頭の中はすでに超能力者になった気分だ。最後までスペシャル番組を堪能した岩崎は、すっかりマスクマンのファンになっていた。それと同時に想像は大きく膨らんでいた。

岩崎はインターネットで超能力に関する情報を検索していた。どうしても超能力を身に付けたい、その一心で毎日毎日検索を続けていた。マスクマンはインタビューに対して、

「マジックか超能力か、あるいは魔法なのかは、ご覧になっている皆様の判断にお任せします」と言っていたが、岩崎は絶対に超能力だと思っていた。録画なら映像を加工することが出来るが、マスクマンは生番組で、多くの聴衆の前でやっていたからだ。

マスクマンみたいな超能力者は他にもいるはずだと思っている。

ＳＦ映画の『Ｘメン』みたいに姿を隠しているはずだと。岩崎は何としても彼らと接触したかった。もはや岩崎の頭の中は、ＳＦの世界と現実の世界の区別がなくなっていた。

そんな岩崎は、職場で変人扱いされるようになっていた。ＳＦ好きの同僚は何人もいるのだが、岩崎の場合、好きという次元ではなく、度を越しているのだ。ネット検索以外にも、超能力に関する書籍はほとんど買っていた。

岩崎が勤めているのは小さな電気工事会社だ。社名は宮崎電気工事。社長を含めて従業員は八人で、元請会社からの請負工事がほとんどを占めている。岩崎は私立の工業高校を卒業後この会社に入り、五年が経っている。

3―2

ピ～ポ～、ピ～ポ～、ピ～ポ～、救急車のサイレンの音が近づいてきた。その音が、「もう少しだ！」「頑張れ！　頑張れ！」と言いながら近寄っているように、高岡には聞こえていた。

救急車が停車するとタンカが降ろされ、意識の無い職人が乗せられた。彼の名前は岩崎耕平。仕事中にちょっとした不注意が原因で、事故を起こしてしまったのだ。

入社して五年が経ち作業もベテランになった岩崎は、今日の仕事も軽く考えていた。手慣れた作業ということと、超能力のことを考えていて注意力が散漫になっていたのが原因だった。基本中の基本である、電源が切れているかどうかを確認しないまま、作業を始めてしまったのだ。

電源が切れていると思い込み、尚且つ電気室が蒸し暑かったせいもあり、防護用のヘルメットを脱いで作業を始めた。これも決して許されない不安全行為だ。普段はこんなことはしないのだが、やはり仕事に集中していなかった。

事故はいろいろな条件が重なった時に起きるものだ。汗で濡れている岩崎の髪の毛が、二百ボルトの電圧がかかっている端子に触れてしまったのだ。その瞬間、感電して白目を向きケイレンしている岩崎に、一緒に仕事をしていた同僚の高岡が気づきすぐに電源を切った。その間、三秒も経っていなかった。

高岡は失神している岩崎の呼吸と脈を調べた。人工呼吸とＡＥＤの使い方の訓練は受けていたが、幸い岩崎にその必要はなかった。すぐに救急車を呼び、病院へと運ばれた。

病院へ着くとすぐに精密検査が行われた。不幸中の幸いというか、奇跡的に何の障害も残らず、二日ほどで退院できることになった。

脳への感電のため、数ヶ月ほど前から今日までの記憶をなくしていたが、生活に支障はないと医者は言った。

二日後に退院した岩崎は、病院からそのまま出社すると、先ず社長へ謝りに行った。社長と言っても個人経営の小さな工事会社だ。名目上は社長だが、社員は皆、宮崎さんと呼んでいる。宮崎は社員にとって親父みたいな存在だ。中には、「オヤジ」と呼ぶ者もいる。

岩崎は宮崎の机の前に行くと深々と頭を下げ、ひと言だけ言った。

「どうもスミマセンでした」

「大事にならなくて良かった。安全第一！　いつも言ってるだろう。安全ということが身にしみただろう」

「正直なところ、数ヶ月前から病院で目を覚ますまでの記憶がないんです。高岡くんから状況は聞きましたが、なぜ電源を切らずにやったのか、まったく分からないんです。今まで一度もそんなミスをしたことはなかったので・・」

「くれぐれも気をつけるように。あぁぁ、それと、まだ超能力に凝ってるのか？」

「えっ？　超能力って何のことですか？　僕と何か関係あるんですか？」

「超能力のことも忘れたのか。まあいい。アパートに帰ったら分かる」

何のことだろうと思いつつ、宮崎に背を向けて自分の席に戻ろうとした時だ。

「超能力なんかに凝って困ったやつだ。そんなことだから変人扱いされるんだ」と、宮崎が言った。

「宮崎さん、僕のことを変人扱いしてるんですか？」

岩崎は立ち止まり振り向きながら言った。

「何を言ってるんだ？　俺は何も言ってないぞ」

「今、僕のことを変人と言ったじゃないですか・・」
「黒木さん、俺は岩崎のことを変人と言ったか?」
宮崎は経理担当の黒木に、岩崎の誤解というか空耳を確認するために聞いた。黒木は四十歳のシングルマザーだ。十年前から働いているが、真面目で頭脳明晰で、宮崎の信頼を得ている。

「いいえ、宮崎さんはそんなことは言ってませんよ。岩崎さん、病み上がりでまだ調子が悪いんじゃないの?」
「変だなぁ。確かに宮崎さんの声がしたんだけど・・」
「岩崎、今日は現場に出るのは禁止だ。まだ本調子じゃないみたいだからな」
岩崎は宮崎の指示に素直に従った。正直なところ自分自身、数ヶ月の記憶喪失を自覚してても、それ以上になんだか思考が曖昧というか、何かが変わったような気がする。今の状態ではとても現場で作業は出来ない。それは漠然とした感覚であって、上手く説明できるものではなかった。
「岩崎、まだ本調子じゃないみたいだから今日は帰れ。ゆっくり休んで明日から出て来い」
「すみません。なんだか頭がぼんやりしていて自分でも良く分からない状態なので、帰って休ませてもらいます」

3－3

「何だこりゃ？」

安アパートの自宅に帰った岩崎は驚いた。部屋の中に超能力に関する本や、雑誌等からの切抜きが乱雑に散らかっていたのだ。その数は半端ではない。それらの本や切抜きを見ながら、あれこれと思い起こそうとしたが、何も思い出せない。

「これって本当に俺が集めたのかなぁ。良くこれだけ集めたものだ」

半信半疑というより誰かがいたずらで置いたのか、あるいは嫌がらせをしようとしているのではないかなどと自分以外のことを考えていたが、切抜きに書いてある文字を見て、宮崎が言ったことを現実と思った。それは紛れもなく自分の筆跡なのだ。それもひとつふたつではない。ノートには今まで調べた超能力のことが、何ページにも渡って書いてある。

それを見ていた岩崎は、その内容自体に全く興味はなかったが、パワースポットのところだけ直感的にピーンと来るものがあった。パワースポットとは大地の気がみなぎる場所のことだ。大地、言い換えれば地球。地球上で最大のものは地球。その気は創造を絶するほど強力なものだが、それを受け入れることが出来る人間はほとんどいない。もし地球の気を受け入れることが出来たら、その人間は超能力者となるのだが、人は脳の三パーセントしか使っていないために、受け入れるだけの能力がない。

「ふうん、パワースポットか。面白そうだな。ここに行けば体調も良くなるかも知れないな」

パワースポットはノートに書いてあるのを見ても、東海地区だけ

でも二十箇所近く存在する。その中で自宅から近いのは、三重県鈴鹿に位置する椿大社だ。

パワースポットと言っても、誰もが何らかのパワーをもらえるというものではない。パワースポットの発する気の周波数を受け取ることが出来る人間だけ、パワーをもらうことが出来るのだ。

分かりやすく言えば、パワースポットはテレビ局で、テレビが人間だ。たとえばＮＨＫがテレビ番組を発信し、見る側がチャンネルをＮＨＫに合わせると、その番組を見ることができる。

パワースポットも同じで、パワースポットが発信しているパワーを受信できる人間だけが、その恩恵にあずかることができる。そのパワーは圧倒的なのだが、受信できる人間は何億人に一人いるかいないかだ。

ただしパワースポットに来ると気分的なものかもしれないが、癒されるような気分になるし、ストレスも緩和されるような気にもなるものだ。

岩崎は境内の中央付近に来たところで、全身に何かを感じた。頭の中のモヤが晴れて、スッキリしたような感覚だ。上手く説明できないが、何かが身体の奥から沸きあがってくるような感じだ。それがパワースポットの効果か、あるいは単なる気分的なものかどうかは分らない。

境内をゆっくり歩きながら、大地の気のパワーを全身に浴びているという想いを胸に本堂まで来た。お賽銭を投げ入れ、かしわ手を打った。考えてみれば、初詣すら行ったことがないのに、今ここに居ること自体が変な感じに思える。

お参りが終わり引き返そうとした時、入れ替わるように来た三十半ばぐらいと思えるサラリーマン風の男性が気になり、すれ違いざま男性に意識を集中した時だ。男性の声がはっきりと聞こえてきた。男性は黙って歩いているのに、声が聞こえるのだ。岩崎の頭の中に、杉山真吾という名前が聞こえた。「俺の頭、おかしくなったのか？」

と思いながら、椿大社を後にした。

アパートに帰ってきた岩崎の頭の中は混乱していた。椿大社で感じた何とも言えない清々しい感覚。何か良いことがありそうな、そんなウキウキ、ワクワクの気分と、サラリーマン風の男性の名前を知ったことによって。

杉山真吾という男性は常人ではないような気がした。一瞬だけだったので、彼の全てが分かったわけではないが、何か底知れない力を秘めているように感じた。

そんな思いを頭の隅に追いやり、散らかっている部屋を片付け始めたとき、なぜ超能力に興味を持ったのかを調べてみることにした。雑誌などの切抜きや、メモ書きを見ているうちに理由が分かった。

「そうかぁ。マスクマンのマジックを見てからか・・」

納得したように呟いた岩崎は、マスクマンをネットで検索した。調べてみると確かにマジックと思えない。同じマジシャンから見ればマジックかもしれないが、素人から見ると超能力だ。

「俺もアホだな。超能力に見えるけどこれはマジックだ。超能力が実際に存在するんだったら、それこそ国をあげて研究してるはずだからな。感電して頭が正常になって良かった。あやうく一生、変人扱いされるところだった」

自分のバカさ加減に半ば呆れながら部屋を整理し、超能力に関する本などは資源ゴミとして出すことにして紐で縛った。

岩崎は会社までマイカー通勤だ。入社して一年間、必死で貯金をして中古車を買った。貯金はそれでなくなってしまったが、子供の頃からクルマ好きの岩崎は昨年、借金をして新車のスポーツカーに買い換えた。タイヤとアルミホイールも買い換えた。給料のほとんどはクルマのローンだ。

結婚するにはまだ早いが、両親からは貯金をするように、会うた

びに言われている。岩崎自身今の給料ではやっていけず、母親から借金することもある。

一攫千金を夢見てジャンボ宝くじを買い続けているが、一万円すら当たったことが無い。そのため、何か大金を手に入れる方法がないか、いつも考えていた。超能力に興味を持ったのは、超能力が使えれば完全犯罪が出来ると考えたからだ。

事故を起こす前はそう考えていたのだが、今は全くそんな気はなくなっていた。なぜなら、超能力などあるはずがないと思っているからだ。それが事故のせいなのかどうかは分からないが、超能力にまったく興味が湧かないのだ。

翌朝出勤時に、昨日整理した超能力に関する本を資源ごみ置き場に捨てに行った岩崎は、同じように資源ごみを捨てに来ていた近所の主婦に会った。近所づきあいをしていないので、その主婦に会ったことがあるのかさえ記憶にないが、相手が挨拶をしたので挨拶を返し、その主婦に意識を集中した時だ。

「まだ新しい本じゃない。古本屋に持っていけばお金になるのに」

主婦のそんな声が聞こえたが、主婦は何も言っていない。軽乗用車に積んできたゴミを降ろしてるだけだ。変だと思いつつも、紛れも無くはっきりと主婦の声が聞こえたのだ。決して空耳ではない。そう確信したが、主婦が喋ってないことも事実だ。変な違和感を覚えつつ、岩崎はマイカーで会社へと向かった。

第4章　切り替えられた人生のレール

夏の六月半ば過ぎ、ある商社に勤務する坂上直樹は出勤途中、駅のホームで胸の辺りに強烈な痛みを覚え、そのまま気を失って倒れてしまった。すぐに救急車が呼ばれ病院へ搬送された。症状からして心筋梗塞だ。

発見が早かったのと緊急手術のおかげで一命を取り留めたものの、執刀した医師は、今回のような症例を経験したことがなかった。明らかに心筋梗塞なのだが、動脈硬化を起こしてるわけでもなく、いたって健康なのだ。この状態で心筋梗塞になることは、絶対に考えられない。

心筋梗塞とは、心臓に血液を送る冠動脈が動脈硬化によって狭くなり、心筋に十分な血液が送られなくなるために起こる病気だ。動脈硬化には、高血圧や高脂血症、糖尿病、肥満などが関わっている、いわゆる生活習慣病のひとつだ。坂上の場合、そのどれにも該当しない。

心筋梗塞に至った理由を強いて言えば、何か見えないものが、冠動脈の途中にあったとしか考えられない。常識で考えれば有り得ないことなのだが、執刀医にはそうとしか思えなかった。

坂上は二週間ほど入院した後、退院となった。退院する時に、担当医から今回の病気について説明があった。

「坂上さん、ご存知のように病名は心筋梗塞です。本来この病気は高血圧や高コレステロール、高脂血症などが原因で起きる病気です。俗に言う生活習慣病です。だから今言ったように高血圧などに気をつける必要があるし、退院後もそれらの薬を処方するんですが、坂上さんの場合はそれに当てはまらないんです」

「当てはまらないとはどういうことですか？」

「血圧もコレステロール値も正常です。高脂血症でもありません。メタボでもありませんし、すべて正常なんです。ですから薬を飲む必要もありません」

「尿酸値とか血糖値はどうなんですか？」

「心筋梗塞に直接関係はありませんが、それも調べましたがまったく異常ありません。健康体です」

「それじゃあ、原因が分からないということですか？」

「結論を言えばそうです。私も三十年近く心筋梗塞の患者さんに接していますが、今まで坂上さんのような症例は経験ありません。なぜ心筋梗塞が起きたのか理解できないんです。非常識に言えば、一時的に目に見えない何かで血流が遮られたとしか思えないんです」

「という事は、また起きる可能性もあると・・」

「その可能性はあります。ただ唯一考えられるとすると、血液の塊が出来たんじゃないかと。それも推測です。手術したときに塊が見つかっていないので・・」

「先生、私はどうしたらいいんですか？」

「常識的に考えると血液の塊だと考えられるので、固まりにくくするバイアスピリンという薬を出しておきますので、飲み続けてください」

坂上は一命は取り留めたものの、医者の説明に不安を抱えながら生活することになった。

4―2

退院後の翌日から坂上は出勤した。出勤すると先ず、所長のところへ挨拶に行った。

「所長、長い間休みまして申し訳ございませんでした」

「無事で何よりだ。心筋梗塞は死ぬ確率が高いから心配してたんだ。生きてるということは、まだ死ぬ時期じゃないんだ。やるべきことがあるんだよ。頼りにしてるぞ」

「ありがとうございます。休んでた分は一日でも早く取り戻します」

「まだ病みあがりだから無理するな。一週間ほどは社内でゆっくりしたらいいからな」

二人の悪魔の会話を聞いていた真吾は、自分の時とまったく違う対応に段々と腹が立ってきた。悪魔たちは部下を使い捨てとしか思っていないようだ。やっぱりこいつらは悪魔だ。頭の中に悪魔が居るんだ。誰かに悪魔退治をしてもらわないことには、部下は一生苦しめられるんだ。

真吾は心底祈祷師みたいな呪術を使える人間に、こいつらの悪魔祓いをしてもらいたいと思った。悪魔祓いをしてこいつらを助けるのではない。部下を助けるために悪魔祓いをしたいのだ。

「おい杉山、坂上君に言うことはないのか？　気力で心筋梗塞から生還してきたんだぞ。お前も少しは見習え」

「お疲れ様でした。しばらくは、ゆっくり休んでください」

「俺の分もお前が稼ぐと言うんだな？　休むとはそういう意味で言ったんだろう？　だったら今から外回りしてこい」

「すみません。言葉の綾でして・・・」

「なんだと！　心にも無いことを言ったのか。お前なぁ、いい加減

にしろよ」

「杉山、病み上がりの坂上君をあんまり怒らせるようなことを言うな。お前は気遣いと言う言葉を知らないのか」

話にならん。悪魔は言葉尻を捕らえては、なんだかんだと難癖を付けてくる。やはりこいつらには悪魔祓いが必要だ。そうでないと部下が全員病気になってしまう。必至で怒りを抑えようとした真吾だったが無理だった。死ね！　怒りはその言葉となって真吾の頭の中を駆け巡った。真吾の眼光が鋭く光った。

「うっっ！　くぅぅぅ」

二人の悪魔は同時に胸を押さえ、苦しそうな表情で床に倒れこんだ。悶絶といった状態だ。顔を苦痛にゆがめ苦しんでいる。二人を襲っているのは痛みと言うより激痛だ。心臓を鷲づかみにされているような、かつて経験したことのない痛みだが、坂上にとっては二度目の経験だ。

社内の全員が慌てて駆け寄ったが、二人のあまりの苦しみように何をどうしていいのか分からず、おろおろするばかりだ。

「所長、課長、大丈夫ですか！　しっかりしてください！」

大丈夫でもないし、しっかりしろと言われても、そんな状態でないことは一目瞭然だ。そんな無意味なことを口走る社員がほとんどだ。全員がパニック状態だ。

「だれか救急車を呼べ！　早く！」

その声に三人が電話に飛びついた。十分ほどして救急車が到着したが、そのときには二人は正常に戻っていた。苦しんでいたのは一分ぐらいだった。

二人の悪魔が苦しんでいる時に、真吾だけは冷静だった。冷静な眼差しで苦しむ二人を眺めていた。そんな真吾の様子を見ている者

がいたとしたら、もしかしたら、真吾が二人に何かしたのではないかと思ったかもしれないが、真吾を気にするものはいなかった。真吾は苦しむ悪魔を見ても、何ら解決しないと思った。二人に天罰がくだったのだと思ったが、彼らの中の悪魔を退治しないことには何も変わらない。二人が悶え苦しんでも、悪魔は何のダメージも受けていないのだ。

正常に戻っていた二人だったが、検査のために救急車で運ばれることになった。所長はともかく、坂上は二度目の心筋梗塞と思える症状に、生きた心地がしないでいた。

病院に運ばれた所長の島田と坂上は、一泊の検査入院となった。カテーテル検査、CT、心電図、血液検査、尿検査などが行われた。坂上に関しては、どこも悪いところはなかったが、所長は高血圧とコレステロール値が高かった。

「島田さん、血圧が高いですね。上が百七十、下が百二十です。それとコレステロール値も二百五十で基準値よりも高いです。生活習慣病予備軍というか、いつ心筋梗塞を起こしてもおかしくない状況です」

「先生、今回の症状は心筋梗塞なんですか?」

「ほぼ間違いないと思います。動脈硬化で、血管が一箇所細くなっているところがあります。検査した時には血液の詰まりは無かったんですが、聞いた症状から判断すると、一時的に血管が詰まったと考えられます」

「じゃあ、今後も起きる可能性があるんですか?」

「あります」

「どうしたらいいんですか?」

「細くなっている血管をカテーテルを使って広げ、ステントという管を入れます。これで大丈夫です。手術日は相談しましょう。ただし血圧とコレステロールを下げる薬は、ずっと飲んでいただくこと

になります。それと食事に気をつけることと、適度の運動は必要です」

島田は神妙な面持ちで聞いていた。日本人の三大死因は、ガン、心臓病、脳卒中だ。今までは他人事と思っていたことが、現実味を帯びてきたからだ。

島田に説明を終えた医者は、隣のベッドの坂上に移った。坂上は不安だった。島田のように原因が分かっていれば手の施しようがあるが、原因不明だと運が悪ければ死ぬことになるからだ。坂上は僅かな期待を胸に、医者の説明に耳を傾けた。

医者の説明は坂上の期待に応えるものではなかった。前回と同じで、結果は原因不明だ。あえなく望みを砕かれガックリ肩を落とした坂上は、今回の症状を機に不安が増しただけだった。

4－3

一泊の検査入院をして翌日に出社した所長と坂上は、部下たちが心配しているだろうと思い、朝礼で検査結果を報告した。真吾は検査結果なんかどうでも良かった。偶然というか奇跡的というか、二人同時の心筋梗塞が起きたことに、彼らが何を思ったかを知りたかった。

真吾が彼らに期待しているのは、部下に対して思いやりがないこと、無理なことばかり押し付けること、聞く耳を持ってないことなど、部下への接し方について彼らが反省することだ。

考えてみれば心筋梗塞になったからといって、そんなことを思うわけが無いし、まして反省することなどあり得ない。常識的に考えれば心筋梗塞の原因は生活習慣の乱れが大きな原因であり、真吾が考えているような部下への接し方が原因ということは絶対にない。だから彼らから真吾が期待するような言葉が出ることはない。そんな当たり前のことが今の真吾には分からなかった。なぜなら、真吾は彼らと同じように、自分の考え方が間違っていることに気づいてないからだ。

真吾は彼ら二人は死ぬべきだと思った。まったく部下のことについて反省してないからだ。だがもう一度だけ反省するチャンスを与えてやろうと思った。その理由は、自分は彼らと同じ悪魔ではないと思っているからだ。

朝礼が終わった後、真吾は坂上課長のところへ行くと、チャンスを与えるべく話し始めた。

「課長、心筋梗塞の原因について参考になるかもしれない話があるんですが」

原因が分からず不安を強いられる生活に怯えていた坂上は、真吾

の話に食いついてきた。
「教えてくれ。このままだといつ死ぬことになるか分からないんでな・・・」
二人は応接室へ入るとドアを閉めた。

「それで、原因に心当たりがあるのか？」
「はい、あります。病院でいくら検査をしても、この原因を見つけることは出来ません。常識では考えられない原因だからです」
「常識では考えられない原因？」
坂上は眉間に皺を寄せ、難しそうな顔をしながら呟いた。
「身体に原因があるんじゃないんです。課長の考え方が間違っているのが原因なんです。常識的に考えていては絶対に分かりません」
坂上は真吾の言ってる意味がまったく理解できない。常識的に考えずに原因が分かるのか。

「杉山、お前の言ってる意味が全然分からないんだが、そう思う理由があるのか？」
「二週間ほど前、ある大手デパートの売上金が三百万円盗まれました。朝刊の三面記事に載ってたんですけど知ってますか？」
「いや、知らん。それが心筋梗塞の原因と、どんな関係があるんだ？」
「警察がいくら調べても、その現金は忽然と消えたとしか思われなかったそうです。常識的に考えても犯人は分かりません。非常識に考えると簡単です。犯人は超能力者です」
「はぁ？」
坂上は開いた口が塞がらないという表情に変わったが、真吾は無視して喋り続けた。

「課長の心筋梗塞の原因も、この事件と同じです。常識を無視して考えれば簡単です。部下に厳しく当たり過ぎるのが原因です。課長

のせいで病気になった部下が何人もいるし、辞めた人も何人もいます。もっと部下に思いやりを持って接するようにすれば、二度と心筋梗塞は起きません。これは所長にも言えることです」

「ちょっと待ってろ！」

常識的に考えれば、部下にこんなことを言われて素直に聞く上司などいるはずがない。真吾には常識が欠けていた。悪魔を説得しているつもりでいた。

荒々しくドアを開けて出て行った坂上は、すぐに所長を連れて入ってきた。真吾は所長も一緒に聞いてくれるものだと内心喜んでいた。二人が態度を改めてくれれば部下もやる気が出るし、鬱病になることもなくなる。社内の雰囲気も明るくなってバンバンザイだ。

坂上は所長が座ると、真吾が言ったことを所長に話した。真吾は原因を見つけてくれて感謝されると思っていたが、二人の様子は違っていた。二人は鬼の形相で真吾を睨みつけている。

「バカもの～～！」

いきなり所長の雷が落ちたが、真吾にはその理由が分からない。常識が欠けているから分かるはずがないのだ。

「俺と坂上くんのせいで部下が辞めただと！　部下の鬱病は俺たちのせいだと！　部下に対して思いやりがないから心筋梗塞になっただと！　そこまでお前が言うのなら証拠を見せてみろ！」

島田は顔を真っ赤にして鬼のような形相で怒鳴った。

「さっき課長に言いましたが、ある大手デパートの売上金が三百万円盗まれました。犯人は超能力者です。同じように二人の心筋梗塞の原因も、超能力者の仕業か、皆の怨念のようなものが原因なんです」

「だから皆の恨みを買うような接し方を止めろというのか！」

「そうです」

バンッ！　島田が応接のテーブルを叩いた。

「お前みたいな頭のイカレタ奴はもう来なくていい！　即刻クビだ」

4―4

帰宅した真吾は、会社で島田所長と坂上課長に話したことを、静江にも順番に話した。

「悪魔って、所長と課長のことだったのね」
「お前が言ったように二人をやっつけてやったよ」
「やっつけたって、何をしたの？」
「二人とも心筋梗塞にしてやった」
静江は真吾の言ってる意味が分からない。

「心筋梗塞にしてやったって、どういうこと？」
「だから二人一緒に心筋梗塞にしてやったんだ。二人とも救急車で運ばれて、検査入院のため一泊してたよ。これで反省すると思ったんだけど、悪魔は何も反省しないどころか、俺にクビだと言いやがった。負けてたまるか。もう一度、心筋梗塞にしてやる」

静江は真吾の精神状態が気になった。医者は障害は残らないと言ったが、真吾の言ってることは意味不明だ。まともな人間の言うことではない。

「あなたが悪魔を心筋梗塞にしたの？　どうやったの？」
「悪魔たちの心臓の動脈を詰まらせたんだ。簡単なことだよ。前にも駅のホームでやったけどな」
「えっ！　どうやって詰まらせたの？」
「詰まれ！　って念じたんだ」
静江はクビを言い渡されたということよりも、真吾の精神状態のほうが心配だった。

「あなた、明日、念のために病院で検査しましょう」
「静江、お前も悪魔と一緒で俺の頭がおかしいと思ってるのか！」
ほとんど怒ったことのない真吾が声を荒げて怒ったことに、静江は余計に不安が広がるのを感じた。やっぱり首吊り自殺したことで脳に障害が起きたのではないか。そんなことを考えてる矢先に静江は胸に痛みを感じた。

「い、痛い！　胸が・・、胸が痛・・い」

苦痛に顔をゆがめて倒れこんだ静江を抱きかかえ、ソファーに寝かせた。突然の出来事に、真吾は戸惑うばかりだ。
「はぁあ、はぁあ、はぁあ、・・」
全力疾走した後のような呼吸をしている静江に、真っ青な顔色をしながら真吾が言った。
「静江大丈夫か！　救急車を呼ぼうか・・」
「もう大丈夫よ。痛みは無くなったわ」

頭を両手で掴んでうな垂れている真吾を見た静江は、真吾の言っていることがウソではないような気がしてきた。首吊り自殺の日を境に、真吾に何か大きな変化が起きているような気がするのだった。

翌日、真吾は念のために病院で検査をしてもらったが、どこも悪いところはない。全て正常だ。病院を後にした真吾は、転職がうまく行くように椿大社へ願かけに行ってみることにした。
椿大社に到着すると一路本堂へと向かった。初詣と違って訪れている人はまばらだ。本堂の手前で一人の若者とすれ違った。理由は分からないが若者が気になり、すれ違いざま若者に意識を集中した。若者は何だか自分と同類のような気がした。その感覚が何なのかは分からない。

4―5

病院で検査をした翌日、真吾は出社すると退職届を提出した。

「精神異常と言われなかったか？」

坂上が開口一番、思いやりの欠けらもない言葉を吐いた。真吾は無視した。退職するにしても引継ぎや身辺整理などが必要だ。社内規定では退職の二週間前に届けが必要だ。あと二週間の間、二人の悪魔は徹底的に自分をいたぶってくるだろう。案の定、所長が真吾に応接室に入るように言った。坂上も一緒だ。

「杉山、本来なら上司に向かって根も葉もないあんな暴言を吐いたんだから懲戒免職だが、自己都合による退職にしてやる。これでも俺たちには思いやりがないと言うのか」

「ありがとうございます」

「質問に対する答えが違うだろう。能無しが。そんなことだから、いつも売上が悪いんだ。お前の代わりに若くて優秀な人間を雇うから、あとのことは心配しなくていいぞ。なぁ、坂上君」

「所長の言われるとおりだ。所長に感謝しろ」

「用事がないんでしたら、後始末をしたいんですけど・・」

「なにぃ！　俺たちをバカにしてるのか！」

真吾は二人の悪魔を無視して応接室を出ると、自分の机に戻り仕事を始めた。所長は真吾の机の前に立つと、鬼の形相になり怒鳴った。

「杉山！　きさま舐めてるのか！　きさまみたいなクズは、今すぐ出て行け！」

真吾は二人を無視して、パソコンのキーボードを叩いている。

「出て行け！」

坂上も同調するように怒鳴った。あまりの剣幕と大声に、社内の全員がチラチラと三人を見ている。社内は所長と課長しかいないかのように、静まり返っている。二人の怒りが頂点に達したそのとき、悪魔が苦痛の表情で胸を押さえて床に倒れこんだ。

ほとんどの社員が二人を見ていたので、倒れ込んだのと同時に二人に駆け寄った。二人の額には脂汗が滲んでいる。その表情から相当の激痛というのが分る。

すぐに誰かが受話器を取り救急車を呼んだ。社内の全員が騒然としている中、真吾だけは我関知せずといった様子でキーボードを叩いている。その場違いの行動に誰かが真吾を怒鳴った。

真吾はキーボードを叩くのをやめ、苦痛にのた打ち回っている二人に視線を向けた。真吾が二人を見たのと同じタイミングで二人は激痛が治まったが、肩で大きく息をしている。

「救急車は呼ばなくていい・・」

所長が小さな声で言った。真吾は立ち上がって所長のところに行くと肩を貸してあげ、応接室へと連れて行った。同じように他の社員が坂上を応接室へ連れて行った。二人をソファーに座らせると真吾も座ったが、もう一人の社員は出て行った。

「所長、課長、今の症状は何故起きたと思いますか?」

二人とも黙ったまま答えようとしない。相当ショックを受けたようで、顔色が青ざめている。とても真吾の質問に答えられる状態ではない。そんな二人の様子を楽しむかのように、真吾が続けて言った。

「お二人の怒りが自分自身に跳ね返ってきたんですよ。言い方を変えれば、お二人の部下への思いやりのなさが自分に跳ね返ってきたんです。ウソだと思うのならもう一度怒ってみてください。怒鳴ってみてください」

真吾の言葉に坂上が切れた。

「ふざけるな！　黙って聞いてたら好き放題言いやがって！」

怒鳴った途端、坂上が胸を押さえて倒れた。苦しむ坂上を助けることも忘れ、所長は目を丸くしてあんぐりと口を開けたまま、坂上と真吾を交互に見ている。約三十秒後、坂上の痛みは治まった。

「課長、僕の言ったことは本当でしょう？」

坂上は声に出さずに、分かったというようにガクガクと頷いた。さっきよりも真っ青になっている。今の状況を見て、二人は真吾の言うことを信じざるを得なくなった。

「よし。悪魔をやっつけたぞ！　これで思い残すことは無い」

心の中で言った真吾は、満足そうな表情で応接室から出て行った。真吾と対照的に、島田と坂上は芯から疲れたという表情で、ソファーに座っていた。

4－6

「やっすい給料だな。これじゃ貯金どころの騒ぎじゃないや」

ブツブツ言いながら給料明細を見た岩崎は、それをくちゃくちゃに丸めるとゴミ箱の中に投げ入れ、テーブルの上に置いてある貯金通帳を開いてみた。今月の給料の記載はしてないが、残金は四千円にも満たない。

「あぁあ、転職しようかなぁ。何か儲かることないかなぁ・・」

景気は一向に良くならず、宮崎電気工事も仕事が減っていた。背に腹は変えられないということで、社長の宮崎は従業員の承諾を得た上で、全員の給料を減らしていた。会社が倒産しては元も子もない。

岩崎はクルマのローンが重くのしかかり、何も贅沢してないが今の給料では食べるのがやっとだ。下手をすると赤字になってしまう。今の会社には何の未練も無いどころか、隣の芝生がやけに青く見える。

しばらく寝転がって天井を見ながら考えていた岩崎は、いきなり立ち上がるときっぱりと言った。

「よし！　決めた。会社辞めよう。もっと儲かることをするぞ」

今の生活を変えるには現状打破しかない。具体的なことは何も考えていないが、青い鳥を探すことにした。それには会社を辞めるしかないと、結論付けたのだ。

パソコンを立ち上げ、いくつかの転職サイトに会員登録を済ませた。プロフィールを書き、登録されている企業を見ていったが、希望に叶う会社は見当たらない。学歴がなく電気工事士の資格しか持

ってない岩崎にとっては、それも制約となった。

「くそ！」

パソコンを閉じると再び寝転がり、さっきと同じように腕枕をして天井を見ながらいろいろと考えを巡らした。自分のアピールポイントを考えてみたが、何も思いつかない。「頑張ります。やる気は人一倍あります」と言ったところで、雇ってもらえるわけが無い。あれこれと考えてみたが、結局は今と同じ業種の仕事しかないように思える。

翌日会社を休みハローワークへ足を運んだ。ここでも満足できるような仕事はなく、今までの経験から電気工事の仕事を勧められた。それ以外には警備の仕事、離職率の高い人気のない仕事などだった。

「結局俺の仕事は電気工事しかないのか。そんなバカな。ふざけるな！　電気工事をやるために生まれてきたなんてことがあってたまるか」

考えているうちに誰にともなく腹が立ってきた。まるで誰かに勝手に、自分の人生のレールを引かれたような気分だ。それも一生苦労すると思われるようなレールをだ。

「許さない。こんなレールを引いたヤツを絶対に許さないぞ。今に見てろ。大金持ちになって見返してやるからな」

岩崎は完全に常軌を逸していたが、自分ではそのことに気づいていなかった。言うなれば岩崎の考えは自分勝手で逆恨み、八つ当たりみたいなものだ。ムシャクシャした気持ちでハローワークから出てきた岩崎は、この後の予定は何も無かった。こんな気持ちのままアパートに帰っても気が滅入るだけだ。そう思い、気晴らしにパチンコに行くことにした。

名古屋に向かってクルマを走らせパチンコ店に入ってみると、平日ということもあって七割ぐらいの席しか埋まっていない。空いている台を探しながら歩いていると、足元にパチンコ球の箱を五箱積み上げている男が目に付いた。他にも積み上げている客は何人もいるのだが、なぜかその男が気になったのだ。

その男の打っているパチンコ玉を見ていると、釘に当たった玉が絶妙のタイミングで穴に入っている。イカサマをやっているわけではなく、普通に打っているだけだ。

その男に意識を集中した岩崎の頭の中に、男の意識が見えた。何とも言えない感覚というか、奇妙な感じだ。意識が見えているような、声が聞こえているような、そんな感覚だ。男の名前は杉山真吾。椿大社ですれ違った男だ。

岩崎は、どうしても声をかけなければならないという衝動に駆られた。この感覚さえ不思議な気がした。

「杉山さん・・、杉山真吾さん・・ですよね?」

男は振り向くと、驚いたような警戒するような表情で言った。

「そうですけど。あなたは誰ですか?」

言いながら杉山は、この男とは初対面ではないような気がした。

「僕は岩崎耕平と言います。すみません、一分だけ時間いただいてよろしいですか?」

ロビーのほうを指差しながら言う岩崎に、杉山は何故か惹かれるものを感じた。杉山は立ち上がると、何かを考えるような仕草でロビーに向かった。

4―7

岩崎は杉山と椿大社ですれ違い、なぜか気になったことを話すと、杉山は驚きの表情に変わった。

「岩崎さん、玉を換金してきますから待っててください。もう少し、いろいろと話しましょう」

杉山は慌てて台に戻ると、積んでいた五箱を換金しに行った。

「お待たせしました。どこか喫茶店でも入りましょうか」

「いいですよ」

さっきとは打って変わって、杉山は好意的な態度に変わっている。二人はパチンコ店の近くの喫茶店に入った。奥の席に座ると、二人ともアイスコーヒーを頼んだ。岩崎は杉山に聞かれる前に、自分のことを話し始めた。生まれから家族構成、仕事のことまで話した岩崎に、杉山は気になっていることを質問してみた。

「岩崎さん、あなたのことは分りましたが、どうして私の名前を知ってるんですか？」

「僕にも分らないんですけど、杉山さんに意識を集中してたら、杉山真吾という名前が浮かんだんです」

「そうなんですかぁ。今までそんなことあったんですか？」

「ありません。初めてです。デジャブ現象かも知れません」

デジャブ現象というのは、確かに見た覚えがあるけど、いつ、どこで見たのか思い出せないとか、この景色夢で見た事あるとか、初めて行った場所なのに、以前来たような気がするとか、そういう現象のことだ。

杉山は腕組みをし、難しい顔で考えていたあと尋ねた。

「最近、事故とか怪我とかしませんでしたか？」

「はい。つい最近、仕事中に不注意で頭を感電してしまって、救急車で運ばれました。検査結果は異常なかったので良かったんですけど、事故直前から、数ヶ月ほどの記憶が無くなってしまいました」

「なるほど・・。話は全然違いますけど、この前マジックのスペシャル番組をやってたんですけど、見ましたか？」

杉山はまったく違う話題に話を切り替えた。

「数ヶ月間の記憶がないんですが、テレビを見ながら録画してたので、運良く見れました。あれはマジックじゃないですよ。魔法か超能力です。それ以外に考えられないです」

興奮気味に答える岩崎に、杉山が続けて尋ねた。

「私もそう思います。もし、あんな能力があったらどう使います？」

「いろいろと考えてたんですけど、僕の場合今のままだと、勝手に引かれた電気工事というレールの上を、僕の意思に関係なく歩かされることになると思うんです。実際、今までそうでしたから。そんな人生なんてまっぴらです。僕にあのマスクマンみたいな能力があったら、一儲けすることに使います。杉山さんはどうなんですか？」

「私も同じです。悪魔の下では働きたくないから」

「悪魔？　悪魔ってなんですか？」

「実は、うちの会社に悪魔が二人いるんです。そいつらが・・・」

杉山は悪魔のせいで自殺に走ったこと、悪魔が心筋梗塞で倒れたこと、退職届を出したことなどを話した。

「そうなんですかぁ。大変でしたね。ところで就職先は見つかったんですか？」

岩崎は気になっていることを聞いてみた。自分の場合、なかなか

望むような仕事が見つからないからだ。
「まったくダメですね。こうなったら自分で会社を作るしかないと考えてるんです」
「えっ、会社を作るんですか？」
「岩崎さん、初対面でいきなりこんなことを言ったらおかしいと思われるかも知れませんが、一緒にやりませんか？　勝手に引かれたレールを走らされるのは嫌でしょう。こうやって知り合えたのも、何か特別な縁だと思います」
　確かに杉山の言うとおりだ。杉山とは特別な何かを感じるし、勝手にレールを引かれるより自分で引くべきだ。自分の人生なのだから。

「やりましょう！　それで・・」

「探偵社です」
　杉山の答えは、今まで思いもよらないものだった。

「具体的なことは何か考えてるんですか？」
「一般的な探偵社と同じですけど、私とあなたが手を組めば必ず大成功する。そんな気がするんです。そのためにお互い惹かれあったんですから。名前だけは考えてます。探偵社サクセス」
　杉山は自信に満ちた口調で力強く言い切った。岩崎はマスクマンのマジックを見た時と同じように、杉山の言ったことに気持ちが昂ぶるのを感じた。

「よし！　明日、退職届を出す」
　岩崎は声に出さずに心の中で言い切った。

4－8

神人は一日おきにスポーツクラブへ通っているが、身体を動かしてもほとんどと言っていいほど汗はかかないし、脈拍、呼吸も平常時と変わらない。通っているのは身体を鍛えるのが目的ではなく、身体を動かすためだ。言わばストレッチみたいなものだ。

「あのう、人違いだったらすみません。もしかしたら、天乃神人君じゃないですか？」

「そうですけど。あなたは・・・」

「やっぱり神人君よね。私よ、私！　分からない？」

「すみません。物覚えが悪いので思い出せないんですけど・・」

「よそゆきの言葉で言わないでよ。島崎仁美。覚えてる？」

「島崎さん？　本当に？　全然分からなかった！　中学の時と別人だね。芸能人かと思った」

「別人は神人君よ。ポッチャリで運動音痴だったよね。それが目の前にいる神人君は、どうみてもスポーツマンだわ。身体もスリムになって引き締まってるし・・。私は二年間通ってるんだけど、神人君はいつから来てるの？」

「始めたばっかりで、まだ一ヶ月も経ってないよ」

「まだ独身？　それとも奥さんいるの？」

「いないよ。彼女もいないし、結婚なんてまだ全然考てないよ。島崎さんは？」

「私も同じ」

二人は昔話に花を咲かせた。気がついてみると三十分ほど経っている。

「ねぇ神人君。この後、何か予定あるの？」
「今は無職の身だし、今日も何も予定はないけど・・」
「だったら、久しぶりに会ったから軽く一杯行こうか？」
仁美は中年オヤジのように酒を飲む仕草をした。神人にはその仕草が妙に可愛く見えた。二人は夕食も兼ねて居酒屋にした。初恋の相手からの誘いに、天にも舞い上がる気分だ。七時から二時間、夕食兼、二人だけの同窓会を楽しんだあと、仁美の提案で二次会のスナックに行くことになった。結果から言えば、仁美に押し切られたのだ。

「島崎さん、結構、飲みに行ってるんだ」
「神人君、島崎さんはやめてよ。仁美のほうが肩が凝らなくていいわ」
「そっかぁ。ゴメン。ところで仁美ちゃん、仕事は何やってるの？」
「化粧品会社に勤めてて、マーケティングの仕事をやってるの」
「へぇえ、だからそんなに綺麗になったんだ」
「もしかしたらそれって、化粧で化けてるって意味？」
「違う、違う。そんな意味じゃないよ。もともと可愛くて綺麗だったけど、それに磨きがかかったって意味だよ」

「でもね、最近この仕事も飽きてきちゃって・・」
「飽きたって、まだ入社してそんなに経ってないじゃないか」
「飽きたって言うか、モチベーションがあがらないの。実のところ・・」
「神人君はどうして辞めたの？」
「んんん。何故だろう？　自分でも良く分からないんだ。別に不満があったわけじゃないし、会社の皆もいい人ばかりなんだけど、辞

めないといけないような気がして・・」

「鬱病？」

「違うよ。いたって健康だよ」

「あたしも辞めようかなぁ」

「ダメだよ。A化粧品っていったら一流企業じゃないか。不景気で就職が難しいのに、贅沢言っちゃダメだよ」

いくら神等力を持っていても、モチベーションを高めることは出来ない。神人は神等力の限界を見たような気がした。

「いらっしゃいませ」

ママの声に入り口の方を振り向いた神人と仁美は、小声で同時に言った。

「今入ってきたの村島だよね？」

「村島君よね？」

「おい、健太」

神人が声をかけた。村島は神人のほうを見たが、怪訝そうな顔をしている。誰だか分からないみたいな様子に見える。

「村島君、私よ。島崎仁美。こっちは天乃神人君よ。思い出した？」

「神人？　お前、ほんとに神人か？　二、三ヶ月前に電車の中で会ったときは、太っちょでメタボの体型してたぞ。いったいどうしたんだ？　整形でもしたのか？　それともどこか悪いのか？」

「私は中学の時の神人君の面影しか知らないけど、そんなに変わったの？」

「変わったも何も、つい二、三ヶ月前はビール腹で、体重も百キログらいあったんじゃないか？」

話は神人が別人みたいに変わったことに集中したが、適当にお茶を濁した神人は話題を変えた。

「俺のことより仁美ちゃんが綺麗になっただろ。まるでアイドルみたいだろ」

「実は店に入った瞬間、いい女がいるな。と思って気になってたんだ」

「彼女まだ独身で彼氏もいないんだって」

「よっしゃ！　神人、どっちが仁美ちゃんを射止めるか競争だ！　小学校のときと同じだ」

「なにバカなこと言ってるの。そんなことより今夜は盛り上がるわよ！」

仁美の音頭でカンパイをした三人は、大いに盛り上がった。スナックの後はカラオケで盛り上がり、神人が帰宅したのは零時半だった。

神人は神等力を得てからは体質も変化していた。いくら酒を飲んでも酔わないのだ。ウォッカのようにアルコール度数の高い酒でも酔わない。睡眠時間は二時間あれば十分だ。三日ぐらいだったら一睡もしなくて大丈夫だ。

母親の静江はすでに寝ている。神人は再びジャージーに着替えると、近くの公園にテレポートした。深夜の公園に人影はない。神人がこの時間にここに来たのは、新たな神等力を試すためだ。

神等力はイメージ力だ。イメージしたものがそのまま現実となる。言い換えれば出来ないことはない。神人は約一時間、神等力を試した。その結果は神人自身を驚愕させるものだった。神等力の想像できないほどの能力に、改めて神の偉大さを認識したのだった。

4―9

岩崎耕平の携帯電話の着信音が鳴った。着信音は、最近急激に頭角を現してきた、韓国の女性アイドルグループのヒット曲だ。ディスプレイには杉山真吾と表示されている。

「はい、岩崎です」

「杉山だけど、今日は何か予定あるか？」

「いいえ、何もありませんけど・・」

「じゃあ、伊勢神宮に行くぞ」

「えっ、伊勢神宮？　何しに行くんですか？」

突然伊勢神宮に行くと言われた耕平は、その理由を尋ねた。探偵社を作ると言ってたのに伊勢神宮？　意味が分からない耕平だったが、真吾の指示に従うことにした。

ドライブ好きの岩崎の運転で、二人は伊勢神宮を目指した。伊勢自動車道に乗り伊勢西インターで降りると、内宮までは十五分ほどで到着する。昼前に到着した二人は境内へ足を進めた。

伊勢神宮は三重県伊勢市にある神社で、天照大神が祀られている内宮と、豊受大御神が祀られている外宮がある。

車の中で岩崎は、伊勢神宮に行く理由を尋ねたが、杉山は行けば分かると答えただけだった。もし行ってもその理由が分からなければ、電気工事のレールの上を進むことになるとも言った。

「いいか耕平君、ここは強烈なパワースポットだ。大地の発するパワーで満ち溢れてるんだ。君と俺は、そのパワーを受け取ることが出来るはずだ。それが出来なければ、勝手に引かれた人生のレール

の上を進むことになるんだ。どうだ？　何か感じるか？」

杉山に言われなくても境内に足を踏み入れた時から、身体の奥に何かを感じていた。杉山の説明でそれがはっきりした。大地のパワーを受け取っているのだ。何とも言えない不思議な感覚だ。

「そうか！　椿大社のときと同じ感覚だ」

耕平の呟きが聞こえた杉山が続けて言った。

「椿大社よりも、ここの方が強い気がしないか？」

「します、します。明らかにここの方がパワーが強いです」

「耕平君、電気工事のレールに乗る必要はないぞ。今日から、いや今から俺たちの時代だぞ」

興奮気味に言う杉山に、耕平は人生が変わる予感がした。二人は二時間ほどゆっくりと境内を歩いた。一般の人たちのように参拝が目的ではない。伊勢神宮の大地から発せられるパワーを吸収するのが目的だ。クルマにガソリンを給油しているかのように、二人に徐々に大地のパワーが蓄えられていった。

伊勢神宮を後にした二人は、昼食のために近くのうどん屋に入ると、伊勢名物の伊勢うどんを注文した。伊勢うどんは一般的なうどんのように汁はなく、一見すると醤油のような独特の黒いタレをまぶして食べる。うどんを食べながら真吾が小さな声で言った。

「耕平君、君の人生が変わる決定的瞬間を体験してみようか。向こうの席に若いカップルがいるだろう。彼女に意識を集中して、何を考えてるのか読んでみてくれ」

言われたとおりに耕平は女性に意識を集中した。その瞬間、彼女の考えてることが手に取るように見えたのだ。それはまるで、彼女の考えがそのまま、耕平の頭の中にコピーされたような不思議な感覚だ。

「杉山さん、はっきり分かります。信じられません」
耕平は今確信した。自分はテレパシーという超能力を身に付けたのだと。

「伊勢神宮のパワースポットのおかげですか？」
「そのとおりだ。俺の説に間違いないことがはっきりしたよ。パワースポットから送られてくるパワーは、とてつもない力を秘めているんだ。だからそのパワーを受け止めることが出来る人間、言い換えれば超能力者だけど、僕らにとってはパワースポットは、ガソリンみたいなものなんだ。それもタダでもらえるから利用しないてはないよな」
「と言うことは、杉山さんも超能力が使えるんですか！」
杉山はニコリとすると、自信満々の表情で頷いた。

「このドンブリを見てろよ」

耕平は何が起きるのか期待をこめてドンブリを見た。杉山の表情が変わり、眼光が鋭くなったときだ。ドンブリがふわりと五センチほど宙に浮いたのだ。耕平があっけに取られた表情になると、杉山は満足したようにドンブリを元に戻した。

「杉山さん！　念力ですね。凄い！」
「耕平君、俺と君の力を合わせれば出来ないことはない。探偵社も大成功することが分かるだろう？」
「はい！　探偵社だけじゃなくて、いろいろなことができそうですね？　でも不思議なんですけど、どうして僕らは超能力が身に付いたんですか？」
「恐らく君の場合は、頭を感電した時にそれが脳に影響したんだと思う。俺の場合は首吊り自殺をした時に一時的に脳への血流が止ま

り、何らかの影響があったんだろうな。いずれにしろ二人とも死なずに超能力が身に付いたということは、神様からの贈り物だな。この能力を自分の人生に活かせということだろう。だから何に使ってもいいんだ」

「杉山さん、カネ儲けしましょう！」

「もちろん、そのつもりだ。世の中カネが全てだからな」

二人は超能力を身に付けたと同時に魔虫に巣食われていたが、二人がそれに気づくことはなかった

「耕平君、帰ったら超能力の使い方の練習だ。もしかしたら君はテレパシー以外の超能力も使えるかもしれないし、テレパシーももっとレベルアップする必要があるからな」

「はい。分りました。頑張ります！」

耕平は杉山の言葉に、興奮を抑えきれないように言った。まるで自分がＳＦ映画の中のヒーローになったような気分だ。店を出た二人は、人生始まって以来の最高の気分でドライブを楽しみながら、自宅へと向かった。耕平は早く帰って超能力の練習をしたかった。

4－10

二人は耕平のアパートへ到着した。杉山の自宅だと家族が居るので練習が出来ないからだ。杉山は耕平以外に超能力を見せることはしないことにしていた。たとえ家族や親兄弟にも。耕平も杉山と同じだ。

「杉山さん、念力の使い方を教えてください。僕にも仕えるかどうか、やってみます」

「イメージだ。イメージするんだ。そこの灰皿が浮かんでいるところをイメージしてみろ」

耕平は三十分ほどイメージしながら念力に挑戦していたが、灰皿はピクリとも動かない。

「ダメです。僕には念力の能力はないみたいです」

「それならテレパシーを練習してみたらどうだ」

「練習って？」

「相手の考えてることは読めるだろう。今度は自分の考えを相手に伝える練習だ。君の考えてることを俺に伝えてみてくれ。どうしたらいいかは自分で考えてみてくれ。俺に伝わったら合図するよ」

今度は簡単だった。一分後に耕平の考えてることが、杉山の頭の中にはっきりと浮かんだ。あたかも自分で考えているかのように。ただ違うのは、今まで自分が考えたことのないことだった。それはカネを稼いだら、スーパーカーの赤いフェラーリを現金で買うという想いだった。杉山はクルマにまったく興味はない。杉山は耕平に合図をして、今頭に浮かんできたことを言った。

「そうです。そのとおりです！　これで僕のテレパシーは完璧です

ね」
「いや違う。まだだ。一番大事なことができてない」
「えっ、一番大事なことって？」
耕平は杉山の言ってる意味が分らない、といった表情で答えた。

「テレパシーの究極の姿は、自分の思い通りに相手を操ることだ。相手を操れれば自分の手を汚すこともないし、加害者になることもないだろう？」
「なるほど」
「ただし俺を操るなよ。アッハッハッハ」
冗談交じりに言った杉山だったが、耕平は杉山の考えていることが、おぼろげながら見えてきたような気がした。

「ところで、杉山さんは念力のほかに何を試すつもりですか？」
「一般的に言われてる超能力は、念力、テレパシー、テレポートだけど、それらを試すとして他にもいろいろと考えてやってみるよ。超能力は、イメージしたことが現実に起きるというのが俺の考えだ。だからいろいろとイメージしてみるよ。君もそういう考えでやってみたら、新たな能力がみつかるかもしれないな」
「何だかワクワクしてきました」
目を輝かせながら言った耕平を見ていると、杉山は自分たちのこれからの人生が、大きく変わっていくような予感がするのだった。

杉山信吾と岩崎耕平が探偵の仕事を始めて、一ヶ月が経過していた。この間の仕事の依頼は一件だけだった。依頼内容は亭主の浮気調査だ。依頼主は当然のことながらこの亭主の女房だ。
浮気調査のような内容だと、耕平のテレパシーを使えば赤子の手をひねるよりも簡単に解決する。亭主の考えてることをテレパシーで読めば、包み隠さず真実が分かるからだ。
一般的な探偵だと該当者を尾行して、証拠写真を撮影するなどの

手段をとるが、耕平は相手の考えを読めば、相手が今から誰と何処で会って何をするかまで一瞬で分かる。だから簡単に証拠を掴むことが出来るし、依頼主を事前に浮気現場に連れてくることも可能だ。

依頼を受けた浮気調査は、わずか二日で完了した。依頼主を浮気現場に連れて行ったのだ。写真を見せるより一目瞭然、百聞は一見にしかずのコトワザどおり。

「真吾さん、僕らの超能力を使えば探偵の仕事は簡単ですけど、依頼がないことには稼ぎが増えないですよね？　依頼を増やすにはどうしたらいいんですか？」

「耕平君、二束のわらじを履くというのを聞いたことないか？」

「聞いたことはありますけど、何か関係あるんですか？」

「探偵は表向きの仕事で、俺が目指してるのは裏の仕事だよ。裏の仕事で稼ぐんだよ。そのためには超能力が不可欠だし、その力を強くしないといけない。そうなったら神と言ってもいいだろう。そして神に出来ないことはない」

「つまり僕らは神に一番近い人間で、神になれるということですね！」

「そうだ。神になったら素晴らしい人生が送れるぞ」

耕平は真吾の言葉の全てに心酔していた。高卒で電気工事の仕事しかないとあきらめていた自分が、神になれるのだ。東大や京大のような一流大卒でも絶対になれない神になるのだ。高卒の俺が、エリートたちを超えられるんだ。

第5章　魔操師マスクマン

ある日の朝刊の三面記事に、小さな事件が載っていた。五センチ四方の記述しかない小さな記事で、見落とす人が多いだろうと思いながら、杉山真吾はその記事を読んだ。あるパチンコ店の売上金の内、五百万円が無くなり、犯人は不明という他愛のない記事だ。

「耕平君、この記事読んでどう思う？」

杉山は小さなテナントを借りて、探偵社の事務所にしている。家賃は格安だ。表向きの探偵社だから、極力家賃の安いテナントを借りたのだ。一応、ホームページを作って、インターネットから申し込みが出来るようにしてある。

「この記事がどうかしたんですか？　別に何も思いませんけど・・」
「そうかぁ、それならいいんだ。それはそうと、例のマスクマンの公演があるんだけど見に行ってみようか」
「行きましょう！　ぜひ一度、生で見てみたいと思ってたんです」

魔操師マスクマンのイリュージョンは、東京で行われる予定になっている。場所は東京国際フォーラムホールだ。いち早くチケットを手に入れた杉山真吾と岩崎耕平は、その日が待ち遠しかった。真吾が待ち遠しかったのはイリュージョンを見ることだけではなく、その場で、ある実験をするつもりでいたからだ。

いよいよ待ちに待った公演の日となった。皆の期待が高まる中、魔操師マスクマンは、鮮やかで神秘的なマスクを付けて登場した。ショーのたびごとにマスクも変わる。心憎い演出だ。
ショーが始まると、とてもマジックと思えないイリュージョンに、

観客席からはどよめきと感嘆の声が聞こえる。午後一時から始まったショーが中盤になったとき、真吾が耕平に耳打ちした。

「マスクマンの頭の中を読んで俺に教えてくれ」

「分かりました」

耕平はマスクマンに意識を集中し、テレパシーで頭の中を探った。毎日の訓練の結果、耕平のテレパシーは完璧なまでにレベルアップしていた。マスクマンの考えていることだけではなく、記憶していることや個人情報的なことまで全て読み取ることができた。時間的には三十秒もかかっていない。

「真吾さん、ビックリするようなことが分かりましたよ」

興奮気味に呟いた耕平は、周囲に聞こえないように真吾の耳元で囁いた。

「そうか。次の実験だ。今から俺が言うことをマスクマンに伝えてくれ」

真吾の言ったことをマスクマンに送った瞬間、マスクマンの動きが一瞬止また。真吾と耕平には、マスクマンが動揺しているのが分かる。ショーを演じつつ、マスクマンは耕平にテレパシーで話しかけてきた。自分の素性がばれないように意識にガードを張りマスクマンの話を聞いた耕平は、その内容を真吾に伝えた。

「ショーが終わったら、俺とお前とマスクマンの三人で会いたいと伝えてくれ。必ず会ってくれるはずだ」

真吾の読みどおり、マスクマンは会うことをテレパシーで伝えてきた。マスクマンが一般の人と会うのは、これが初めてで異例のことだ。

公演終了後、マスクを外しラフな服装で現れたマスクマンは、どこにでもいる普通の若者だ。ショーのときの金髪のカツラを外した今は黒髪で短髪だ。彼がマスクマンだとは、誰も気づかない。

「岡田俊介です。杉山真吾さんと岩崎耕平さんですね？」

耕平がマスクマンに会う約束を取り付けたとき、耕平はうっかりガードを外してしまった。その一瞬の隙に、耕平たちの情報をマスクマンに読まれていたのだ。三人は日比谷公園まで歩いた。公園に着いたとき、時計は午後五時半を指していた。

三人は大噴水の前に来た。噴水の周りは、腰掛けられるようになっている。三人はそこに腰を下ろした。

「岡田さん、あなたはマジシャンじゃなくて、超能力者なんですね。隠してもダメです。あなたの意識を読みましたから」

真吾の言葉に、岡田は開き直ったような表情を見せると口を開いた。

「そうです。そしてあなたがたも超能力者・・、ですね。失礼ながら二人の意識も読ませてもらいました。あなた方が考えられていることは、実際に私が実行しています。全国で現金が無くなるという小さな事件ですが、すべて私が超能力を使ってやったことです」

「岡田さんも二束のわらじを履いてるんですね？」

「そうですよ、耕平さん。でも私がやったという証拠は絶対に見つからないし、常識的に考えてあり得ないことです。今ここに居ますけど、五分あれば沖縄の銀行の現金を盗むことも出来ます」

「いわゆるテレポートを使うということですね？」

「真吾さん、これ以上話す必要はないでしょう。お互いのことは全て分かってると思いますから」
「それじゃあ本題に入ります。岡田さん、あなたを呼び出したのは、我々の計画に参加していただきたいからなんです」
「真吾さん、話を聞くと長引きそうですから、失礼してテレパシーで読ませてもらいます。いいですね？」
「もちろん。そのほうが誤解がなくて済むし・・」

岡田は真吾に意識を集中すると、わずか十秒足らずで真吾の考えてることを読み取った。

「フフフフ・・。面白い。実に面白い計画です。喜んで参加させてもらいます。ただし我々三人のことは誰にも口外しないこと。もし超能力者が見つかったら、その人も参加させる。この案でいかがですか？」
「ＯＫです。岡田さん、これからは我々の時代です！」
それから二人は超能力の使い方、より強いパワーの出し方や、その他のノウハウを岡田から教えてもらった。岡田自身、同じ志を持った超能力者が現れたことに、気持ちの昂ぶりを抑えきれない様子だった。

5―1

杉山真吾、岩崎耕平、それに岡田俊介の三人が計画を実行し始めてから、今以上に全国で小額の現金がなくなるという事件が頻発した。そのどれもが犯人の手がかりが全くなく、一人として逮捕されていない。

「ねぇねぇ、神人君。大事件じゃないけど、最近小額の現金がなくなるっていう事件が多いと思わない？」

神人は中学校の同級生の島崎仁美と、ピザ専門店で昼食を食べていた。小中学校のとき健太と彼女を巡って火花を散らしていたが、今は自分が一緒に居るという事が信じられない。スポーツクラブで一緒になってから、土曜日は一緒に昼食を食べることにしている。と言っても、仁美が強引にそう決めてしまったのだ。今では小中学校の頃と逆で、仁美のほうが神人に熱をあげている。

「ふぅ～ん、そうなの？」

「日本全国で起きてるわ。金額は百万から五百万円ぐらいなんだけど、何十件ともなると凄い金額になるわ。不思議なのは、まだ一人の犯人も捕まってないの。それに手がかりが何もないのよ。まるでルパンの仕業みたいだわ」

「不思議だね。小額だから、警察も真剣に調べてないんじゃないの？」

あまり関心のない神人は、ただ話を合わせるだけのような感じで答えた。

「神人君、この事件はどうでもいいって言うの？　何だかそういう感じに聞こえたんだけど」

「あっ、ゴメン。でも僕らが気にしても何も出来ないし、警察に任せるしかないと思ったんだ」
「そうよね。それしかないわよね」
「どうしたの？　何か問題でもあったの？」

何か今日の仁美は変な感じがする。テレパシーで彼女の考えを読めばすぐに分かるのだが、私利私欲や私的なことに神等力を使うのは、神の意思に反するので使えない。

「私ね、婦人警官になろうと思うの」
「えぇぇぇ！　婦人警官！　なんでまたよりによって婦人警官に？」
「悪人をやっつけたいの。それには警官になるしかないでしょう？　化粧品会社の仕事はやっぱり私には向いてないわ。ねぇ、一緒に警官になって悪いやつらをやっつけようよ！　愛知県の警察官採用試験の申込日がそろそろだから、一緒に申し込もうよ。ねっ、いいでしょう？」

突拍子の無い仁美の話だったが、神等力を活かすには警官になるのも悪くはないと思った神人は、仁美と一緒に申し込むことにした。

神人と仁美は無事に警察官採用試験に合格し、晴れて警察官となった。神人は学力試験、体力試験ともずば抜けた成績だった。仁美も中学の頃から成績は良く、スポーツクラブに通って鍛えていたこともあり、女性の中ではトップの成績だった。

採用試験のずば抜けた成績の結果、二人は希望の刑事課に配属された。新人がいきなり刑事課に配属されるのは、全く異例中の異例のことで前例がない。それもそのはず、神人は二人とも刑事課に配属されるように、神等力を使ったのだ。

採用試験の結果がずば抜けていても、全くの素人に入社の日から刑事が勤まるわけが無い。二人は四十代後半のベテラン刑事の、斉

藤繁明の下で働くことになった。

二人の記念すべき初仕事は、既に斉藤が調査している盗難事件だ。ある地方銀行の金庫の中の百万円が無くなったのだ。数千万円ではなく百万円だ。警察は従業員全員を調べたが、怪しいものはいない。証拠となるようなものもない。言うなれば忽然と消えたとしか言えない状況だ。

「斉藤さん、全国各地で起きている事件と同じですね」

「そうだな」

仁美の言ったことを上の空みたいに聞きながら、何の感情もこもっていない返事を返した斉藤は、捜査に行き詰っていた。まったく何の証拠もないし、怪しい人影を見た者もいないのだ。

斉藤は内心、支店長の数え間違いか、あるいは最初から百万円なかったのではないかとも思った。状況からしてそれ以外に考えられないのだ。今まで数多くの事件を扱ってきた経験から言えることは、現場には何かしら証拠が残されているものだが、今回の事件では髪の毛一本も落ちてないのだ。

神人は神等力を使って現場を探ってみたが、何の手がかりもない。もしこれが誰かの仕業だとしたら神以外に考えられない。あるいは自分の他に神等力を持った者がいるのか？　そんなはずはない。神等力を私利私欲に使ったら、神罰が下るはずだ。だとしたら一体誰が・・。神等力に不可能はないと思っていた神人は、百万円が無くなったという三面記事に載るぐらいの小さな事件の裏に、とてつもない何かが隠れているような気がするのだった。

5－2

「あなた、探偵の仕事は順調みたいね。それで身体の調子はどうなの？」
「あぁ、仕事も身体も絶好調だよ。こんなことなら、もっと早く会社を辞めたら良かった。今となってはどうでもいいことだけど。アッハッハッハッハ」

顔色も良く明るく笑う真吾を見ていると、首吊り自殺に走ったのがウソのように思える。収入も会社勤めのときの三倍になっている。守秘義務があるということで仕事のことは一切口にしないが、真吾が伸び伸びとやっていることと、収入が増えたことに静江は満足だった。

「あら、今度は愛知県で起きてるわ」
静江が朝刊の三面記事を見ながら言った。
「何が？」
「現金が盗まれる事件よ。それにこの事件も各地で起きてる事件と同じで、何も証拠が無いんですって。同一犯じゃないのかしら・・」
「いくらなんでも同一犯ってことはないだろ。移動するのに時間がかかるし、きっと怪盗ルパンの仕業だな。じゃあ、行ってくるよ」
真吾はそう言うと、探偵の事務所に借りているテナントに向かった。事務所に到着してみると既に耕平が出勤している。耕平はパソコンを立ち上げ仕事の依頼を確認しているところだ。

「耕平君、仕事の依頼は来ているか？」
「亭主の浮気の調査と、ストーカーの調査依頼の二件です」

調査依頼のほとんどは浮気調査で、ストーカーの調査依頼は今回

が初めてだ。早速依頼者と連絡を取ると、その日の夕方、二人は依頼者と待ち合わせの場所へ向かうことにした。依頼者は柴田麗華、二十四歳。アパートで一人暮らしのＯＬだ。彼女の話では、一ヶ月ほど前から男に監視されていて、警察に相談しても四六時中の見張りは出来ないと言われたそうだ。

男はほとんど毎日、麗華がバス停からアパートまで歩く間、物陰に隠れながらアパートまで付いてくるという。麗華は恐くて恐くて仕方がないが、警察が取り合ってくれないので、真吾たちに警護を兼ねて相談したのだった。

探偵に警護を依頼すること自体がお門違いだが、真吾は引き受けることにした。それは自分たちの超能力を試すための、絶好の機会だと思ったからだ。

「柴田さん、毎日ストーカーが出るのだったら簡単です。今晩ケリをつけます。安心してくださし」

真吾の言葉に麗華は深く頭を下げた。その後二人は麗華と一緒にバスに乗り、同じバス停で降りた。ストーカーに怪しまれないように、何気ない素振りで雑談しながら歩いた。麗華との距離を三十メートルほど取って、付かず離れず歩いた。

麗華がアパートに入るのを確認した二人は、アパートを通り過ぎ物陰に隠れた。それを待っていたかのように、どこからともなく一人の男が現れた。男は周りを警戒しながらアパートに近づいていった。

「耕平君、あいつの考えを読んでみてくれ」

「真吾さん、あの男、今夜柴田さんを強姦するつもりですよ。包丁と粘着テープ、それに目だし帽を準備してます。どうしますか？」

耕平は真吾に言われたように、ストーカー男をテレパシーで操っ

た。男は持っていた包丁を振り回し、アパートのドアを蹴ったり叩いたりして暴れまくった。十分後に到着した警官に現行犯逮捕された男は大声で叫んだ。

「柴田麗華を強姦して殺してやる。女は皆、強姦して殺してやる」

男は耕平の意のままに操られ、本性を剥き出しにした言葉を吐いた。それは魔虫に巣食われたために、本来は善人であるこの男の潜在意識とは無関係に出た言葉だった。男は逮捕されたが、魔虫を退治しないことには更生することはない。もし出所したら同じ犯罪を犯すことになる。魔虫が巣食っている限り。

「悪魔消滅！」

真吾が不敵な表情で呟いた。アパートの周りは野次馬で騒然としている。男が警官に連行されたあと、麗華は真吾と耕平へ部屋の中に入るように言った。

「一体どうなったんですか？」

男の理解できない行動に麗華が尋ねた。

「ああいう変質者は警察に逮捕させるしか方法がないので、逮捕されるように仕組んだんです。どうやったのかまでは企業秘密なので言えませんが・・」

麗華は理由がどうであれ、ストーカー男が逮捕されたという現実に胸を撫で下ろした。二人に依頼して良かったと思った。

翌日は浮気調査に向かった。耕平のテレパシーを使えば、浮気調査は簡単に解決する。浮気の日時と場所をテレパシーで読み取り、先回りしてその現場に依頼者を連れてくるのだ。

表向きの探偵社も口コミで評判が広がっていた。浮気調査はサクセスと。口コミの広がりとともに、依頼、実績ともに右肩上がりと

なっている。探偵社の売上だけでも充分生活できる。

5―3

ある会社の業績が上がれば、反して下がる会社が出てくる。探偵社サクセスへの依頼が増えたことにより、同業者への依頼は確実に減っていた。

いつものように耕平がパソコンを立ち上げ、依頼内容を確認し始めた。そのほとんどが浮気調査依頼だ。耕平はてきぱきと予定に組み入れ、依頼者へ返信を返していく。それに混じって家出の調査依頼が一件入っていた。

二人は家出調査の依頼者と会うために、待ち合わせ場所へと向かっていた。依頼者は七十半ばの女性だ。一人暮らしをしていると言い、待ち合わせ場所は依頼者の自宅だ。一人暮らしの七十過ぎの女性がインターネットを使うというのは珍しいが、二人は特に気にもしなかった。

閑散とした農村の古民家に到着した二人は、顔を見合わせた。外から見る古民家は朽ち果てていて、どう見ても人が住んでいる気配がしないのだ。クルマから降りた二人が入口まで来たときだ。どこからともなく四人の男が現れた。

真吾と耕平は、小さい頃から殴り合いの喧嘩をしたことがなかった。理由は簡単で、殴られるのが恐かったのと、喧嘩しても勝つ自信がなかったからだが、超能力を身に付けた今は違う。たとえボクシングや空手の世界チャンピオンだろうが負ける気はしない。

男たちは全身から危険な匂いを発散させているが、真吾と耕平にはそれが何の効力も発揮しない。むしろ二人の戦闘意欲を掻き立てるだけだ。そのことに気づいていない男たちにとてつもない災難が降りかかるとは、彼らの誰も予想することが出来なかった。

「真吾さん、彼らは暴力団です。誰かの依頼で、僕らを半殺しにしようとしてますけど、どうしますか？」
「耕平、俺に任せてくれ。お前は手出しをするな」

二人は男たちに聞こえないように小声で話した。耕平は真吾がどんな戦いをするのか見ることにした。真吾の姿は自信満々に見える。

「兄さんたち、あんたらに怨みはないけど、少しだけ痛い目にあってくれ」

その男の言葉が合図だった。真吾たちに有無を言わさず、四人の男は一斉に真吾と耕平へ襲い掛かった。男たちは全員、二人が叩きのめされて地面に這いつくばっているところを想像していた。そうなるはずだった。

男たちとの距離が二メートルに縮まったときだ。平然と立っている真吾の眼光が鋭く光った。

「うっ！　ううぅ・・」

四人の男全員が左胸を押さえて倒れこんだ。胸を押さえて悶え苦しんでいる。その表情から激痛に襲われてるのが分かる。あまりの激痛に、額には脂汗が滲んでいる。心筋梗塞だ。真吾は超能力で、男たちの心臓の血流を止めたのだ。

「私は神に守られてるんです。私に危害を加えようとすると神罰が下るんです。分かったでしょう？　分かったら二度と我々に手出しはしないで下さい」

真吾の言葉が終わると、男たちは激痛から開放された。彼らが苦しんでいた時間は三十秒ぐらいだった。激痛が去ると、男の一人がまたしても真吾に襲いかかろうとした。

他の三人が止めようとしたが手遅れだった。真吾に襲い掛かった男は再び激痛に襲われ倒れた。三人の男が駆け寄ったが、どうしたらいいのか、なす術がない。

「頼む！　分かったからもう止めてくれ。あんたらには決して手出ししない」

「私は何もしてませんよ。見たら分かるでしょう。それより救急車を呼んだほうがいいんじゃないですか。関わり合いになるのは嫌なので、我々は引き上げます」

真吾の言葉に男の一人が救急車を呼んだ。真吾は超能力を止めるつもりはない。彼らには見せしめが必要と考えていたからだ。約十分後に救急車が到着したが、男は息を引き取った。死因は急性心筋梗塞。現場から離れたところで様子を見ていた真吾が小さく呟いた。

「悪魔消滅！」

5―4

真吾たちが襲われた翌日、中堅暴力団川津組の金庫から、現金五千万円が無くなった。組長が金庫から現金百万円を取り、その五分後に再び五十万円を出すために金庫を開けたら五千万円が無くなっていたのだ。組長は頭を捻ってみたが、現場の状況からどう考えても消えたとしか考えられない。

川津組の事務所では、川津猛組長の怒りに組員が怯えていた。川津は消えた五千万円よりも、組員四人が素人二人にやられたことが許せなかった。うち、一人は死んだのだ。恥さらしの現実に組長の怒りは膨れ上がるばかりだった。

「山城、どんな手を使ってでも探偵屋二人を殺せ！　手を出したら神罰が下るだと？　ふざけたこと言いやがって」

「はい、組長」

組長は若頭の山城に、真吾と耕平の殺害を指示した。二人の居所は分かっているので殺すのは簡単だ。山城はヒットマンを使うことにした。

その頃、探偵社サクセスの事務所では、真吾と耕平が最強の人類の自分たちに祝杯をあげていた。

「真吾さん、俺、子供の頃からスーパーカーに乗るのが夢だったんです」

「夢じゃなくて今は実現できるぞ。ポルシェでもフェラーリでも買ったらいいじゃないか。川津組が五千万円寄付してくれたことだし。アッハッハッハ」

今は他愛の無い雑談が楽しい。安月給でこき使われていたサラリ

ーマン時代と違ってストレスは全く無いし、表と裏の仕事を合わせた収入は、サラリーマンをやっていては想像も出来ないほどの額となっている。ジャパニーズ・ドリームを手に入れた。二人はそう思っていた。

「耕平君、俺たちは神だ。そう思うだろう」
「思います。タネのあるマジックと違って超能力を使えるんですからね。僕らに出来ないことはありません。まさに神です」

二人は自分たちの言葉に興奮していた。俺たちは人類を超えた人類。超人類だ。いや違う。それ以上だ。神の領域に入ったのだ。そんな想いが二人の頭の中を駆け巡っていた。
「耕平君、今のところ俺の超能力は念力と、血流を止めることと、これだ」
真吾はそう言うと壁に手を押し当てた。あろうことか、押し当てた手が壁を貫通したのだ。

「凄い！」
耕平が歓喜の声を発した。

「真吾さん、僕はテレパシーとテレポートとこれです」

同じように耕平は、右手を机の上のガラスの灰皿に向けた。その途端、手から灰皿に向けて稲妻のような光が走り、灰皿が爆発したかのように粉々に砕け散った。落雷波だ。耕平は手から落雷波を出すことが出来るのだ。

「凄まじい破壊力だな！」
「はい。もと電気工事屋ですから、電気を出すことができます。これは冗談です。アッハッハッハ」

5―5

川津組若頭の山城は、真吾と耕平の殺害を言われた翌日から行動を開始した。一週間かけて二人の行動パターンを調べた山城の作戦は単純で、二人がサクセスの事務所に来たところを狙撃するというものだ。事務所は人通りの少ない、人目に付きにくいという立地にあるため家賃は安い。この立地条件が狙撃には絶好の条件となった。

狙撃当日、山城とヒットマンは予め調べておいた場所に身を潜め、二人の来るのを待っていた。山城自身、狙撃には自信がある。山城が真吾を、ヒットマンが耕平を狙撃する作戦だ。

山城とヒットマンは、真吾と耕平が事務所から一緒に出てくるのを待った。じっと待った。狙撃のチャンスは一回だけだ。一緒に出てきたところを仕留めるつもりだ。

事務所に入ったのは耕平が八時五十分、真吾が八時五十五分。それからそろそろ十時半になるところだ。真吾と一緒に事務所を出ようとした耕平は、携帯電話を机の上に置き忘れたため事務所に戻った。それをポケットにしまって出ようとした時、五十メートルほど先の物陰で何かが光ったような気がした。

第六感というか虫の知らせというか、何か不吉な予感がした耕平はテレパシーを放って、周囲をスキャンし始めた。耕平のテレパシーは、怒っているとか興奮しているとか、危険な匂いを発散させているような人物を探し当てるまでにレベルアップしていた。

ヒットマンと山城はプロだ。プロの殺し屋だ。気配を消して狙撃のチャンスを窺っていた。例え相手が赤子だろうと、依頼された仕事に手抜きはしない。真吾と耕平に対しては尚更、全神経を集中さ

せていた。二人一緒に出てきたら、間違いなく殺せると確信していた。過去の経験から言って、それは絶対に間違いない事実だった。

その絶対の自信を、耕平のテレパシースキャンは打ち砕いた。真吾と耕平に対して、二人は気づかれないように注意を払いながら隠れていた。ただし自らの殺意を隠すことは出来ず、耕平にスキャンされ存在がばれてしまったのだ。

「真吾さん、危ない！」

耕平は大声で叫んだ。このこと自体が耕平の大きなミスであり、経験不足による失態だった。本来ならテレパシーで伝えるべきだった。耕平の声で反射的に身を低くした真吾の左肩を激痛が襲った。

耕平も叫びながら身を隠そうとしているところへ、銃弾が左の頬をかすめた。間髪おかず立て続けに銃弾が飛んでくるが、身を伏せている二人には当たらない。銃声が聞こえないのは消音装置を付けているからだろう。

「一刻も早く真吾さんを病院に連れて行かなくちゃ」

耕平は焦った。肩を打たれた真吾は激痛のためか意識がないが、出血が酷い。耕平はドアを少し開け、狙撃犯が隠れているであろうところに落雷波を放った。稲妻のような光が、ヒットマンと山城から五メートルほど離れた所に当たった。落雷のような凄まじい高圧電流が流れ、二人は数分の間、気を失っていた。

五分後に到着した救急車で運ばれた真吾は、緊急手術を受けた。幸い弾は心臓を外れていたため命に別状はない。サクセスの事務所では警察による現場検証が行われ、十二発の弾丸が見つかった。狙撃地点と思われる場所からは、犯人が証拠となるものを持ち帰ったらしく何も発見されなかったが、落雷の後のような形跡があった。

5－6

面会謝絶の札が外された翌々日、神人と仁美は事情聴取のため真吾の病室を訪れた。病室は個室だ。笑顔で挨拶をした二人は怪我の具合を尋ねた。

「おかげさまで、順調に良くなっています」

「早く良くなるといいですね。ところで杉山さん、今回の事件についてお聞かせ願いたいんですけど・・」

そこまで言った時、ドアが開いて耕平が入ってきた。

「真吾さん、大丈夫ですか。命に別状ないと聞いてたんですけど、心配で心配で・・」

「耕平君、心配かけてごめん。あっ、こちらは刑事さんの天乃さんと島崎さんだ。事件のことを聞かせて欲しいそうだ。君も一緒に話してくれ」

「分かりました」

狙撃される直前にテレパシースキャンを行った耕平は、山城の素性を掴んでいた。そのことをテレパシーで真吾に伝えた。

「悪魔め。神に牙を剥いたらどうなるか思い知らせてやる！」

真吾は耕平にそう返した。テレパシーでの会話なので、傍に人がいても聞かれることはない。真吾の思いを受け取った耕平は、神人と仁美に興味が湧いたので二人の意識を覗いてみることにした。

先に仁美の意識を覗いてみると、神人に恋心を抱いているものの、自分の思いを打ちあけられない乙女心を嘆いていた。ニヤリとしながら神人の意識を覗こうとした時だ。意識に触れた瞬間完璧なガードが張られ、逆に神人が意識に入り込んできたのを感じた耕平はガ

ードを張った。
今まで意識に入ってこられたのはマスクマンしかいないが、神人のテレパシーはマスクマンよりもはるかに強力だ。今にもガードが破られそうで、耕平の額には汗が滲んでいる。

「耕平さん、あなたがたを襲ったのが誰かは分かりませんが、何か心当たりはありませんか？」
神人はその状態でも、何事もないように質問をしてきた。耕平はガードを破られないようにするのが精一杯で、とても質問に答えられる状態ではない。

「耕平さん、顔色が良くないですね。具合が悪そうですから、僕たちはこれで失礼します。何か思い出したら連絡お願いします。それでは・・」
神人と一緒に仁美も頭を下げ、二人は真吾の個室から出て行った。
二人が出て行くのを確認すると、耕平は大きく息を吐いた。

「ふぅうう」

「耕平君、どうした？」

「真吾さん！　天乃刑事ですけど超能力者ですよ。それに僕よりも何倍もレベルが上です。僕の意識に入り込もうとしたので、必至にガードを張ったんですけど、もう少しで破られるところでした」
「もしかしたら、俺の意識を覗かれたかも知れないな。俺はテレパシーが使えないから、入り込まれても分からないから・・」

「どおりで急に引き上げたんですね。僕らが全国でカネを盗んでいるのも、間違いなくばれてしまいました。これからどうします？」
「方法は二つしかない。天乃刑事を仲間に入れるか殺すかだ。天乃

刑事は他にどんな超能力が使えるんだ？」

「意識を覗こうとした途端にガードを張られたので分かりません。でも相手は刑事です。仲間に入れと言っても無理でしょう。殺すしかないと思います」

「そうだな。神は俺たちだけで充分だ。天乃刑事には死んでもらおう。ヤツは神にはなれない。神に逆らうやつは悪魔だ。悪魔は片付けないと皆が苦しむことになるからな」

耕平は真吾の指示で、マスクマンこと岡田俊介にテレパシーで連絡を取った。

「耕平君、天乃という刑事に今までの犯行を知られたとしても、逮捕されることはないです。証拠が無いんだから。それに天乃自身が自分の能力を隠してるはずです。もし公表してたら大騒ぎになりますから。そう考えると僕らのことを捕まえるのは不可能だ。僕らは神出鬼没だから。ヤツが何か行動を起こすまでは、こっちからヤツに仕掛けないほうがいいでしょう」

「でも天乃刑事も超能力者です。僕よりも強力なテレパシーを使います。もし、他にも能力を持ってるとしたら、僕らが危なくなります」

「こっちは三人だし大丈夫です。それに君の情報から思うのは、仁美という女性刑事がヤツの弱点だ。最悪の場合、仁美刑事に楯になってもらいます」

「俊介さん、これから僕らはどうしたらいいですか？」

「今までどおり現金を手に入れてください。何も問題ありません。それより、川津組を叩くんでしょう？」

「はい。真吾さんが退院したら目に物見せてやります」

5―7

署に戻った神人と仁美は、今回の狙撃事件について話し合っていた。

「結局あの二人からは何も情報得られなかったわね。目撃情報もないし、これからどうする？」

「殺そうとするんだから、それ相当の理由があるはずだよ。二人に共通の何かがあると思うよ」

「怨恨とか？」

「それもあるだろうし、利害関係もあるだろうな」

神人は真吾の意識から全て知っていたが、それを仁美に言うわけにはいかない。それよりも、自分が神等力の持ち主だということを、耕平に知られてしまったのがまずかった。

「じゃあ、交友関係とかライバル会社とかを調べるしかないわね」

彼らを襲ったのは川津組の若頭の山城とヒットマンだ。ヒットマンは一匹狼の殺し屋で素性は一切不明とされているが、テレパシーにかかれば裸同然だ。名前は伊達拓馬、四十二歳。真吾の意識から得た情報だ。

川津組を探ることにした神人だったが、仁美を危険に巻き込むわけにはいかない。正直なところ彼女が一緒だと何かと足手まといになる。神人は単独で調べることにして、仁美には彼らが以前勤めていた会社の社員を調べるように頼んだ。

神人が単独で川津組を探ることに対して、なぜ川津組を調べるのか、ベテラン刑事の斉藤繁明が聞いてきた。

「刑事の勘っていうやつです」
「君は刑事になったばかりで、勘が働くほどの経験はないだろう？」
「すみません、間違えました。新米刑事のただの直感です」
「まぁ、どっちでもいいけど、何の根拠も証拠もなしに深入りすると危険だから充分注意するんだぞ。相手は暴力団だからな」
「無茶はしませんから」

神人は川津組の事務所の近くまで来ると、事務所に出入りする男たちを順番にテレパシーで調べていった。その中の一人が、山城とヒットマンが狙撃に失敗したことを知っていた。さらに、今事務所の中に山城がいることも分かったが、ヒットマンの居所までは男は知らなかった。

神人は山城の意識を覗いてみることにした。神等力に不可能はない。姿が見えなくても居場所さえ分かれば意識を覗けるのだ。山城はヒットマンと一緒にもう一度、真吾と耕平を狙撃することにしていた。前回は素人ということで甘く見ていたが、何か不思議な力を持っていることが分かった今、慎重に計画を立てることにしている。

「神人君、彼らが以前勤めていた会社で聞き込み調査をしたけど、杉山さんは体調不良で入院して、岩崎さんは仕事中の事故で入院してたの。二人とも退院後に会社を辞めてるわ。二人とも人に怨まれるようなことは無かったけど、杉山さんは上司に酷いパワハラを受けてたみたいよ。それに・・」

仁美は調べてきたことを説明したが、役に立ちそうな情報は何も無かった。彼女は調べた結果が云々ではなく、神人の役に立ちたい、喜んでもらいたい、それだけのために調査をしていた。

仁美の調査結果は聞かなくても分かっていたが、そのことを言うわけにはいかない。神人はそんなこととは知らずに、必死で調べている仁美に対して、何かしら後ろめたさを感じていた。

「仁美ちゃん、ありがとう。消去法でいけば、彼らが以前勤めていた会社関係で怪しい人物はいないないことになるね」
「あたしの調査結果も少しは役に立った？」
「もちろん大助かりだよ」

「斉藤さんから聞いたんだけど、暴力団の川津組を調べたの？」
「あっあぁ・・、新米刑事の直感っていうやつで、特に何の根拠もないんだけどね」
「何か分かったの？」
「組員に聞き込み捜査をするわけにもいかないし、結局、何も出来なかった」
「じゃあ、あとは現場の再調査と、被害者へもう一度聞き込みをするしかないわね」
「それと被害者がまた襲われないとも限らないから、張り込みも必要だよね」
「張り込みと言っても、二十四時間、三百六十五日というわけにはいかないでしょう？」
「俺の直感は昔から良く当たるんだ。だから閃いた日に張り込むとするよ」
「刑事がそんないい加減なことでいいの？」
「だって仕方ないよ。杉山さんから何か手がかりが聞ければそっちを調べるけど、今のところ捜査も行き詰ってるし・・」

5－8

二週間後の十月半ば過ぎ、杉山真吾は退院した。サクセスの事務所に出勤すると開口一番、耕平に静かな口調で言った。

「耕平君、川津組の奴ら必ずまた襲ってくるぞ。その前にあいつらを叩かないといけないな」

「僕もそう思ってました。それでいつ殺りますか？」

「殺ると決めたら早い方がいい。明後日の日曜日に実行だ。完全犯罪にするからアリバイが必要だ。日曜日の午後一時に俺の家へ来てくれ」

犯行当日、耕平は時間どおりに真吾の自宅を訪れた。玄関に入ると客が来ているらしく、女性ものの靴が並んでいる。耕平は出迎えに来てくれた真吾に尋ねた。

「お客さんですか？」

「あぁ、女房の友達が三人来てるんだ。今日は月に一度の彼女たちのケーキパーティなんだ。パーティーと言っても、ケーキを食べながら雑談してるだけだけどね」

「お邪魔じゃないですか？」

「完全犯罪にはアリバイが必要だから、今日を選んだんだ」

真吾は囁くように言った。耕平と一緒にリビングに入ると、三人の女性客に挨拶をした。

「こちらは、一緒に仕事をしている岩崎耕平君です」

「こんにちは、お世話になってます。岩崎耕平です。わぁあ、美味

しそうなケーキですね」
「こんにちは。お邪魔してます。良かったら一緒にどうですか？これは私たちの手作りのケーキなんです。手前味噌ですけど、とっても美味しいんですよ」
女性客の一人が言った。

「お言葉に甘えたいんですけど、せっかくの楽しいパーティを邪魔したら悪いから皆さんで楽しんでください。折角なので、ひとつもらっていいですか。私らは仕事の打ち合わせがあるので、書斎に行ってます。どうぞ、ゆっくりしていってください。それじゃ・・」

真吾は耕平と一緒に、一階の真吾の書斎へと入っていった。その姿を三人の女性客はしっかりと見ていた。
書斎に入った真吾は人差し指を口の前に立て、「静かに」というジェスチャーをした。身振りでテレパシーで話しかけるように指示すると、耕平はすぐにテレパシーで話しかけてきた。

「耕平君、人に聞かれるとまずいからテレパシーで話してくれ。川津組を叩く件だが、奴らに俺たちが神だということを見せてやるんだ。そして神に逆らったらどうなるかもな」
「そうですね。それでどういう手で殺りますか？」
「俺にいい考えがある。実は・・・・」

壁に耳あり障子に目ありだ。いつ誰に聞かれてるとも分からないので、二人はテレパシーで意思を伝え合った。時間的には一分もかかっていないが、一切の誤解が無く、お互いの考えが完璧に伝わった。

5―9

作戦実行のため、二人は川津組の事務所前にテレポートした。三階建てのビルだ。事務所には新日本興業株式会社と看板が出ているが、社名からはどんなことをしている会社なのか見当がつかない。

ドアを開けて事務所の中に入ると、カウンターの上に電話機が置いてあるだけで誰もいない。そこから事務所の中は見えないようになっている。天井には監視カメラが設置されている。一見して、一般庶民が立ち入る場所ではない雰囲気だ。

真吾は電話機の横に置いてある内線電話帳を手に取ると、川津社長の内線の番号を押した。五回の呼び出し音のあと受話器が取られた。

「はい。こちらは社長室でございます」

受話器から聞こえてきたのは若い女性の声だ。多分社長秘書だろう。声と落ちついた口調から判断すると知的で美人だ。年の頃は二十代半ば。そんなことを考えながら真吾は用件を言った。

「お世話になっております。探偵社サクセスの杉山と申します。社長はいらっしゃいますか？」

「お約束でしょうか？」

「いいえ、約束はしてませんが、五分ほどお時間いただければありがたいんですが・・」

「少々、お待ちくださいませ」

受話器からエリーゼのための保留音が流れ始めた。三十秒ほど待たされて、再び秘書の女性が受話器を取った。

「ご案内しますので、そちらでお待ちください。すぐに伺います」

言葉通り、すぐに社長秘書と思われる女性が現れた。真吾の予想通り知的な感じだ。身長は百七十センチほどあり、外人っぽいルックスはハーフだろう。どことなく危険な感じもする。

真吾は耕平に、事務所で会う人間の考えを読み、自分にテレパシーで伝えるように指示していた。耕平は社長秘書の考えを読み真吾に伝えた。

耕平に秘書の考えを伝えてもらった真吾は、心の中で苦笑した。秘書の名前は佐々木マリア。イギリス人の母親と日本人の父親とのハーフだ。こんな美人がこんなことを思っているとは、人は見かけによらないものだ。

（しけたツラしてやがるな。どうせ一物もチンケなんだろうな。こんな貧乏たらしい奴らに、何で組長は会う気になったんだ？）

ニヤリとした真吾を見た耕平が、すかさずテレパシーで伝えてきた。

「このアバズレ女に、恥をかかせてやりますか？」

「素っ裸で俺たちを案内するように操ってやれ。組長もお気に召すだろうし、本人も、しけた俺たちに裸を見せてやりたいだろうからな。アッハッハ」

二人の会話はテレパシーだから、マリアが気づくことは無い。耕平は真吾に言われたようにマリアを操った。裸になったマリアは抜群のスタイルだ。形のいいバストに、くびれたウェスト、キュッとあがったヒップ、モデルか女優にでもなったら、たちまち一流になるだろう。そんなマリアに案内されて、二人は社長室に入った。部屋には五千万円をいただいた金庫があり、耕平はここに来るのは二回目だ。

「マリア！　お前、何やってるんだ！　すぐに服を着てこい！」

組長に大声で怒鳴られ、我に帰ったマリアは、咄嗟に下腹部と胸を両手で隠し前かがみになった。さっき考えていたこととは裏腹に、女の恥じらいを持っていたマリアに、真吾は申し訳ないことをした気持ちになった。

川津組長は身長は約百七十センチ、体重九十キロはあろうかというデップリとした体格だ。健康診断を受けたら間違いなくメタボと言われるだろう。こんな醜いオヤジが、超一流モデルのようなマリアを抱いてるのかと思うと、それだけで組長は悪魔に思える。

「川津さん、我々を襲っていただき何とお礼を言っていいのやら。今日来たのは、そのお返しのためです。お返しを受け取ってもらえますか？」

「川津組に因縁をつけに来たのか！　お前らを襲っただと？　証拠を見せてみろ！」

「証拠はあんたの頭の中にあるじゃないですか？　山城とヒットマンに、我々を狙撃するように言いましたよね？」

組長の表情が険しくなった。動揺しているのが分かる。組長は、なぜ山城とヒットマンのことを知ってるんだ？　としきりに考えていた。

「いいこと教えてあげますよ。ヒットマンの名前は伊達拓馬、四十二歳です。我々に隠し事は出来ないんです。そうだっ！　今が我々を殺す絶好のチャンスです。山城とヒットマンをすぐに呼んでください。早くしないとあなたを先に殺します」

「ど素人がヤクザを脅すのか！　面白い。望みどおりにしてやる」

組長は机の下に取り付けてあるスイッチを押した。三十秒も経たないうちに、四人の組員が荒々しくドアを開けて飛び込んできた。その中の二人は山城とヒットマンだ。

「ちょっと待て！」

組長が制しなかったら、彼らはそのまま真吾と耕平に襲いかかっていただろう。机の下のスイッチは緊急用のもので、言わば組長からのＳＯＳなのだ。それは殺しを意味する。

5－10

山城とヒットマンを見た真吾は、笑顔で頭を下げると皮肉を込めて言った。耕平は心なしか青ざめている。

「山城さんにヒットマンの伊達拓馬さん、先日は狙撃していただきありがとうございました。今日はそれのお返しに来ました。我々のお返しを受け取ってもらえますよね？」

驚きの表情に変わった山城とヒットマンだったが、すぐに獰猛なヤクザの顔になった二人は、拳銃を真吾と耕平に向けた。組長の合図と同時に引き金を引くつもりだ。

「お前ら、俺のひと言であの世ゆきだぞ！」

組長が言い終わるのと同時に、山城とヒットマンが床に倒れこんだ。二人とも胸を押さえて、のた打ち回っている。見ただけで激痛だと分かる。一緒に入ってきた二人の組員は、「大丈夫ですか！大丈夫ですか！」を繰り返すだけで、それ以外のことを思いつかない。

「早く救急車を呼べ！」

組長の言葉に、二人は慌てて救急車を呼んだ。

「お返しをさせていただきました。ご覧のように、我々は手を触れずに殺すことが出来ます。なぜなら我々は神だからです」

驚いた表情の組長を見ながら、真吾は右手で組長を指差した。するとあろうことか、椅子に座ったまま組長が一メートルほど浮き上がったのだ。二人の組員があっけに取られているなか、今度は耕平

が観葉植物の鉢に向かって落雷波を放った。鉢は粉々に砕け散った。

「いかがですか？　我々が神だということが分かったでしょう？　本気になれば、何百人、何千人であろうと、瞬時に殺すことが出来るんですよ。今後は我々に手を出さないこと！　いいな！」

初めて見る超能力の凄まじさに、組長は声を出さずにガクガクと頷いた。自分たちの敵う相手ではない。彼らは神だ。そう思った組長の考えを読んだ耕平は、それを真吾に伝えた。結果に満足した真吾と耕平は、真吾の部屋へとテレポートした。二人が川津組の事務所に行ってから自宅に戻るまでの時間は、三十分弱だった。二人がテレポートしたあと救急車が到着した。

「真吾さん、やりましたね」

「これで俺たちに手は出さないだろうし、何でも言うことを聞くだろうな。いよいよユートピア構想が実現するぞ。耕平、その辺のどうでもいい女じゃなくて、芸能人やセレブの女とも付き合えるし、お前の好きなスーパーカーだって簡単に手に入るようになるぞ」

ユートピアは自分たちだけの世界で、誰からの束縛も干渉も受けない、ストレスとは無縁の世界だ。経済的な不安も無く、好きなときに働き、好きなときに遊び、好きなときに寝るという、まさにユートピアなのだ。

ユートピア構想について熱く語る真吾に、耕平は心酔しきっていた。この構想はマスクマンにも伝えてあり、実現に向けて動き出している。実現には多額の資金が必要となるため、まずは資金集めだ。それと平行して超能力者を見つけることも必要だ。資金集めに関しては、超能力を使えば何の証拠も残さずに盗むことが可能だ。今までそれで集めた資金は十億円を超えている。

問題は超能力者を見つけることだ。自分たち以外に超能力者が居るのか？　居るとしたら何処に居るのか？　どうやって探すのか？

真吾には、この三つの問いのどれにも今の時点では答えが出せないでいた。

「真吾さん、超能力者が居るとして、時間はかかりますが探すのは可能ですよ」

「どうやって見つけるんだ？」

「テレパシースキャンです。真吾さんとマスクマンに試してみたんですけど、超能力者はすぐに分かるようになりました。だから人が大勢集まる場所とかでスキャンすれば、見つかる可能性も高くなると思います」

「そうか！　じゃあ明日から超能力者探し頼んだぞ」

一時間後に部屋から出てきた二人は、リビングに入った。耕平は遊びに来ている主婦らに帰りの挨拶をし、真吾の自宅を後にした。

5―11

山城とヒットマンが心筋梗塞で死んだという情報は、神人と仁美の耳にも入った。「一足遅かったか！」心の中で呟いた神人は、真吾と耕平に会うことにした。二人が山城たちを殺したのはほぼ間違いないだろうが、どうやって殺したのかを調べるためだ。

「仁美ちゃん、杉山さんが退院したそうだから、俺、会いに行って来るよ」

「私も一緒に行くわ。いいでしょう？」

相手は超能力者だから仁美に付いて来られると迷惑だが、断る理由がないので一緒に行くことにした。真吾たちとは明日の月曜日の午前十一時に、サクセスの事務所で会うというアポが取れた。

「耕平、天乃刑事が今日会いに来るということは、山城たちが死んだのを、俺たちが殺したと思ってるな。俺の意識に入られないようにガード頼んだぞ」

「やれるだけやりますけど、もしガードを破られたらどうしますか？」

「そのときは血流を止めてやるよ。出来れば天乃がどんな超能力を持っているかを知りたいな。いずれにしろ、テレパシーで俺たちの犯行だと分かっても証拠がないから逮捕は出来ない。なにせ俺たちは犯行時間に自宅にいたというのを、ケーキパーティの主婦がしっかりと証明してくれるからな」

二人が時計に目をやると約束の五分前になっている。雑談をしながら待っていると、神人と仁美が約束の時間ピッタリに事務所に到着した。

「刑事さん、几帳面なんですね。十一時ピッタリですよ」

「几帳面ではないんですけど・・。お忙しいところ申し訳ありません。手短に済ませますのでよろしくお願いします」

神人と仁美は同時に頭を下げた。神人は自分からはテレパシーを使わずに、相手の出方を待つことにした。相手は超能力者だ。迂闊に意識を探ると、こちらの素性がばれてしまう。しかし神人はどんな超能力者だろうが負ける気はしない。なぜなら自分の能力は超能力を超えた神等力だからだ。神の力は絶対なのだ。

「余談ですけど、昨日、川津組という暴力団の組員が二人亡くなったんです。不思議なことに死因は二人とも心筋梗塞で、同じ部屋に居て同時に心筋梗塞になったんです。こんな偶然というか奇妙なことって何か変ですよね。杉山さんはどう思いますか？」

「さあぁ、そういう偶然もあるとしか言えませんね。それが私たちと何か関係でもあるんですか？」

神人は質問しながら、杉山と耕平の様子を注意深く見ていた。杉山の様子に変化はなかったが、耕平に微妙に動揺の色が現れたのを神人は見逃さなかった。

「岩崎さん、額に汗をかかれてますが、暴力団が亡くなったのが気になりますか？」

岩崎は汗はかいていない。神人がカマをかけたのだ。まんまと神人の作戦に引っかかった耕平は、失態を演じてしまった。

「刑事さん、その時間、僕と杉山さんは杉山さんの自宅に居ました。アリバイはあります」

「何時ごろですか？」

「一時から二時の間です」

「私は組員が亡くなった時間を言ってませんけど、どうして一時から二時の間に亡くなったというのを知ってるんですか？　まだ新聞にもニュースにも出てませんけど」

耕平は、しまった！　という表情に変わった。それを見ていた杉山が、すかさず口を挟んできた。

「すみません刑事さん。私たちの仕事には守秘義務があるので答えられない部分が多いんですが、実はその暴力団から、二人の死に方が不自然なので調べて欲しいという依頼があったんです。これ以上は守秘義務の関係で言えません。分かっていただけますよね？」

「そうでしたか。分かりました。ところで、あの襲撃以来、何か変わったことはありませんか？　あるいは何か心当たりのあることはありませんか？　どんな小さなことでもいいんですけど・・」

真吾に救われホッとした耕平は、仁美の意識を覗いてみた。神人のことが何か分かるかもしれないと考えたからだ。だが仁美の意識からは、有効な情報は何も得られなかった。

神人はありふれた一般的なことを聞くと、サクセスの事務所を後にした。質問はどうでも良かった。事情聴取で何か得られるとは期待していない。テレパシーで探ればすぐに分かるのだが、証拠を掴まないことには逮捕できない。まして超能力者は人間兵器だ。迂闊に手を出すと、自分以外の人に危険が及ぶ可能性がある。

「真吾さん、ありがとうございました。おかげで助かりました」

「天乃刑事は切れ者だな。たぶん俺たちのことを監視し続けるぞ。それに超能力者だからやっかいだな。早めに始末したほうがいいか

もしれないな」
「天乃刑事の超能力がどの程度のものか分からないので、何とも言えませんね。テレパシーだけかもしれないし、あるいはそれ以外の強力な能力を持ってるかもしれないし・・」
「用心するに越したことはない。こっちは超能力者を集めたほうがいいだろう。耕平、とにかく外に出たらテレパシースキャンして、超能力者を見つけてくれ」
真吾は、神人が何かとてつもない能力を持っているような気がしていた。思い過ごしかもしれないが、自分たちとは違う種類の超能力者、あるいは耕平の言うように、テレパシーだけの能力者かのどちらかだ。

5―12

耕平はどこに行ってもテレパシースキャンをしていた。電車の中、映画館、デパート、スーパー、コンビニ、居酒屋など、ありとあらゆる場所で能力者を探した。

その間にもマスクマンと真吾、耕平の三人は、全国各地で百万円から五百万円の現金を盗み続けていたが、次第にその奇妙な事件が注目されるようになり、ある日ニュースに出てしまった。こうなってしまっては、少額の現金を盗む意味はない。三人は今後、銀行の金庫をターゲットにすることに決めた。新札は盗らない。すべて使い古しの札だけだ。

今日は北海道の銀行、明日は沖縄、その次は東京の銀行というように、警察に的を絞らせないようにしていた。盗む時間も深夜、昼間、夕方といろいろだ。金庫の中にテレポートするので時間帯は関係ない。誰にも見られなければいいのだ。多い時には三つの銀行から盗んだ日もあった。それも福岡、神戸、仙台と、同一犯では絶対に不可能な銀行から盗んでいた。

耕平はプロ野球の阪神対楽天の交流戦を観戦するために、甲子園球場に来ていた。甲子園ということもあって圧倒的にタイガースファンが多い。耕平は、大の楽天ファンだ。

耕平は席に着くと端からスキャンを始めた。スキャンを始めて三十分後に、マスクマンや真吾と同じような、超能力者特有の精神の波動を感じた。間違いない。超能力者だ。耕平は逸る気持ちを抑えながら、その意識を探ってみた。

名前は加納春美。年齢は三十五歳で独身だ。彼女には予知能力があると分かった。阪神側の内野席にいるので耕平とは対面する形だ

が、離れているので彼女の姿は分からない。あとは近くまで行って肉眼で確認するだけだ。

スキャンをやめて立ち上がった耕平は、彼女のほうへと歩き始めた。この大観衆の中ではテレポートは出来ない。ゆっくり歩きながら、タイガースファンで埋め尽くされた内野席にたどり着いた耕平は再びスキャンを始め、加納春美の姿を見つけた。

「加納さん、初めまして。岩崎耕平と言います」

突然聞こえてきた鮮明な声に春美は周りを見回したが、声の主と思しき人物はいない。皆一生懸命タイガースの応援をしているファンばかりだ。気のせいかと思ったところへ、再び声が聞こえてきた。

「私が見たところ、あなたには他人にない能力があります。その能力は弱いですが、間違いなく超能力です。驚かれたかも知れませんが、あなたは超能力者です」

春美は周りをキョロキョロと見回したが、誰も話しかけてはいない。そんな春美を無視するかのように岩崎は話し続けた。春美は誰が話しかけているのか必至で探している。

「探してもムダですよ。あなたから離れたところから、テレパシーで話しかけているんです。実はあなたに我々超能力者の仲間になってもらいたくて、話しているんです」

春美は超能力があるといっても、その能力を何かに利用しているわけではない。時々、未来に起きることが見える時があるが、たまたま当たったぐらいにしか思っていない。それを誰かに超能力者と言われ少し動揺していた。

耕平の話を聞いているうちに興味が湧いた春美は、耕平と会って

みることにした。頭の中に届く耕平の指示に従って甲子園球場を出た春美は、出口のところで手を振っている若者が目に付いた。二十代半ばぐらいに見えるその若者は、ゆっくりと春美の方に歩いてくると軽く頭を下げた。

「改めまして、岩崎耕平です。すみません、呼び出したりして・・」
「加納春美です。それでさっきの話しなんですけど・・」
「加納さん、今から私の仲間に会ってもらえませんか。場所は名古屋なんですけど、話すと時間がかかるのでテレパシーを使います」

耕平は真吾のこととユートピア構想を告げ、テレポートで移動することも伝えた。春美は、ＳＦ的で夢のようなことを言っている耕平を疑っている。彼女に信じてもらうには自分たちの能力を見せる以外にないと思った耕平は、彼女に手を差し出し握るように言った。

「大丈夫です。今は僕を信じてもらうしかありません」
春美が耕平の手を握った。

「今から僕らの事務所にテレポートします」

耕平が言った瞬間、二人はサクセスの事務所にいた。初めて経験したテレポートはあっけないもので、春美には今の状況を考える時間さえなかった。

5―13

「加納春美さん、初めまして。私は岩崎くんと一緒に探偵をやっている杉山真吾です。話は耕平君から聞いてます。あなたは超能力者だそうですね？」

「いいえ、そんな・・、超能力者だなんて・・。たまあに頭の中に浮かんだことが現実になることがあるだけですけど、デジャブ現象だと思います。ですから超能力者なんかじゃありません。ただの平凡な人間です」

「加納さん、僕は超能力者特有の波動を見つけることができるんです。あなたは間違いなく、その波動を発してるんです」

「加納さん、あなたの超能力はまだ弱いから、その力を発揮できないんです。我々がその能力を強くしてあげます。どうです？　やりますか？」

少し考えた後、春美はきっぱりと言った。

「杉山さん、お願いします！」

「超能力を強くするには、パワースポットに行けばいいんです。パワースポットと言っても、強力なパワースポットでないと効果がありません。日本で一番強力なパワースポットは伊勢神宮です。明日、伊勢神宮に行きましょう。あなたの人生は明日、伊勢神宮に行ってから劇的に変わります。それはもちろん、あなたが望むほうにです」

翌日三人の姿が伊勢神宮にあった。境内に足を踏み入れた三人は、本堂へと足を進めた。歩きながら大地の発するパワーを受け入れ始

めた真吾と耕平は、身体の奥に強烈なパワーが蓄積されていくような感じを覚えていた。

「加納さん、どうですか？　何か感じますか？」

「はい、何と表現したらいいのか分からないんですけど、何か強烈なパワーが身体に入ってきているような感じです。今まで生きてきて、こんな感覚は初めてです。あああぁ、何だろう、この感覚・・」

三人は一時間ほど伊勢神宮の境内を歩き、大地の発するパワーを吸収した。伊勢神宮を後にし、耕平の運転する車の中で真吾が春美に言った。

「加納さん、あなたの超能力は予知能力です。伊勢神宮で大地のパワーをもらったから、今までとは比べ物にならないぐらい能力が強くなってるはずです。さて、耕平、今からだと事務所に到着するのは何時だ？」

「いつもと同じだから、午後三時半ぐらいになりますね。加納さんは何時だと思いますか？」

「途中で事故があって渋滞するので、四時二十三分です。間違いありません」

クルマは順調に走っていたが、春美の予知どおり、途中でトラックとワンボックスの絡む事故が起きていた。耕平は渋滞のためイライラしている。結局サクセスの事務所に着いたのは、午後四時二十三分。春美の予知はピタリと的中した。

未来が予知できればリスクを回避できるし、何にしても失敗することはない。ユートピア構想に春美の予知能力は不可欠なのだ。耕平が探してきた春美は、まさにノドから手が出るほど欲しかった超

能力者なのだ。

春美は自分の能力に驚いていた。真吾の言ったとおりだ。未来が見えるのだ。今までは自分の考えとは関係なしに、思ってもいないことの未来が夢に出てくるときがあったが、今は違う。考えたことの未来がはっきりと見えるのだ。

「凄い！　素晴らしいわ。杉山さん、岩崎さん、あなたがたの仲間になります。よろしくお願いします」

「ありがとう！　こちらこそよろしく。一緒にユートピアを作りましょう」

「ところで、次のロト６の当たり番号を予知できますか？　毎週買ってるんだけど千円も当たらないんですよ」

「耕平さん、今から言いますから、次回はその番号を買ってみてください」

春美は目を閉じ、約五秒後に予知した番号を言い始めた。

「６、８、２９、３０、３１、４２です。必ず一等が当たります。間違いありません」

第6章　超能力の攻撃を防ぐ遮念布

春美は探偵社サクセスで事務員として働くことになった。一旦、大阪に帰り、現在勤めている派遣の仕事を辞め、身辺整理をしてから引っ越してくることにした。春美は宮崎の高校を卒業後、看護士として某大手病院に勤めていたが、二十八歳で病院を辞めてからは、派遣社員としていろいろな会社を転々としている。

春美に教えてもらったロト6の番号を購入した耕平は、抽選日を今か今かと待ちわびていた。やっと抽選日の翌日の朝を迎え、届いていた朝刊をめくり、ロト6の当選番号を見ていた耕平が、歓喜の雄叫びを上げて狂ったようにピョンピョンと飛び跳ねた。この喜びを、これ以上の方法で表現できないといったように。

「やった！　やった、やった、やった！　一等二億円が当たった！　加納さんの予知が的中した！」

その頃春美も、朝刊のロト6の当選番号を確認していた。伊勢神宮で大地のパワーを得て自分に超能力があると確信した彼女は、耕平に教えた番号で自らも一枚買っていたのだ。

彼女は一等が当たって二億円が手に入ったことより、自分の予知が当たったことに、身震いするほどの興奮を覚えた。今までは運に見放された哀れな女と自分の運命をのろっていたが、今このときを境に、人生が百八十度好転するという確かな自信、否、確信を持った。

その自信と確信は、真吾と耕平とは別の人生を彼女に選択させた。真吾に電話をした彼女は、仕事の引継ぎが一ヶ月ほどかかるため、一ヵ月後にそちらに行くと告げた。

電話を掛け終わった春美は部屋の片付けを手早く済ませると、東

京へ向けて出発した。仕事はとっくに辞めていたが、真吾には一ヶ月の引継ぎ期間が必要だと言ってある。その理由は、自分の新たな人生に必要な準備期間が一ヶ月かかると予知したからだ。

彼女は東京で占い師をやるつもりだった。真吾や耕平と違って、超能力を犯罪に使うつもりはない。予知という能力を最大限に生かす職業は何かと考えた末に出した結論が、東京での占い師という選択だった。

今回のようにロト6や宝くじ、競馬、競輪などのギャンブルを超能力で予知し、懸賞金を稼ぐことは百%可能なのだが、それだと危険な人生になるという予知結果が出ている。占い師だと人生は上手くいくという結果だ。

ただしそのために、自分の身に危険が降りかかるということも予知していた。その危険を避ける方法を考える時間を含めると、一ヶ月という時間が必要だった。東京に着いた春美は、予めネットで予約していたウィークリーマンションに足を運んだ。

マンションに荷物を置くと、時間を惜しむかのように図書館へ向かった。図書館では科学、物理学の書籍を調べた。気になる書籍を見つけると、何か特定の文章でも探しているかのようにページをめくっていった。午後二時に図書館に入り既に三時間が経過しているが、目的のものは見つかっていない。

図書館を出た春美はデパートの地下街で晩御飯用の弁当を買うと、マンションへと戻った。食事と風呂を済ませると、インターネットで検索を始めた。時間は七時だ。ネット検索をしている彼女の姿は、一心不乱という言葉がピッタリ当てはまった。

翌日は朝から図書館へ出かけると、昨日と同じように科学と物理学の書籍を調べ始めた。マンションへ帰るとネット検索だ。その生活パターンが続き四週目に入った時だ。

「やった！　とうとう見つけたわ」

三軒目に入った図書館で目的のものが見つかった。その内容をメモすると、次の準備のためマンションに戻り、ネット検索を始めた。約一時間で目的のものを見つけると、一分一秒の時間を惜しむかのように、マンションから出て行った。

春美が向かったのは、ある工房だ。図書館であることを調べた彼女は、それを作ってもらうためにその工房を訪れたのだ。工房の職人に仕様を説明すると、完成するのに早くても一週間必要と言われた。予知どおり、アパートを出発してから一ヶ月だ。

一週間後に工房から、注文の品が完成したと連絡が入った。早速工房を訪れた春美は完成した品を手に取ると、出来具合をチェックした。

「ありがとうございます。いい出来栄えですわ。これと同じものを、あと二組お願いします」

三組分の品の代金を支払い、完成した品を手にした春美はマンションへ戻ると、その品を身に付けた。その品の名前は、遮念布（しゃねんふ）と言い、霊や念から身を守るために、数種の金属を使って作ってある。ひとつは頭にかぶるもの、もうひとつは防弾チョッキのように身に付けるようになっている。

彼女は真吾と耕平から襲われることを予知していた。そのために遮念布を作ったのだが、予知能力をもってしても、おぼろげながらにしか見えないものがあった。それが自分にとって吉と出るのか凶と出るのかさえ分らないのだが、自分の人生に大きな影響を与えるのは確かだ。

6―2

春美は遮念布を身に付けサクセスに電話をかけた。三回の呼び出し音のあと受話器が取られた。
「はい、探偵社サクセスです」
受話器を取ったのは耕平だ。真吾は外出中だ。

「岩崎さん、加納春美です。こんにちは」
「こんにちは。準備できたんですね。それでいつこっちへ来れますか？」
「そのことなんですけど、いろいろと考えてみたんですけど、今回の話はなかったことにして欲しいんです」
「えっ、急にどうしたんですか？　あれほど賛成してたじゃないですか・・」
電話で話しながら耕平は、テレパシーで春美の意識を探ろうとしたが、意識に入れない。ガードを張られているわけでもない。例えるなら、死人、あるいは岩に向かっているような感じなのだ。初めて経験する奇妙な感覚に、耕平はテレパシーをやめて必至で説得しようとしたが、春美の意思は思った以上に固かった。

一時間後、真吾が帰ってきた。耕平は春美から電話があり、彼女の考えが変わったことを告げた。

「変なんです。彼女の本心を探ろうとテレパシーを使ったんですけど、意識に入れなかったんです」
「彼女はガードが張れるのか！」
「違います。例えて言うなら死人です。生きてると思えないんです。死人の意識には入れません。そんな感覚なんです」
「いずれにしろ彼女は悪魔になった。俺たちのことがばれないうち

に死んでもらうしかないな。耕平、彼女のアパートは分かるか？」
「前回会ったときに、意識を読んだから分かってます」
「今から行って、彼女を始末するぞ」

二人は春美のアパートにテレポートしたが、部屋はもぬけの殻だ。
「くそ、逃げられたか！」

その頃春美は、赤坂の五階建てのビルの一室に居た。二階の一部屋を占いのために借りたのだ。内装も変え、必要な調度品も揃っている。いよいよ明日から開店だ。

春美は自分の未来も予知することが出来る。天気も予知出来る。ありとあらゆることを予知できる。それは占いというレベルをはるかに超えている。彼女の予知能力は、魂だけが予知すべき未来に行ってその現実を見て、再び彼女の肉体に戻ってくるというものだ。時間的には五秒から十秒だ。

幽体離脱した魂がタイムトラベルをしているのだ。だから未来だけではなく、過去にも行くことが出来る。過去の出来事を当てるのを予知とは言わないが、相談者が忘れている過去のことまで、正確に見ることが出来るのだ。

彼女が未来を予知しているとき、要するに幽体離脱しているときは、彼女にとって一番無防備で危険なときだ。予知している僅かの時間、彼女は意識をなくしているのだ。それを悟られないために目を閉じることにしている。

予知とは言っても、必ず未来がそのとおりになるとは限らない。予知した時点の後、予期せぬ外乱が生じたりすると、未来は変わるのだ。

占いの店をオープンして一週間経ったが、その間に訪れた客は三人だけだ。広告を出したわけでもなく、テレビやラジオで宣伝する

わけでもないから気にはしていない。春美の占い師としての名前は、未知予（みちよ）だ。

6－3

マスクマンと真吾と耕平は、全国各地で現金を盗み続けた。百万円から三百万円ほどの額と言っても、その件数が多いことから、マスコミは現代の怪盗ルパンとして取り上げた。世間に騒がれ始めた以上、多額の現金を盗んでも同じことだ。三人はターゲットを銀行に決め、一度に数千万円を盗み始めた。

犯人はまったく何の証拠も残さず、盗みに入った形跡すらない状況に、全国の警察はお手上げ状態で手の打ちようがない。

「長年刑事をやってるけど、ルパンを見つけることは不可能だな。どうしたものかな・・・」

神人と仁美の教育係でもある斉藤刑事は、妙案が思いつかないでいた。二人が所属する愛知県警でも対策本部が設けられているものの、誰からも何のアイデアも出ない。神人と仁美はルパン事件の担当ではないが、神人は単独で調べることにした。調べると言っても真吾たち三人の仕業と分かっているので、どうやって尻尾を掴むかだけのことだ。

ある日の夜八時、神人は真吾の自宅前にテレポートすると、真吾の意識を覗いた。耕平がいないときを狙ったのだ。テレパシーの使えない真吾の意識を覗くのは簡単だ。

真吾の意識から彼らの計画を全て知った神人は驚いた。ユートピア構想はまだしも、加納春美という女性と、自分と仁美の殺害まで計画されていた。それ以外にも、邪魔をする悪魔は抹殺するつもりだ。魔虫に取り付かれた真吾は、自分に反抗する相手をすべて悪魔と決め付けている。まさに超能力を持った殺人鬼だ。

一刻の猶予もままならないと考えた神人は、真吾の書斎にテレポ

ートした。突然現れた神人に真吾は驚きつつも大声で言った。

「天乃刑事、何しに来た！」

あまりの大声に家族が騒ぎ出し、書斎へ向かってくる足音が聞こえる。神人はすぐさま自宅へとテレポートしたが、真吾に姿を見られるという大失態を犯してしまった。捜査令状も無く、無断で他人の自宅へ入ったのだ。

翌日、杉山真吾が愛知県警を訪れた。目的は、昨夜自宅に現れた神人の行為に抗議するためだ。神人と斉藤が応対に現れた。

「斉藤さん、天乃さんは昨夜八時に、無断で私の自宅へ侵入したんです。刑事だったら何でも許されるんですか！　どういうことか説明してください！」

「天乃君、杉山さんが言われたことは本当か？」

「はい。本当です」

「捜査令状はないし、杉山さんの許可もないのに勝手に入ったということは、犯罪だぞ。なぜそんなことをしたんだ！」

「弁解の余地はありません。事前に電話すればよかったんですが・・」

「そういうことじゃないだろ！　勝手に入った理由を説明しろ！　理由によっては訴えてやるからな」

真吾の怒りは収まらない。

「すみません。虫の知らせというか、杉山さんが襲撃されるような気がして、勝手に入ったんです・・」

「家のドアはカギが掛かってたし窓もカギが掛かってたのに、一体どうやって入ったんだ！　それに私の部屋のドアも閉まってたぞ」

真吾は神人が超能力者だとうことを知っていて言ってるのだ。まさか超能力で入りましたとは言えない。意を決した神人は、真吾と斉藤の記憶を消すことにした。椅子から立ち上がると、真吾と斉藤の肩に手を置いた。時間的に五秒もかからなかった。神人が侵入したという記憶が真吾の意識から消え、真吾が今言ってたことが斉藤の記憶から消えた。

「杉山さん、今日はどんなご用件ですか?」
斉藤が尋ねた。
「あ・・、え・・っと、何しに来たんだったかなぁ・・。すみません、度忘れしてしまって・・。また出直してきます」
歯切れの悪い言葉を残しながら、真吾は出て行った。

「杉山さんは、一体何しに来たんだ?」
「さぁ、何でしょうね」

神人の額には、うっすらと汗が滲んでいた。今回は迂闊だった。神等力を過信したばっかりに、危うく足元をすくわれるところだった。ただ収穫だったのは、真吾たちの殺人計画が分ったことだ。
仁美が標的になっているのは自分のせいだと分かった。加納春美という女性は予知の能力を持った超能力者だが、現在行方不明だ。杉山は彼女を見つけ次第、殺すつもりだ。人気絶頂の魔操師マスクマンも、杉山の仲間だと分かった。

「真吾さん、どこへ行ってたんですか?」
一時間ほど遅れて来た真吾に、耕平が尋ねた。
「実は愛知県警へ行ったんだが、何しに行ったのか用件を忘れてしまって・・。何か変なんだよなぁ・・」

「天乃刑事に会ったんですか？」
「天乃刑事と斉藤刑事と一緒に、打ち合わせのテーブルで話してたんだが、用件を忘れたのも変だけど、テーブルに付いたのが思い出せないんだ。ドアを開けて中に入ったのまでは覚えてるんだけど、いつテーブルに付いたのか数分間の記憶がないんだ」

「真吾さん、恐らくと言うか、たぶん間違いないと思いますけど、天乃刑事に記憶を消されましたね。僕の考えでは、真吾さんは天乃刑事に関する何か重大な情報を掴んだんですよ。だからその記憶を消されたんだと思います」

「記憶を消すなんて事が出来るのか？　耕平、お前も出来るのか？」

「僕は人を操ることは出来るけど、記憶は消せないです。天乃刑事の能力は、桁違いですよ。もし他の能力もあるとしたら、それも桁違いかもしれませんね」

二人は神人を甘く見ていたが、自分たちよりはるかにレベルの高い超能力者かもしれないという恐れが湧くのを、無視することは出来なかった。加納春美の予知能力があれば、神人を倒す方法が見つかるのにと考えたが、春美を探す方法がない。真吾たち三人は、しばらく現金を盗むことを中止することにした。完全犯罪とは言え、神人がどれほどの力を持っているのか調べることが先だと判断したからだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7112w/

神様が宿る男

2011年11月10日07時39分発行